

明治三十三年十一月二十五日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第貳拾八號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第二十八號目次

論 說

「トラスト」(獨占組合)

腕力價值論

耕地改良論(承前)

文筆の必要を論じて敢て諸君に促す

品位論

史 傳

草野清民小傳

ベネヂクトス、スピノーザ

雜 錄

讀書雜誌

から山の煙

踏雲日記

瓦 鳴

牛塚虎太郎

S. A. 生

T. K. Y. S. 生

愛 綠 生

豐洲 漁 郎

藤井 乙 男

K. N. 生

浦井 恒 堂

山 口 雪 秋

山 口 雪 秋

敲門 瓦 子

自 殺 文 苑

高見之通

The last fate of Atsumori

I. N.

湖心の月

は く う

夏の旅(新體詩)

大村 耕 山

和 歌

村上 函 峰

俳 句

明石 華 陵

謙齋遺稿序

漢 詩

寬猛相濟論

雜 報

送舊教官迎新教官、卒業證書授與式、送卒業生、

學科規定の改正、新代議員の姓名、始業式、迎

新進諸氏、禁酒の勵行、監督規定、公認下宿、

特待生、北辰會小會記事、校友會報告

附 錄

入寮宣誓式の記、行軍演習記事

北辰會雜誌第二十八號

論 說

「トラスト」Trust (獨占組合)

牛塚 虎 太 郎

「トラスト」は現今經濟界の焦点にして米國に於て最隆盛を極め各種の事業皆「トラスト」組織から
ざるはありと、我國に於ても九州の石炭業者京坂地方の紡績業者屢其組織を企て、未だ成らざる
も近來米國の實況を視察して歸たる學者實業家皆之を口にして之を羨まざるはあり、余輩不敏元
より經濟海波瀾の何たるを解せずと雖近來少く研究し略其概念を得たり、茲に自ら拙く北辰會
誌の餘白を汚んとす

近代物質的文明進歩の迅速なる驚べきの至にして巧妙なる理化學の原理を日常の殖産工業の上に
應用し今日一日間の生産高は優に百年前數十年間を費して生産したるものに等きは紡績機業採鑛
其他一般の生産業に於て普く見る所あり

Trustの起る所以

生産過剰及自殺的競争防止

昔日文化の開けざる時代に於ては人々單に自己又は自家の需用を充す丈の生産(所謂箇人的生産)
を成し居たるも時勢の進歩に伴ひ健全なる社會を組織するや人々自己の技量材能に適したる事業

を撰て之に従事し己の需用を後にして社會の需用を先に以て自利々他圓滿の現時の社會的生產時代を作るに至れり、而斯る時代に於て貨物の價格は唯其需用者が認むる効用の程度によりて定まるものあれば或種の貨物にして其生産高社會の需用を超過する事あらは其價格下落し生産者は收支償はず生産費すら辨得ざる大損失を蒙るに至る、故に生産者は豫め社會需用の額を察して其生産高を増減し間接に價格の低高を致し以て前記の不運を免るゝを得、然るに近代日新の學理を生産業に應用するや能く些細の費用を以て多額を生産をなし得るを以て新舊の機械を用る一日あれば一日の利あり器具機械の發明は非常に歡迎さるゝの結果有功なるもの日々に發明せられ生産を容易にし産額を多くし其結果生産過剰とされり、即ち米國にては一千八百六拾年より七十年迄我國にては日清役後の如く一時經濟界好景氣を呈し會社熱盛とあるや暫時にして此生産過剰となり經濟界は嘆ずべき情態に陥る米國にては一千八百七十年より八十年迄の生産者相互の自殺的競争となり遂には八十六年の Panic を生じ、我國にては一昨年來の不景氣とされり、即ち「ミル」などが切りに主張したる人類進歩の本源なりこの自由競争は前陳の如き場合には同業者互に他を賣倒さんとする結果自殺的競争とある、自殺的競争とは例へば石炭採掘を營む二會社互に他を壓倒せんと欲し價格を引下げ資力の限り競争をなし遂に一方は資金に窮し倒れたりとせんや此の會社が勝たる會社に合併せられざる限は其炭坑は更に新ある資本主を得て競争を繼續するに至るべし、又全く一方が降服したる場合に於ても勝利を得たる方は競争の爲め非常の損失を蒙るべし、而かも此の競争の爲に失たる所を取返さん爲其獨占權を弄し高價を唱ひ暴利を博す事あらは他の

資本家は直に資本勢力を投じて此業に従事し更に又競争を開くに至る事もあるべし、故に此種に競争は雙方の利を殺ぐ者にして自殺的競争の名ある所以あり、又或貨物の生産高り社會の需用を超過するに至れば其價格の下落するは明にして一般需用者には幸福なるが如しと雖も生産者の不幸此上なく今年前半期に於ける我國紡績業の如く或は一部機械運轉停止とあり或は夜業中止とありて企業家は莫大の損失を受け産業界の資本は非常に減滅せられ延て國家經濟上に及ぶ影響頗る大なるものあるべし、抑物價は漸々下落する事は常に世人の歡迎する所なれとも之れ必しも喜ぶべきの現象に非ず、若し物價の下落にして生産費減少の結果あるときは生産者に損失なくして消費者を利するか故に其の經濟上好良ある事は言を待たずと雖ども若し物價の下落にして通貨の減少又は生産過剰に原因し生産費を償ふ能はざるか如きもれなる時は之れ決して經濟上好結果を生ずるものに非ざるなり、此場合には生産者は何れも損失を蒙り甚くきは破産の慘狀に陥る者あるべく經濟界は一般に不景氣となり一國經濟の發達を害する事甚く、特に勞働者たる下級社會は非常の損失を蒙るべし、何とされは企業家は物價下落の爲め收支相償はざるに至れば勞働者の賃銀を減少すべく又不景氣の結果事業縮小するときは數多の勞働者は其業を失ふて飢餓に叫ぶの慘狀を呈するに至るべし、而して此自由競争生産過剰の結果たる物價下落に關する矯正策は三十九年來學者の熱心研究せし所なる其矯正策は之を二種に大別するを得べし、第一ハ貨物の需用を増加する事を目的とするものにして彼の輸入制限の爲めに設けたる關稅法の如き其一なり、蓋し輸入税を高くして外國品の輸入を制限するは之れ即ち國內に於て其國の產出貨物の販路を擴張す

る所以なり、第二種の矯正策は貨物の競争的生産を制限して其價格の維持を目的とする生産者間の合同組織にして即ち「トラスト」是れなり、而て輸入制限を目的とする關稅法は外國同業者の競争を防禦して國內の「トラスト」組織に便宜を與ふる事は争ふへからざる事實にして現に米國に於て「トラスト」の盛行する所以は同國關稅法の結果なりと論する學者少からざるあり

「Trust」の組織を助くるもの

大企業の利益。自然の有様。特許權其他

今日企業は大仕掛のもの最利益多く「最廉最良の生産法は大仕掛にあり」とは經濟學上の確言にして大企業の一方には資本大なるを以て精巧なる機械の購入細密なる分業は勿論高等の技師及勞働者雇入れ便あり又他の方には信用大なるを以て資本の融通を能く、利子も從て低廉なり又工場、建物、器具機械、職工の監督、原料の買入、製造品の賣却等に關する費用は大に之を節約する事を得べし、例へば拾萬圓を以て銀行業を營むも百萬圓を以てするも何れも頭取は一人にて足り百萬圓ありとて拾人を要せず之に要する家屋も百萬圓の銀行なりとて拾萬圓は銀行の十倍の建築費を要せざるは明なり、次に天然の有様により或貨物の多き地方は自ら獨占的組合を作る事容易なり例は我國九州に石炭の「トラスト」起らんとし京坂地方に紡績「トラスト」起らんとするが如し。猶ほ鐵道、水道、瓦斯、電氣等の如きものは自然的獨占業と稱せられ此等の事業の一度或地方又は都市に設けられたる時は新なる會社を起して前者と競争するは容易の業にあらず、次は法律にて特權を得たるもの即專賣權及著作權の如きものは是あり、然れども此獨占は發明に捧げたる辛苦の

報酬にして文化を奨勵するものとし今日非難するものあり、英國にて一千六百二十四年普通の獨占業を廢したる際ゼームス王は特に向ふ十四年を限り未曾有の製作若くは新技術にして代價を引上げず國家に害を及ぼさざるものある時は其發明者に特許を與へ得る權能を國王特有の大權とする事を定めざり、之れ實に英國現行特許條令の起源なりと云ふ、右に述べたるもれ、外私設鐵道會社の或會社の貨物輸送に對し割引するか如きも大に此組織を助くるものあり

斯の如くにして組織されたる「Trust」は如何なるものなるかを略説すれば抑「Trust」とは吾人が大仕掛なりと認むる企業家特に株式會社が數多集まり各會社は其合併したる會社の財産を「トラスト」債券に換へ各人は之を株式會社の株券の如く所持し最も才幹技量ある人物を選べて之を「Trustee」となし一切の事務を此人は意に盡に行はしむ、斯く「Trustee」は其組合の全權を有するを以て種々ある統計學者を雇入れ全國又は一地方の需用高を調査せしめ之により生産高を決定し配下の工場に對しては各其生産高を指定し又時の事情によりて工場の閉つべきは閉ぢ擴張すべきは之を擴張する等の方法を以て物價を整理するものにして經濟界の Absolute Monarchy あり

然れども此組織は人民の權利を尊重し可及的政府は干渉保護を排斥し自由競争を以て人類進歩の本源とする主義に反し獨占的傾向あるを以て世人は攻撃甚敷米國「ジョルジャ」州れ如きは一千八百七十七年に州會は「或團體と他の團體との間に商業上の競争を減壓し若くは獨占を奨勵する目的に出る契約若くは協同を爲さしむるを得ず右の如き契約協同は總て無功なるべし」と規定したる程あれば「トラスト」の多くは秘密になし營業決算等の報告を公にせざれば外より之を窺知する

甚く難く組合員と雖充分なる事を得知る能はず、加ふるに Syndicate Pool 等相類したるもの頗る多く標本的「トラスト」はと云は、余輩は彼「ジョンデ、ロックフェラー」John D. Rockefeller が一千八百六十五年「ペンシルバニア」に於て英人サミュエル、アンドリュー Samuel Andrews が發明したる石油分析機械を用へ共に僅三千弗の資本を以て石油製造所を起し其大手腕を以て八十二年に至り公然たる組織をなしたる「The Standard Oil Trust」を擧げざるを得ず、現今此會社は世界石油産額五拾餘億「ガロン」の内露國に産する二拾億「ガロン」を除き殆他の三拾餘億「ガロン」(「一ガロン」は凡我二升五合)の一手販賣を握り其利益配當は三割三分資本金實に壹億九千四百萬圓に達す設立後數年ならずして全米國の石油業を一手に握り我國に産する八百萬「ガロン」の石油亦將に彼れ手に歸せんことす、蝸牛角上の争に汲々たる我國の所謂實業家なる者彼の鎧袖に觸るゝは愚か彼が事跡を見て己に阿然絶倒するものあるべし

Trust の分類

此組合組織は未だ我國に於て現はれざるを以て「トラスト」の「ライオンチー」たるフォンハーレ氏等の説きたるものを引用す、

一、形式の不定なるもの

甲、同種の事業家相互の競争は禁せずして只た一般の爲にする組合

例へは米國 Brewer's National Convention が金員を出し議員選舉運動をなし議會に於て課税問題を動かさんとするが如きもの

乙、右の外商業上は慣習、商品目錄、時價等に關する規則を有せる組合

例へは同業者に價格割引を一定するもの New York Milk Trust 之に屬す、

丙、定期に集會して價格を一定し之を市場にて取引する爲共同の代理人を指定する場合

無烟炭業者及鐵道業者の中に斯るものあり

二、稍形式を具へ實益上の關係により強固にせられたる規約

甲、時には採掘年額に關する決議より市場に出すべき定量價格を制定し之を記録に付るもの

此の種の契約と Standard Oil Company & Oil Produce Association との間に結ばれたる事あり乙、團結を強固ならしめん爲に時には罰金を課し若くは所得の一部を共同資本中に拂込ましむるもの

マサチューセツト州スプリングフィールド市の「スタンダード、エンヴェロップ、カンパニー」の如き之なり

丙、利益配當の制を以て割合を支持する事あり

例は「ホイスキートラスト」及生命火災保險會社に此類あり

三、務めて一切の利益を同一にせん事を計り又遂に其目的を成就せる同盟

甲、名實共に各箇人の事業を保存する場合

イ、各會社株券の大部を「トラスチー」に交付して「トラスト」債券を得るもの、

ロ、株券の全部を「トラスチー」に交付し「トラスチー」は「トラスト」債券を發行し又先の所有

者は各自會社の財産價格を定限として抵當を取扱ひ時には附加證券を受くる事ある者

「ホイスキートラスト」は之に屬す

ハ、若しくは「トラスト」債券交付の代償として該財産を無條件にて「トラステー」に交付する者

「スタンダード、オイル、トラスト」之に屬す、

乙、事業を合併整理するものにして左に二種あり

イ、貸與又は借受によりて一時の整理を行ふものは是れ鐵道に在ては普通の事あり

ロ、永久の整理を計る者には左の三様の別あり

一、買 賣 一箇の幹線鐵道會社が他れ支線を買収するが如し

二、合 同 「ニューヨーク、セントラル、エンド、ハドソン、リバー、レールロード、

カンパニー」の如き之あり

三、新に大會社を設立して既設の會社を悉く吸収す

Trustの 利 害

先づ其の弊害の重あるもれを擧ぐれば左の如し

一、Trustは自由競争主義に反し獨占業を作る傾あり従て品質の改良を計らず

二、小企業者と兼併し巨額の富を小數者の手に吸収し貧富の懸隔を大にし困難なる社會問題を惹起す

三、必要貨物の代價を騰貴せしめて一般需用者を苦め、原料生産者には自己に欲する價を指定す、

四、資本と勞働との闘争は現今經濟界の特色あるもの「トラスト」は實に資本の大合同なるか故に其勞働社會を害するは勢の免れざる所なり又「トラスト」組織に依り勞働を節約する事大あるに故に勞働の需用之れを爲めに減少し従つて勞働者其業を失ふ者少からず其他大企業に伴ふ總ての弊害あり

利益の点を擧ぐれば左の如し、蓋し「トラスト」は必要に迫られて起りたるものなれば其の社會を利するの点あるは當然の事なり

一、Trustの組織さるゝや前陳の如く極端なる競争を止め生産過剰を防ぎ延て一般經濟界に景氣を與ふ

二、大企業より生ずる利益は皆之を享有する事を得

以上れ如き利害存在するを以て自由競争主義を旌旗として「トラスト」に反對する經濟學者あれば歴史的思想の感化を受け近世大資本主義及大企業の点より之を賛する少壯經濟學者あり政治界に於ても非中央集權主義を以て保護貿易及「トラスト」に反對する Democrat あれば他方には個人の方の及ばざる所は同盟又は中央集權を以て之を補ふべしと唱ふる所の Republican あり

最後に余輩の所信を陳ふれば元來「トラスト」の弊害あるものは先天的固着のものにあらず故に其弊害は銳意之を抑壓し其長所は益々之を發達せしめなば實に將來有望あるものあるべし唯獨占と云ふを以て感情上之に反對するが如きは取らざる所なり之を経験に徴するも各「トラスト」は其獨占權を弄し價格を暴騰せしむる事なく長日月の間に次第に其價格を廉にし其品質を改良したるも

のみ成功したり彼の米國澱粉「トラスト」の如き一時價格を昂くるの愚策に出でたるを以て非常の競争を招きて瓦解に瀕したる事ありき、思ふに一箇人の企業は株式會社の企業とあり今又一轉して「トラスト」組織たふんとするは近世經濟海の大潮流の向ふ所にあふざるならん

腕力價值論

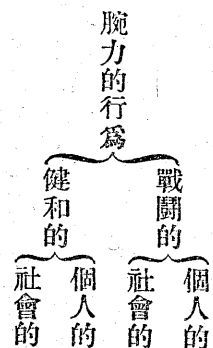
S.

A.

生

腕力の強弱とは必しも手腕力の強弱のみにあらずして廣き意味に於ては身体筋肉の力の強弱を謂ふは世人のは認する處にして予が論せむとする腕力ある者も之に外あらず抑も吾人が祖先たる太古の非社會的人類にありては未だ精神的發達少なく従ふて現はるゝ行爲も利己の一方のみ傾き更に他人の利害を顧みず常に戦闘と事と一日の安寧だも望む事能はず其腕力は終始戦闘的生存競争にのみ用ゐられ腕力は強き者は腕力は弱き者を壓し其財産を奪ひ遂には其生命をも奪ふに至る然れども人類稍や發達して社會と組織するの幸福を見出すに當りては常に好で伴侶と共に生活し相輔くるの利益は終に其間に交情を醸し利害の共同は喜憂を共にせしむるに至り尙ほ友の幸福を祈り友の不幸を憫むに至りては以前生存に必要ありし腕力も遂には無用となる加之日常の安寧幸福を望まむとするには腕力の不必要なるのみならず貴重なる時間を最も不生産的に失ひ身体を損傷し社會の秩序を亂す大害物たるを自覺するに至る是の時に當りて尙ほ腕力を要するは他社會の被害に對する防禦に必要な腕力及び所謂肉体的健康を養ふに必要な腕力殖産興業の如き自營に用ふる腕力のみとある斯の如く腕力ある者の諸方面に於て用ゐられ亦其行爲に於ける目的

を異にするを以て吾は假に分ちて戦闘的腕力及び健和的腕力の二種とせず戦闘的腕力とは進歩したる社會に於ても尙ほ其目的の戦闘的なるものを云ふ假令へば柔術擊劍術の如き者に養はれたる腕力廣くしては社會的團體即ち國家に對する義務として武備的に養はるゝ腕力の如し是に反して健和的とは個人の健康即ち肉体的幸福及び社會的はた個人の平和幸福を計るに用ふるものにして假令へば公共的事業に用ふる腕力の如き其一なり太古の人民にありては最も生産的に腕力を用ふる事少く唯だ戦闘的腕力に於てのみ發達したりしが稍や精神的作用の發達して利他心を有する社會的人類に至りては戦闘的腕力を用ふると少く代るに生産的及び肉体的幸福を得るに用ゐる腕力發達し來り太古の非社會的人類に比して比較的に健和的腕力の増進せるを見るに至る斯く腕力は二類に分ち得と雖も其用ふる地位を異にせるを以て之を更に二大別して社會的個人的とせず社會的とは利害體戚と共にせる國家の如き社會的團體のために用ふる腕力の種々を謂ひ戦闘的腕力としては今日の軍役の如き健和的腕力にありては個人自身の爲め或は個人と個人との間に於ける相互的關係より生ずる一齊の腕力行爲を謂ふ以上論ぜし所を圖にて示せば左の如し



次に社會の發達と戰鬪的腕力との關係を述ぶるに當りて二大別して人智の發達及び道義思想の發達とあり次に第一人智の發達と戰鬪的腕力との關係を述べむ

人智の進歩は決して戰鬪的腕力の發達と相伴ふ者にあらず何と云へば戰鬪的腕力は利益幸福と相伴はざればなり難者或は曰はむ太古非社會の人類に於ては戰鬪的腕力の發達せし強者は當時の得利者幸福者たりしにあらずやと是元と皮想れ見たるを免れず何と云へば若し彼等をして社會を組織せしめむの社會を組織せずして戰鬪により得利を得たる強者は猶ほ一層個人的社會的に利益を社會を組織せる上に占め得なければなり斯の如く戰鬪的腕力は如何なる方法に用ふるも利益と衝突を來すは明なる事實にして個人的には貴重なる時間を最も無益に消費せしめ財産身体を損ひ社會的には社會の秩序を亂し人類に幸福快樂を破壊する等以外其結果なり若し鬪争を爲す時間を生産的事業に費さしめば社會は發達し如何のより人類をして安寧幸福に來らしむるや知る可うらず鬪争を事とする野蠻人の發達せざるは是の故なり戰鬪によりて被りたる損害と同時に若し是時間をして生産的に用ゐしめば得る可なりし生産物とは正しく彼等が無益に消費したる社會の損害たらずむばあらずしも彼等は之を知ざるが如し戰鬪的腕力は到底利益と相伴はざる者あり

腕力は往々感情に因りて用ゐらるゝ事あり感情の動機によりて起りたる吾人の腕力行爲は無意識なり意識なきは利益幸福を計りて後行ふにあらずるが故に結果に於て偶然利益幸福たらずむば終始利益幸福に伴ふ者にあらず個人的にしては憤怒れ余り他人を傷付くるが如き社會的にしては感情に制せられて國家に大害を起すが如き往々あり但し感情にも教養的に出たる者少からず假令

へば宗教教育に養はれたる感情の如ししかも此の感情に因りて現はるゝ腕力行爲も無意識に出づると雖も反て社會の幸福利益を増進する事あり假令へば義俠的行爲の如き是なり義俠心よりいれたる感情のため弱者を助け強者を折くが如きは現時の社會に於ては反て個人的社會的利益幸福を及ぼすは事實なり然れど詳論すればは亦人智の進歩に因らざれば斯の如き社會的道德を見る能はざる可し然のみならず畢竟斯の如き腕力的行爲は社會制度の不完全によりて要求せらるゝものにして苟くも完全なる法律制度を有する社會にありては斯の如き戰鬪的腕力行爲は其必要なきは勿論反て其害たるを認むるに至る要するに感情は往々にして吾人に戰鬪的腕力を勸むる事あるも人智の發達に必要な理性は吾人に戰鬪的腕力を教へず

人智の發達は極端に走りて奸智なる者をいだし世人の所謂る智識あるものと稍や其趣を異にし或る意味に於ては善惡兩性の者なり是吾人の所謂る智略なる者の一部にして人智の發達と戰鬪的腕力行爲との關係を述ぶるに當りては論ぜざるべからざる者あり

抑も奸智ある者は個人的及び社會的に其害を及ぼす事少からずと雖も戰鬪的腕力の如く大なる損害を及ぼす何となれば奸智は元人智の進歩より來るものなれば尙ほ其時代の法律を犯して利を得むと試る者なり何と云へば之を行ふは智略なきに同しければあり而して法律は社會人類の幸福安寧を妨ぐる者の罪を見出さざる限に於て刑罰を定むる者なれば道德上の罪惡換言すれば法律以外の罪惡の範圍内に於てのみ奸智の弊は行はるゝものなれば其社會に害を與ふる事も戰鬪的腕力行爲の大害を及ぼす如くあらず戰鬪的腕力行爲は所詮法律上の罪惡及び道德上の罪惡を共に犯さ

る可からざるは明にして奸智の道德上の罪惡のみを犯すより其社會を害する罪も亦大なるを知るべきなり然れども此處に取除の場合あり吾人往々にて腕力行爲の奸智的行爲より道德上の罪惡小あるを感ずる事あり是畢竟するに二種の原因より成れり一は或種の戰鬪的腕力は奸智より社會に害を及ぼすの少きと一は道德を感情に訴へて重視し過ぐる弊より來る例令へば病に罹りて將に死せむとする人を見て救はざるは其人を殺すの罪より其罪惡大なりと云ふが如し是畢竟其心實の陋なるを謂はむがために出でたる極端の道義論にして元より論ずるに足らず道義あるもの、社會のために存するを知れば社會人類の幸福安寧を害せざる限に於ては智識の利用を許さざる可からず

而して人智發達に従ふ人心一般の傾向は法律の良く腕力的行爲を抑制し得るの力を認むるに至り最も平和的に自己の利益を計り他人と利得を争ふに最も平和的言論辨舌を以てあすに至る是開明の秩序にして戰鬪的腕力の用は日に減つ言論正否を以て利害損得を決するに至るなり然るに今日にあり其戰鬪的腕力を用ひて是非曲直を定めむとするは國際に於ける一事なり國家間の戰爭は往々感情によりて起る者ありと雖も概して曰はしめば利益の衝突に出づる者多し利益の衝突に多くの國富を費すは是れ愚の極と云はざる可からず現時各國に於ける戰鬪力は日に月に増加せむと一且つ止む所を知らざるが如し強國は巨萬の國財を擧げて是に投じ併吞せられむとする貧弱國は己の財を盡して尙ほ之を防禦するに難く世界に於ける幾多の勞力と財寶とは最も無益に最不生産に用ゐる加之是がために幾萬の人命を失ふ若し戰爭をして全く國際上に於て跡を絶しめば世

界萬國の幸福擧て數ふる可からざるべし難者或は曰はむ然りと雖も國際上の戰鬪は到底止む時なしとされども吾人をして曰はしめば是恰も非社會人類が社會を考視するが如くと云はざる可からず彼等が利益の衝突は決して社會を組織し得ざるが如く感ずるが如し今日の狀態より將來を計るは鬼神をも尙ほ及ばずしかも人智の進歩は今日れ如き戰爭を許さざるに至るは理論に於て明なり世界統一は尙ほ望み得ずとするも國際間の戰爭は全滅し得るの時を望み得べし何とされば今日進歩しつつある外交術は利害を以て根基とあす戰爭は兩者に於ける大なる損害なるのみならず平素兵士を養ふ巨額の國費と最も生産力に富める血氣の兵士とを最も不生産に消費するはやうて平和的手段を以て戰爭を全滅するは原因たざる可からず斯れ如く戰鬪的腕力は人智發達と絶對的に相伴はざる者なり次に道德思想の發達と戰鬪的腕力の關係を述べむ

道德思想の發達とは人類が理想の平和幸福に近かむとするの人心の傾向を謂ふありしかも戰鬪的腕力行爲は是に反して最も悲惨なる不幸に陥らしむる者なり個人的鬪争は個人を害し社會的鬪争は社會を害す吾人が最も高尚なる道義とあす仁愛或は己の欲せざる所人に施す勿れ或は敵を愛せよと云ふが如きは最も是腕力行爲に撞著を來る者にして到底戰鬪的行爲は道德と相入れざる者なり

然れども進歩せざる社會に於ては往々にて戰鬪的腕力行爲を以て道德とあす者あり假令は吾邦維新以前に於ける復讐れ如き尙ほ世人は一般に道義として之を見做し是を獎勵せしにあらざるやされど社會の進歩に伴ふて道德思想の發達は是等の腕力的行爲をして永久に其地位を保たしめざる

は勿論にして不俱載天の敵と雖も其敵にして一旦其罪を悔ゆるに於ては道德上にては其故罪を無問ふる權ありしも完全なる腦力を有せざる兒童にして人を殺すも尙無罪あるが如し況んや已の親夫にして不正の理由により他人より殺されたる場合に於てをや是をしも不俱載天の敵として復讐するを道義に叶へりといふ時は恰も不正は正を滅するに撞着を來さざる可からず是種の論者は余りに感情に走りて理性に訴ざるを攻むるなくむばあらず

加之今日の文明社會は是等が殺人者に對して適當の刑罰を以てし吾人をして遺憾なうかしむるにありては昔日の不完全なる社會は見て以て不道義となす處も今日に於ては不道義となさざるに至る畢竟愛他の行爲に戰鬪的腕力の必要を見るが如きは法律の不完全なる社會のみにして今日以後に於ける進歩したる文明社會に於ては必要なのみならず反て社會及び個人に害を及ぼし大なる不道德と成るや必せり古は弱を輔け強を挫く義俠心ある者も愛他の變性的道德なりしが社會の進歩は刑法に完全を來し弱を壓し理を屈ぐる腕力者を能く制し得るに至りては義俠的行爲の必要は全滅し反て俠心を起して腕力行爲を爲す者は不道德者として法律を以て社會より刑せらるゝに至るは自然の趨勢なりされども吾人決して俠心の不必要を謂ふにあらず唯だ法律完全なる社會には其行爲の不要を謂ふれみ

現今の法律は尙ほ正常防禦の名の下に戰鬪的腕力行爲を許せりされども道德上より其行爲を論ずれば無價値の者あり是れ道德法律兩者の罪惡を定むる標準相異なればなり道德は理想を以て標準となし法律は實際を以て標準とあす法律は人に對して教ふるに正當の理由ある時は他人の腕力行

爲を正しく自己の腕力行爲を以て拒く可しと云ふは實際上に訴へたる議論にして到底道德の教ふる如く他人の腕力に堪へ猶ほ極端に於ては我身を失ふも恨まずして他人の不徳を諫しむるは實事上困難にして容易に人をして行はしむるに易からざるためのみ若し實際上に於ても尙ほ道德の教ふる如く他人の腕力行爲に堪へ他人を諫しめ善に歸らしむるの容易に行ひ得ん時は法律の正しく道德と一致する時なり理想と實際との同一の点位に來らざる限は法律と道義との罪惡の標準も又異にせざるべからず以上論ずる所は個人的道德に關すれども社會的或は國家的道義より戰鬪的腕力を觀察するに二十世紀の今日に當りて己と利害を共にせる社會或國家の事あるに際し献身して腕力行爲を成すは唯一の道義として吾人の尊重する愛國心より出づる行爲とあす然れども是前述せし如く論せしむれば國際間の戰爭なきに至りては不必要なるのみならず終に不徳とあるや知る可きのみ次に現社會に於ける戰鬪的腕力に利弊を論述せむ

以上論ずるが如く社會は進歩するに従ふて戰鬪的腕力の弊害大なるは人の是認する處あれども今日の如き社會狀態に於ては亦必要大なる者あり假令へば國際間に起る戰爭に於けるが如く或は他人腕力に對する正當防禦に於けるが如し是畢竟人智及道義思想の進歩せざるに因る吾人往々功利說者の戰爭を以て世界人類の幸福を享くるに唯一の手段なるを説くを聞く是元より大なる誤謬なり何となれば若し平和的方法を以て國際間を戰爭に代ふるや世界に於ける戰爭を目的として用ふる生産的費用は變じて如何ばかり人類を幸福たらしむるや知るべからず其弊害に至りては最もく前論の如く人智道德の發達に害あるは其最大なるものなれども猶此の以外に弊多し假令へば戰

闘的腕力は個人の自由を束縛するに用ゐられ強者は弱者の自由を奪ひ理を曲て非理に従はしむる如きは戦闘的腕力の個人に及ぼすの弊なり國家間にては戦闘力の大なる國は貧弱にして戦闘力なき未開國に對して屢々不法の行爲を成し彼等が自由財産をも奪ふは其弊の大なるものなり現今支那土耳其古れ如き貧弱國にありては到底歐米人の好餌たるを免れざるが如し基督教國文明國として自から負ふの國にして既に然り實に今日に國際間の道德は未だ發達せず太古の非社會人類の利益のため戦争をなすが如し唯だ個人間國家間の差あるのみ大義名分の正しき貧弱國は不正の強國のために壓制せらるゝは野蠻の極と云はざるべからず以上戦闘的腕力を論じれば次に社會進歩と健和的腕力との關係を述べむ

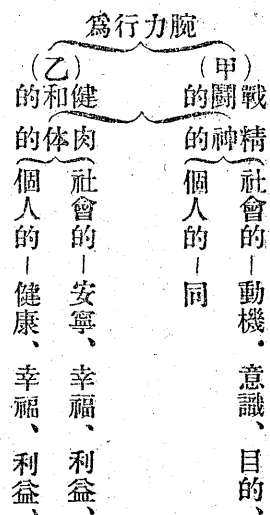
健和的腕力は個人的及社會的發達に供ふ者にして少くとも物質的文明の要素たるは疑ふ可からざる事實にして人類の有ゆる職業は是の健和的腕力と相待ちて其發達を計ざる可からざるなり精神的發達も亦之に因縁するもの少うらず或る範圍に於ては健全なる精神は健全なる身体に宿るものにして一國民は能く健全なる身体を有するときは亦能く精神的發達を來し或は科學界に或は思想界に或は國民道德等の進歩に及ばす勢力は擧て數ふ可からず亦個人的利益として自己の職業を機敏に最も手際能く爲すが如き或は因て得る肉体上の快樂等の如く利益其他に猶ほ多きに反して戦闘的腕力の自身を損し他人の幸福を害し不生産に其時間を費るに比して猶ほ健和的腕力の貴重なるを知る可し現今の日本教育が最も体育に力を盡せる如きは最も其當を得たる者なりと雖も往々極端に走りて戦闘的腕力を獎勵する者あり是元より誤れるの甚だしき者にして苟も其智力に因り

て判斷し腦力に訴へて是非を正さしむ可き學生をして稍やもすれば感情に走らしむれば弊ある戦闘的腕力を強ひて獎勵するが如きは尙ほ尺を延べむとして丈を損るの愚ならずむばあらず是教育の良法と云ふ可けむやされども例外無きにあらず例へば兵式体操課の如きは學生が後年國家事あるに際し其義務を全うせしむる練習に外あらずして是吾が前述せし如く國際上の衝突の能く平和的方法に因りて決せられざる限に於て到底國家に對する義務たるは免れざるなり然れども其他に於ける戦闘的腕力例へば柔術擊劍の如きは何れ要ありて之を獎勵するの社會は無法の亂暴者に對しては刑法を以て待つ何を苦で國家教育が學生を導くに戦闘的腕力を以てなすの是れ吾人の解する能はざる者なり無用にも戦闘的腕力を以て導かれたる學生は後年社會に出で益々其必要なきを感ずるに至り稍やもすれば是を以て己が不正の行爲を遂げむがために利用するが如きに至るは現今社會に於ても同現象を見る事往々あり畢竟一は精神的教育を輕ざる現時教育の弊に出ずる者多く若し學生にして良く徳化せられたる者ならしめば遂に其戦闘的腕力も用ふるなくして止まむのみ然れども世人誤て戦闘的腕力を獎勵するを以て能く士氣を勵し敵愾心を養ふ者となし甚だまきに至りて愛國心を發揚せしむるに足るとなす是種の論者は因て起る動機の何所の邊にあるかを知らざるものにして苟も國家の教育家たる可き者の云ふ可き處にあらず愛國心を起さしむるに孔孟の教あり何を苦でか腕力に待たむ人の感情は小事にも激し易ししかも德育は道義的感情を養ひ發達せしむるにありて是に戦闘的腕力を以てすれば恰も水素に火を近くるが如しさらざとも燃燒質なる水素は火の近くを見るや相求引して烈火を出し傍者を害す感情は稍やもすれば戦闘

的腕力を引用せむとするは止むを得ざる事實なるにも關はらず學生を導くに戰闘的腕力を以て爲すが如きは愚の極なりと云ふ可し

是に反して健和的腕力に至りては能く智腦を啓發し徳器を成就するに欠く可あらざるは世人は認むる所にして健全なる身体は健全なる腦力を發達せしめ關接に於ては健全なる身体にのみ存する心的快樂はやがて道徳思想を發起せしむる動機ならずむばあらず加之健和的腕力は自營的職業を占すには唯一れ手段器具にして能く發達せる健和的腕力は物質の文明を來し人類の幸福利益を増進せしむるは論なき所にして亦是腕力のために一も道徳と衝突せざるは勿論反て良く道徳を行ふの手段とあるものあり以上論じ來れば兩腕力の差違や、明ある者あるが如しと雖も再び次論に詳しく其價值と共に述べむ

前論せし如く腕力は健和的戰闘的の二類に分ち更に區別して社會的個人的の二種とあす此の兩類腕力を尙は精密に其性質を解説せむとすれば先づ吾人は因て起るの動機望み欲する目的之を行ふに當りて意識の有無を論ぜざる可からず亦其價值を定むるには更に精神的と肉体的とに分つ精神的の價值とは換言すれば道義上の價值をいひ肉体的の價值とは肉体的利益を云ふなり是の内其心的作用の價值を定むるに當りて困難ある者は意識の有無あり亦肉体的結果に於ける兩者同地位にありて其趣を異にせるものは個人的に於ける健康は社會的に於ける安寧是なり是を詳論せむがために其區別方法を圖に示せば



の如くにして精神的とは行為の原因をなす心的作用を謂ひ肉体的とは其結果を謂ふなり

抑も兩腕力行為に於ける原因となる心的作用は兩者大に異にせり第一甲にありては其動機とする所は不徳義なる感情及び智謀にいつ唯だ進歩せざる今日の如き國家にありては他國よりの被害に對する國防的に用ふる腕力以外には亦道義的ある動機なま乙は是に反し不道義なりざる或は利益を見て欲するが如き理性に出づる事多し第二意識にありては甲は利害を顧ず一時の感情に因り無意識に出づるもの多し結果に於て偶然道徳にかなはず終始不道義あり社會的にしては不徳の理性に出づる者多きに反して乙は有、無、意識にいつと雖凡て無害或は道徳的あり第三目的に於ては甲は戰闘にあり乙は健和にあり以上精神的原因に於ても甲者の乙者に劣れるを見る可し

肉体上の結果に於て甲は社會の安寧を來さざるのみならず戰闘を目的となすが故に個人の身体を傷害す第二幸福利益も甲は目的の戰闘的なる限は不幸不利たるは知る可きのみ乙は是に反して其目的幸福及び利益に因りて動くものあれば其結果亦幸福利益あり

然り然らば吾人は是に於て戰鬪的腕力の健和的腕力の價值よりも少なきを見るに足る可し
近時我邦の道德界は日に衰頹に趣き殊に日清戰爭後は是に加ふる社會の人事皆殺氣を帶び來り
ぬ是れ戰後の余弊として免れ難きの事實なりと雖も一は社會の趨勢日に物質的文明にのみ走り精
神界の消息には絶て耳を傾くる者なきに至しによるかむばあらず是が爲め現時の宗教界は瞑り
教育界は日に振はず所謂戰後經營なる者の稍や教育界に光榮を添へしが如きも畢竟是蛇足に過
きず物質的利益なき所には人耳を借すを好まず有ゆる物質界に長足の進歩を與ふるの弊は延いて
道德界思想界を害し無智文盲の徒は元より學生に至る迄日に月に墮落せしむるに至れり教育界は
彼等の徒を制御する能はずして警察の手を借りて是弊を正さむとす國家の恥辱はより大あるはな
し警察の力能く其不正の行爲を防ぐに足るも精神上の墮落は絶て救ふ詮なししうも今日の教育界
是等無頼の徒に戰鬪的腕力を與て導くむとするに至りては恰も虎に鋭牙を與へて野に放つが如し
豈無害にして止まらむや彼等無頼の徒は亦好で黨を作り白晝鄙行を爲ししものも悟として恥ぢず偶
々其罪を問ふ者あれば腕力に訴へ正否を辨せむとす何ぞ誤れるの甚しき彼等れ徒は腕力が強きに
誇り未だ其要を見ざるに於ては所謂「腕鳴」れ余りに理無き處無罪の人に傷害を及ぼすに至る
或は人を諷しむるに是非曲直を正さずして妄に腕力を以て他人に加ふる者あり友を諫むるは元親
情の溢るゝに出づ再三再四苦諫して尙は聽き入れられざるも吾人に他人を打つの權利ありし他人を
諫むるに腕力を以てするは已れ罪惡を造るが如し市井の徒尙ほ許す可し苟も朝に道を開き夕に死
するも悔なきの學生にして爲す可き道からむや何を苦でう他人を諫むるに腕力を以てする

發達せざる誤謬多き彼等の道德的感情は性々極端に走りて人の權利を害し尙ほ得々たる者あり是
等の徒元より憫む可しと雖も是に至りて戰鬪的腕力の弊大なるを見るに足る可し若し彼等をして
崇高の地位に道義思想を發達せしめたらむには遂に腕力を用ふるなくして終りしあるべし
近頃學生の通語として用ゐらるゝ「決闘」、「あぐる」等の語は果して今日文明國の學生として用ゐ
るを許す可き語なるか吾人常に非社會的人類を想見するに當り彼等が日常の用語として想像す
るの言語は現時の學生れ言葉たらむとは啞然云ふ所を知らず「決闘」、「あぐる」とは何を意味する
か強者が弱者を壓制し理否曲直を辨せず言論の自由を束縛し及び國家の法律を蔑視する以外に意
する處なし腕力を以て他人を制するを得意とする者は野蠻人の行爲のみ豈文明人の爲す可き事な
らむや
元より吾が論と文と讀者の愛顧を買ふに足らずのも感情に訴ずして理性に訴むとせし死文は讀
者の目を煩はすを恐るのみ末論は余が感情を發表するに至りたる動機あり

耕地改良論（承前）

本 論

第一項 耕地改正の起因並に沿革

吾人の此渾圓球上に生存するや各自不利を棄て、有利に就うんとする欲望は殆んど普通人間の通
性たり耕地の改良も亦此欲望を満足せんが爲めに起る從來我國に行はれし農業は概ね小仕掛に

て器械を用ふること少く人力を以て之れが耕作をなす從て耕地の區劃狹小にして小なるは數歩大なるも二反を越ゆるは稀なり此を以て屈曲せる數多の畦畔は縱横に交錯して耕地の大部を占領し且つ牛馬を使用して耕作をなすの便と欠き殊に夏時降雨少く灌漑水の欠乏を告ぐるに當りて此等畦畔に叢生せる雜草は水量の大部を吸収し旱魃を憂へて益々大なりしむ又從來の耕地殊に稻田に於て其最必要とする既水溝排水溝に配置其宜しきを得ずして互に相錯雜し其何れたるを分つ能はず故に夏時既水を要する際冬時乾田を要する時各其目的を達する能はずして二毛作地とある可き田地も空しく一毛作地として終る可うざるの不利ありき殊に從來の耕地運搬路は小徑にして車を通ずる能はず故に多量の收穫物及肥料を運搬するにも皆八肩によりて之れを運ばざる可うざるの不便あり如此幾多の不利不便を吾人の欲望を驅て改良の途に就のしむるに至る是れ耕地改良の因て起る所以あり

是れが濫觴に關しては或は石川縣と云ひ或は静岡縣と稱し其孰れが嚆矢あるやを明かにせず歴史の證明する所に由れば或有益ある事業の多くは同時に二ヶ所以上の地より於て開始發見せらるゝの傾あり例へば彼の微分積分の發見が英獨兩國に於て同時にミートン、ライブニツリの兩人に由て成されたるが如く此有利ある耕地改良事業も亦我國に於ては静岡石川兩縣に於て同時に着手せられしやも知る可のち余輩は調査せし石川縣に於ける嚆矢は即ち明治二十年石川郡野々市村に於て時の令尹岩村高俊の獎勵により設立せられし石川縣模範農場の耕地改良とす本會の設立成るや縣の屬吏岸秀實なる者該郡の農事巡回教師某と協議し村民は所有に屬せる耕地二町五反八畝三步

を取りて農事試驗場に當て是れが耕地整理を行ひ舊來の屈曲せる畦畔交錯せる溝渠を崩壊し改めて運搬路既水溝排水溝を造り屈曲せる畦畔を直線と一以て耕地の區域を擴大にす其結果大に見る可きもけありたりき(第三項參照)

然れども當時此事業に着手せんとするや村民の頑迷固陋ある將來の利を見るに疎く眼前祖先傳來の田地を他と交換せらるゝを嫌ひ種々策を廻らして是が妨害を試みたりしも當事者の熱心なる盡力に依り遂に其効を奏するに至れり是れ實に石川縣に於ける耕地改良の第一着手にして其結果良好に於て一も其弊害なし比隣是を見るや其有利の事業たるを知りしも尙疑懼して卒先之れ從ふものなりき

同郡安原村に高多久兵衛ある者あり富豪にして農事熱心家なり常に同村耕地の排水宜しきを得ずして作物不良且つ一毛作なるを見之れを歎ずるや久し偶々此改良の舉あるを聞き大に喜び明治二十一年村内の地主を集めて是を議す彼れ熱心なる勸誘と盡力とにより遂に議成り同年二月を以て改良の工を起し同年五月竣工す是れ石川縣に於ける第二回の耕地改良なり(第三項參照)

續て同郡戸板村字示野の田區改正あり又愛知縣の耕地改良あり殊に京都府乙訓郡羽束師村字鴨川の如きは遠く高多氏と招き耕地改正事業に關し其指揮を仰ぎ設計をなし地主間の契約書成り明治二十九年始めて改良事業に着手し後故ありて一時中止の姿ありしも間もなく再び工を起し明治三十一年に至り全く竣工す其他丹波國に於ては舊藩主稻葉子爵其所有にかゝる耕地を改良せんとし高多氏に其實地調査を依頼せりと又現に能登國にありても之れが改良に着手しつゝありと云ふ近

年如此諸所に此有利なる事業に着手せんとする趨勢を見るに至りしを以て政府は既に耕地整理法を發布し以て之れが進行を奨励するに至れり (未完)

文筆の必要を論じて敢て諸君を促す

愛 緑 生

春日蒼天に舞へる雲雀は、其囀吟に依て情を舒べ、秋狄窓下に啾々たる虫は其冷韻に天然を歌ふ、心なき禽鳥猶ほ然り、苟も靈性ある人が彼の麗はしき自然に對し、面白き天然の變化に對して豈詞章あきを得んや、

靜に山又山を縫ひ行く細流も、崑に激しては潺湲の音あり、穩靜なる蒼穹に氣壓の平を失すれば風雷を生ず、物各其平を得ずして、聲を發するはこれ其の情なり、豈獨り人のみ沈黙するべき理あらんや、

社會は多面也、人生は錯雜せり、宇宙は荒漠あり、一生は沒趣味にあらず、此多面なる社會、此錯雜せる人生、此荒漠なる宇宙、此有趣味ある一生、變化なき能はず、凸凹なき能はず、然り而して又實に言辭なき能はざるあり、

言者は實に、不具者として視覺上一切の不自由を感じるのみならず、又社會上不完全ある人類として用をなす事少し、聾者は已に其聽覺を失するの故を以て、社會獨立の個人として立ち難く、聾者亦巷閭に廢物視せらる、凡て不具者が社會に對し用をなす事少きは皆斯れ如し、而して人に文筆の備あきを取りも直さずこれ不具あり、例へ身に豊富なる才識、優秀なる學藝ありとするも、

其才識や、其學藝や、皆不具なるものとして社會に用をなす事の少きや論を待たず、

然り文筆は爾く重要なるもの也、然るに之が比較的輕視せらるゝは何ぞや、蓋しこれ文筆が其專門家をのぞく以外に於て直接に個人に關係する事少く、且之を習練するに多少困難あるを以て、彼の我非文士焉、非作者焉、非以筆食者焉、若くは文者末技耳、細藝耳、於我何有矣、爲何要、れ所謂近視者流の近視的觀察に因て茲に至れる非ざるなき乎、

然れども試に思へ、今茲に猫を畫くものあり、其五体を畫き調へて其尾を畫くを忘れ、刀を鍛ふるものあり、其刀身を鍛終て刀心を造るを忘るゝあり、奈何、尾や猫体の要たるもれにあらず、刀心や、鍛刀の末技に屬せるものたりと雖、猶、尾あきの猫、刀心なきの刀は、假令へ其畫に於て、其刀に於て、應擧たるを失はず、正宗たるに耻ぢずとするも、醜たるを免れず、疇たるを免れず、以て逸と稱し、秀と稱する能はざる也、實に吾人は韓柳を期するにあらず、近松に擬するにあらず、沙翁をまねぶにあらず、而して文や吾人の末技とする所たりと雖、而も吾人に文筆あきや、此終に名畫たり名刀たる能はざるにあらずや

雪に然るのみからむや、人に文筆あるは假令へば花に香あり、色あるが如し、花輪如何に大ありと雖、花容如何に妙ありと雖、若し花に香なく色なけんには、單に花偉なり、容妙なりと云ふに過ぎずして、美かく趣なく、稱すべきなきの野草たふんのみ、人に文筆なきも亦此花と同じく、其沒趣味、其殺風景、其人や轉た枯木寒嚴の觀あらんのみ、

見よ、勿來關畔、山櫻花の一咏は英雄の其麗はしき襟中け閑日月を咏り出して人をして轉た欽羨

に堪へざりしめ、謙信が陣中作なる、霜滿軍營の一絶は、鶴髮銀髯の荒武者が優にやさしき心事を舒して彼が歴史に一段の光彩を放つにあらずや、若し夫れ更にルーソー一編の文字が佛國の大革命の導火線となり、山陽外史の一著作が維新變革の先驅とありたる如きに至ては、文筆効果は顯の顯たるもの、他は藝術の敢て企て及ばざる所也、

嗚呼文や斯く必要あるもの、吾人は須らく意を盡し心を致して此が習練につとめ、經營に苦心すべき也、今や金麟落葉を拂ひ、風露轉た慘憺、正にこれ吾人が燈下に文筆を弄するに適せり、破窓の月、籬根の螢、郊外の花、目に入るもの耳に聞くもの、一として吾人が情緒を彈ずるにあらずるはあし、是れ捉へて以て其抱懷を述ぶべきの好材たらずや、而して吾人が機關誌たる北辰會雜誌、亦近來秋色を呈し紙上轉寂寞の感なくんばあらず、論説欄、記事欄、文苑欄、これ亦捉へて以て習文の具とあすべき好材あらずや、己に此二個の良材あり、乞ふ諸兄、他は學課に冷あざる如く、疎かりざる如く、文筆に於ても亦冷かり疎あるをかれ、

品位論

豐 洲 漁 郎

白山犀川或は巍々として雲表に聳え或は濛々として洋海に朝す何ぞ其れ大觀なる春燕秋雁の以て加山の靈に異あきく如く春花秋葉の以て犀川の偉に異なきが如く巍然として金城に高き洋館嗚呼これ吾人等七百の健兒が青年の志氣を擧ふ第四高校にあらずや朝夕門に出入するの士皆これ青春妙齡志高く學博き俊才たらざるはなほ蛟龍豈常に池中のものたらんや不日赤門角帽の容にして當

に天下は寵兒たらんとすその品位の高今日に於て豫め期すべきあり否諸子の多くは己に超境の氣あり品位己に備はるが如く其笑ふや必しも三仙の笑其れにもあらず其泣くやグレーの涙それにもあらずるあり然りと雖更に下つて其裏を伺へ果して如何果して如何吾人疑あきを得ざるあり諸子の品位は唯表面的にして側面或は裏面的に於てすれば神聖ある品位は醜態の偽裝たざるを得ざるものあり吾人は今やこゝにこれを斷言して却つて心裡の苦痛を醸せしを悲む而も敢て吾人が青二才後學の身を以て喃喃囁々の言をききんと欲する所以の者は唯夫れ諸子と思へばなり確にホープの種が蒔かれて將に耕しつゝあるを知ればなり若夫れ論ずる所杞憂に過ぎざれば吾人は寧ろ幸とする所かり尾山城頭白線四條の學生が品位の花を胸間に挿さむ日あらんとは吾人の豫期する所諸子は寧ろ吾人をして此日の杞憂を笑はしめよ更に今日の言を見て泣くしむる勿れグレー三仙吁吾人何れを取るを得んか彼の墓に泣きし涙をわれに見する勿れ寧ろ虎溪の笑を招かしめよ

品位とは果して如何あるものある其の所謂起居の問題あるう勉強の方面あるかは天才の方向に顯はるものなるか紅塵萬丈の裡に保身する能はざるものあるか幽邃深壑の邊に學び得べきものなるか吾人は此を是とし彼を非とするを得ざるなり吾人が所謂品位は廣義のものなり起居の問題可なり勉強の方面可なり天才の方向も亦宜し紅塵萬丈幽邃深壑の件何ぞ必しも不可とせんや廣く國家より見れば國風とあり軍隊よりすれば軍紀となり學校よりすれば校風と呼ばれ團隊には社規となる而して箇人としては所謂狹義は品位又品格といふべきもれあり吾人が品位に對する概觀は略斯の如しもの品位この神聖なる品位は如何なる効果を收むべきか吾人の多く語るを要せずして

既に諸子の胸中に聲あらん見よや國風を忠孝仁義は皇國の美風たり上下渺邈三千載上は一系の陛下を頭にし下は同種の萬民德に浴びて天壤無窮の榮を祈る國風の美既にかくの如く未だ以て國辱を負はず神功征韓の如く豊公征韓に如きは言はずもが時宗の元寇は却つて國風の美を發揮し廿七八年の戰勝の如きは太々的國風は美に基す而して内は文明驕々として進み又世人士が唱ふる如く極端的無道德の域に達せず澆季といふも不平家の私言道義地を拂ふといふも必しも皆然るにあらず唯比較的君子國に對してのみ元より今日に於て防禦に勉め徳育を養はざるべうざるは言を待たずこゝに至つて内は文明に徳育に外は國威を揚ぐ何の快かこれに如うん今若し史冊を繙いて國風が如何に盛衰に關係を及ぼししを見よ泰西諸邦の多くの例を引證するを要せず三代の治は國風の美を發揮して國家愈強く唐朝亦然り春秋の如き戰國の如き一時の強は一時の強れみ國風の揚るべきものなく干戈旁午の裡に夢過せしにあらずや次に軍紀の整否を見よ軍紀の如きは直接軍隊の價值に關し若しその整はざる如きあれば全く見るに足らざるのみならず一旦緩急あふんの將官たるもの仇敵に對し千軍萬馬亦一の用ふべきなく遂に敗北に歸す元より自然の理たりハンニバルの羅馬に於けるナポレオンの全歐を歸破したる近く廿七八年役に於ける皇軍の如何に軍紀整ひしる爲めに如何に効果を得たるより多く喋々するを要せず之をパンシブ的に見んや清兵の敗を招き耻を曝したるは軍紀のあるなく唯生を知つて死を知らざるが爲に人をして齒牙に掛けざらしむるに至りしにあらずや退いて吾人が所謂團隊の社風例へば會社の信用を得たる基の如き各會の盛大なる皆各方面の品位に預つて力あり是を手近き例に引らん諸子が組織せる校友會中の北辰

會雜誌に徴せよ會員たるものと實に寄稿の責任あり諸子に於て悉くこの責任を盡さんの限りある紙數に到底之を載せ盡すべからず従つて自然に淘汰行はれて玉稿のみとあつんこれ雜誌としての品位あるもれあり然るに投稿寂々たるときは勢ひ玉石混交の譏を招らざるを得ざるなりわが北辰會雜誌の如き今何れの位置に立つか委員の勞は即ち多謝す不幸にして會員は其責任を忘却するを如何せんわれをして思はず慨歎の聲を發せしむる故以のものは蓋し玉石混交の

今や吾人は筆硯を清めて最も研めんと欲する校風に至る要するに校風は學生に於ける國風なり一交は一生の國家なり學生あるにあらざれば校風あるを得ず而して能く校風を美を濟さんとせば學生自ら品位を保ち以て然る後に望むべきなり然れば校風なるもれば學校自ら作る能はずして學生が己の品位を良くするによりてけみ揚るべし豈他あらんや某高等學校が運動に盛大なるより己も人も某校の校風が運動にあるが如く思考し又某高等學校が交際に巧なるもの多きより己に校風が校際を意味(?)するが如き元より論ずるに足らざるなり校風あるものはしかく狹義のものにあらず彼等は誤解して自ら喜ぶのみ我が四高は夫れ如何校長教師の胸中自ら成算あり運動の方面學科の方面相待つて教師の熱心あり助くるに禁酒令出で、青年前途の宿弊を豫防するに勉めたる如き他の高等學校に率先して彼等をして我に倣はしめんとするが如きは大は國家の爲め書生界の爲めに小は學校の爲め一身の爲めに予が手を拍つて謝せんとする所あり而して服製一定して和服を禁トゝが如き如何に規律に於て整頓せるかこの門に出入する諸子よ嗚呼諸子はこれを以て校風の美を謳歌せんとするか賢明ある諸子元より其非を知らん唯夫れ此際勉めて自己の品位を作り内外相

待つて校風の美を濟さんと期するからん吾人がホープありといふも眞にこゝに存す然れども一方より觀察せんか天上聲あり徒に外形に流れて内虚さが如きは未だ可ならずと然り斯の如きは斷つて不可なり吁内虚といふは吾人の解するに苦しむ所あり要するに校風の美は俄に濟るものにあらず常にこゝに勉めて猶足らざるは萬人の期する所たり唯美風その物に近づめんとを勉むべきのみ是れ即ち校風の美あり人或は四高年來の惡評を信しその實情に通せずして漫りに之を笑ふものあり元より共に校風の美を論し胸中の成算を語るに足らずと雖若し夫れ七百の健兒起つて天下の愚物をしてこの言をあさしむるを屑とせずその口を針するの策を講ぜざらん校風の美夫れ何れ日か望むを得ん薄弱男子として躊躇してこの機會を失せしむるに至らば百の有志熱血を濺ぐとも機己に遲るゝものあるに至らん學校が自ら成す所の美風に乘り各自品位を保たんとするこの機會共にふれ一個人の賜物にあらずとて天より賦與せられたる所なり天の賜物を取らざんば其災計るべからず世間が所謂對四高の惡感情が唯皮想の謬見たらばこゝに勉めてますゝ在來の校規を完ふしめ美をして愈美たらしめよ不幸にして眞たりしとせば會稽彼所にあり適々以て吾人等に好刺撃を與へたるものあり豈感謝して再び彼等に指をつけざらしめんことを期せざるべけんや然らずんば箇人の品位如何は延いて校風の如何に及ばし又延いて國家に及ばすべし豈恐れ慎しまざるを得んや

吾人が品位といふも己に言へりこれを箇人に望む元より憾みなき能はざらんや否々是れ非あり薄志の徒あらずんば校風の美を傷つけんとする輩の言れみ果して然らば彼等を如何せんか吾人を

して言ふを許さしめよ學生間の制裁に據る外又他なきなり若し學生にして職分を忘れ花に浮れ月に戯れて悠々勉むるとかくんば先づ夫々れ先輩たるもの忠告して可なり猶止ますんばこゝに各級間の制裁を加ふべし然りと雖吾人は勉強の爲めのみ身を犠牲に供し體養を忽にせよと言ふにあらずたい勉むべきに勉め遊ぶべきに遊べといふのみ体育の如き一日も忘るべからざるなり既に智體備はれりとせば言行盡く徳育の上に立たざるべからずこれ學生に品位を具備する要素たり換言すれば徳智體は三大要素にして事甚だ奇ならずと雖奇あらざるこゝに吾人等は死力を盡さざるを得ざるあり、嗚呼吾人は品位論の下に思ふ所を論ずるを得たり而も品位は論ずべきものゝみに限らざらん政治家は政治家の品位醫學家は又それ品位あり宗教家といはず實業家と言はず品位を忽にして可あるものなけん而して論ぜざる所以の者はこれ吾人の尤も暗き所然らざれば言ふを得ざる所なればあり吾人がこゝに擱筆せんとするはサブジェクトが此にあらざりて彼にあればなり吾人は未だ螢窓雪案の客にして品位の修むべきもれあるのみ諸子皆この心ならんか校風の美校風の美われは校風の美を期して待ち得べきものとす深夜破窓の下思はず空を仰げば三五の清光われを照し颯々たる松風天籟を漏らしてホープに近づけると知らずものゝ如し(十月七日)

史 傳

草野清民小傳

藤 井 乙 男

此一篇は亡友草野文學士の遺稿のはゝに物せしものあるが曩きに同氏の遺書を本校に寄附したる因みもあれば、其書を見む人々の、思出草にもなれうしと、うくは本誌に掲げつ

草野文學士名は清氏、初め銀太郎と稱す、明治二年四月六日金澤古寺町に生る、父は清風、母は野崎氏、家世々加州藩士たり、學士性温厚著實にして、夙に學を好み、稍長て業を石川縣專門學校に修め、後笈を負うて東都にいで、第一高等中學に入り、螢雪の効を積みて大學に進み國文學科を修む、明治二十七年春、偶肋膜炎を患へ、病臥數月學を廢せしも、嚴君既に館を捐て、慈萱閨門に倚りて待つあるを以て、勉強して試問に應じ、同年七月業を卒へて文學士となり、翌年三月福岡縣尋常中學明善校の聘に應じ、往きて教鞭を執る、教授懇到諄々として倦まず、子弟皆學を樂む、然るに往年の病根抜けずして、屢禍を蒙り、終に肺を侵し、病羸劇職に堪へざるを以て、二十九年七月職を辭して郷に歸り、靜に病を養ふ、北堂日夜君れ疾を憂へ、寢食俱に安からざりしが此年夏遂に遠逝せらる、君卒業の年の一月家嚴を失ひ、今また病床慈母に別る、胸中の憂苦想ふべきなり、桑梓の地不祥にして且氣候陰濕寒暖恒なく、風土病軀に適せざるを以て、三十年八月去つて播州須磨に赴き、居を二の谷の翠微に卜し、白沙青松の間海風松籟に、心身を療養せしも、疾既に膏肓に入り、血を嘔くこと頻にして、殆ど尋を離るゝ日なく、肉落ち骨出で、神經いよく敏にして、體力日に衰へ、三十二年九月十日秋風漸く枕上に訪れんとする頃、溘焉として瞑す、享年三十、室廣瀬氏遺骨を奉りて金澤に歸り、市の南郊野田山に葬る、君一女一弟あり、女名は淑、家を嗣ぐ、尙幼なり、弟名は繁、陸軍歩兵少尉たり

君れ大學に在るや、心を本邦の語法に潜め、日夜研鑽倦まず、同人目するに文法狂を以てす、君も亦私に文法學者を以て自任たりき、然るに卒業後年一度疾を獲てより、屢湯藥に親み、遂に不起の重患に陥り、勤學意の如くならず、されど一日も語典を編むの念を絶たず、病間筆を把りて記する所、哀然として筐に滿つ、或は一々古書に徴して、互爾波の用例を類別し、或は助辭の用法を統計して、其變遷を考察し、或は官府の布令時流名家の文に至るまで、筆を加へ朱を點じ、其誤謬を指摘したるが如き、用意の周密にして、氣根の精銳なる、強健の者尙之を視て忸怩たらざるを得ず、而も君餘命の久かたずして、到底大著述をなすべき遠なきを慮り、力めて節略に従ひ、再三稿を改めて、其完成を期せんとす、君が瞑するの前一月須磨の寓を訪ふ、眼窩陷り肋骨秀で、聲啞れ息急にして、殆ど世の人にあらざり、仰臥したるまゝ、少く頭を回し、余を顧みて曰く、今や此の如し、一日僅に二時間執筆に堪へ得るのみ、此を以て文典の編述に充つ、此二時間は余の生命なり、千金も換ふる能はず、臥蓐以來兄等に消息を通せざるも、只此二時を徒消せさらんが爲のみ、請ふ恕せよと、而も天無情にして、長く此二時間をすら君に假さず、刪定尙半にして、遂に白玉樓中の人とある、歎ずるに堪ふべけんや、今や君が遺稿を校するに方り、糊塗滿紙雌黃縱横の跡を見て、轉た其苦心を想ひ、又「到底功を奏する能はず」等の文字を、屢餘白に見る毎に、恨を吞みて瞑せし君が音容、髣髴として前に在るが如きを覺ゆ、此小冊子固より君が遺著として、其蘊蓄れ十一を盡くすに足らず、しかも今や之を以て君が唯一の紀念として満足せざるを得ず、嗚呼

ベチザクトス、スピノーザ

K.

N.

生

スピノーザは千六百三十二年和蘭のアムステルダムに生る父は宗教上の虐待を避けてポルチュガル及スぺーニ地方より逃れ來れる猶太人一人なりきスピノーザ幼にして穎悟風に猶太教の教師モルテラーと云へる人よつきてバイブル、タルムード、及カッパラー等の書を學びぬされども固より學問好きなるスピノーザのことなれば此等書のみにて満足せず竊に思を猶太古代の哲學書に潜め特にイブン、エスラ又はメーモニデス等の著書を受讀せしめ其明透ある頭腦には早くも猶太傳來の宗教に對し種々の疑惑を生じ未だ十五に達せぬ童子にして時に哲學上の難問を發して其師モルテラーを窘窮せしめしこともありしと云されどもスピノーザの思想に大變化を起し遂に彼をして寂寥たる孤獨の一生を送るに至らしめたるものは實にかれウラチン語の研究ありしなりかれはこの研究によりて大に其智識を擴め得たるのみならず當時かれが師たりしバン、デル、エンテと云へる醫師より自由研究の精神をうけ特に當時新たに起れるデカートの哲學を講究せしかばさうぬだに眞理を愛し哲學的思想に富めるスピノーザは遂に全く傳來の猶太教を信せざるに至りたり彼はこれより猶太教の宗教的儀式に列することなく又其教會に行くことも稀れにありぬこれまでスピノーザの俊秀なるを見て他日猶太教の柱石たふんとまでに望を囑せし教會の長老等は之を見て大に驚き或は勧誘或は脅迫或は賄賂百方を盡してスピノーザをして故の如く猶太教の信徒たらしめんとつとめたれども元來獨立不羈にして眞理を愛するに忠實あるスピノーザは毫も

其所信を曲げず爲に屢暗殺せられんとし一たび其上衣を劍にて貫かれたる事もありしうどもスピノーザはこれ等の事にも屈する所あかりき是に於て教會は己むを得ずるに對して破門狀を下せりその破門狀とはスピノーザが神の尤めにより聖書に記載せる最大の詛をうけたる旨を記しかれが傍に人の近くをだに禁せし者にてこれ實に千六百五十五年スピノーザが二十三歳の時なりき今の人にはある破門狀を幾通うけたりとて些少の痛痒をも感ぜざるべしと雖とも當時宗教の盛大なり一頃に於てはこれ實に死より恐るべき罰なりとなり猶太の教師等は尙之を以て飽き足らずとて遂にアムステルタムの市長に上申してスピノーザを市外に追逐せりスピノーザそれより五年程の間は猶アムステルダムの近傍にあり孤獨れ生活をあし時に同好の友などを集めて哲學的研究に餘念なかりしが後リンスブルグといふ處に移り千六百六十四年ハーグ市より程遠かぬフオルブルグに轉じ又千六百七十年以後は友人の勧めによりハーグに移り此處に其一生を送れり

スピノーザの生活は實に淡泊にして日に費す所二十ペンニヒを出てず時に麥粉と牛乳とのみを喫して一日を送ることもありしと云ふかれ嘗て人に戯れて曰く余は其尾を含む輪狀の蛇の如し一年れ終りに一年中に得たる所を費して一錢をも餘す所あしとて其質素の狀を想ふべしされどもスピノーザは決して故意に快樂を嫌ふ人にあらずエチカの中にも賢人は適度に樂む者ありと云へりうれば性質温和にしてよく其友人に交はり又己が哲學の冥想に倦みし時は宿の家族あど、日常の俗事より宗教の事まで親しく相語れり嘗て女主人が耶蘇教を信せば果してよく救はれんや否やを案じてうれに問ひしことありしにうれは之を慰めて貴女が宗教は實によき教なり決して他に求

むるを要せずと云ひしとぞうれは人に耶蘇新教の説教をきかんふとを勧め己も亦時に寺に詣でたりといふ

スピノーザの一生は高潔にして一点の俗氣なく寂寥たる一生舉げて之れを眞理の研究に費せり其餘技として傳ふべきはあれ頗る畫をよくし時に友人及己が肖像など描きしことあり其他冥想に疲れざる時は蜘蛛を闘はして無上の樂みとなせし如き事あるのみ其無邪氣の狀實によく其人を爲るを想見するに足る唯傳ふる所によればうれが青年にしてバン、デル、テンデに學びし頃思を其女クララ、マリヤによせ己に結婚を申出んとすてに思ひしがハンプブルグの富有なる一商人の奪ふ所となりたりと云ふ此事尙信し難き所なきにあらずと雖ども若し事實ありせばアルプスの雪の如き冷ゆるスピノーザの一生に一輪のアルベン、フロラを見るか如き感あり

スピノーザがハーグに移りし始の程はバン、ベルデンと云へる一寡婦の家に宿せしが其宿料のあまりに高かりし故後にバン、デル、スビックといへる一畫工の家に住せり此時スピノーザは己にデカートの哲學を離れ自家の一大哲學を創立せし時にして一意専心斯學を研究し時に一月れ久き足戸外を踏まざることもありしと云ふ有名なる哲學家クノー、フィセルをして思想の結晶とすでに賞賛せしめたるエチカの書は實に此時に成れるものなりスピノーザ固より貧困にして擔石の資なかりしと雖どもアムステルダムを出し頃よりレンズ磨きの術を學びしかばおれを以て生計をかり一生他人の助を受くるを好まず嘗て其友シモン、デ、フリースなる人已が遺産をスピノーザに送ふんとせしことありしがスピノーザは之をフリースの弟に譲り其弟又スピノーザに年金五百

グルデンを與へんとせしかどもスピノーザは已むを得ず僅かに三百グルデンの年金をうけしのみありといふ又或時バルツの撰擧侯カール、ルードウヒよりハイデンベルヒ大學の教授として禮を厚くして招かれたる事ありたれどもスピノーザは己が思想の自由を妨げんことを恐れこれも固辭して往らざりきスピノーザがレンズ磨きの業は遂にかれとして肺病に陥らしめ千六百七十年二月家主スビックが妻と共に寺に行きし間に友人マイエルと云へる醫師の膝を枕にして眠るが如く逝く年僅に四十五歳ありき

雜 錄

讀 書 雜 話

浦 井 恒 堂

百科辭典の變遷及ひ學生用百科辭典

百科辭典即ちエンサイクロペディアは三箇の希臘語 *en* (in), *kyklos* (circle), *paideia* (instruction) より成れども多くの術語と同じく後世の命名にして古代希臘に於て行はれし語にあらず百科辭典といふ語は廣く百般の學術技藝を網羅せる場合に於ても博物學エンサイクロペディアの如く單に一學科のみに限れる場合に於ても用ゐる其編纂の法二種あり一は所謂 *rational method* にして我國に於ける三國會和漢節用集れ如く種々分分類法に因り關聯類似の事項を配列する法にして百科辭典の濫觴と認むべき羅馬帝政時代の大理學者プリニイの *Historia naturalis* (科學類典) は此法を用ゐた

り此法は百科辭典の本體なりと雖も搜索に不便あるを以て今日は専ら第二の法所謂辭書體(alpha-betical method)を用うるに至れり經濟雜誌社より出せる社會字彙の如きは即ち此法を採れるものにて此類はエンサイクルペディアといはすしてむしろ Dictionary of Universal Knowledge といふ方當れり羅馬帝政時代の中頃より中世時代を経て近代に至るまで種々の著述出てしか専ら Summa (Perfection) 又は Speculum (Mirror) 名を以て行はれたりを而してエンサイクロペディア編纂事業に一大革新を起し、はデデロー及びダラムベール (Diderot & d' Alembert) の佛國百科辭典 Dictionnaire Encyclopédique) にして此書はボルテア、ルソー二氏著述に次ぎて十八世紀に於ける最も大切なる著作にして十九世紀の新世界を生み出す大動力とあれり是書はデデローを出版人とし當時知名の人々を網羅して編輯委員を作りダランベールは數學ルソーは音樂アベ、イフオンは論理心理倫理ツッセンは法律ブエフォンは自然界を擔任し其他佛國革命に於て種々の方面に立ち働けるボルテア、モンテスキュー、オイレル、ドホルバック、チュルゴーグリス、コンドルセエなどの人々之に關のれり千七百五十一年第一巻を出たし一七七二年に至り成る通して廿八卷及一七七七年追加五卷成れり勿論此書は英國にて出版せる Ephraim Chambers 百科辭典を模範として其体裁を學びし者なるは疑も無き事實あれば決して創作の名譽を荷ふこと難しと雖も其歴史的價值に至りては到底チャンバアと日を同ふして語るべきにあらず英國人は佛國に於ける此大出版を見るや直に之と競争せむことを企て一七七二年を以て Encyclopaedia Britannica を出せりされど此ブリタニカの初版は僅に三冊に過ぎざるれみならず至りて粗雑のものなりしかは世人の歡迎を得る能はず續きて一七七六年より八三年までに第二版出て冊數も増して十冊とあり體裁も整備し漸くエンサイクロペディア界の巨人あり其後絶えず訂正増補を怠らず最近の者は二十五冊に及び第九版に達せり然るに一八一二年獨逸ライプチヒ府の Brockhaus 氏は新の Konversations-Lexikon を公にせしより天下靡然として之に向ひエンサイクロペディア出版事業に第二次の大革新を喚起し各國に於て種々の複製物續出せり今日我邦にて可なり行はれ居るチエンバア百科辭典の如きは大體に於てブロックハウスの反譯と見做すべき者とす如此ブロックハウスの名聲噴々たるを見るや一八五七年 Meyer Konversations-Lexikon 出てゝ覇を爭はむとを企て其より兩者の競争甚しく暫時も訂正改良を怠るゝとなく兩者共に其末卷を出版し終ると同時に新版第一冊の編纂に着手するを常とせり實にや競争は進歩の母にして其改良進歩の度驚くべきものありとす

從來學生用としては獨にては前二種の大辭書を省略したるブロックハウス(二冊)マイエル(三冊)共に行はれたれど前者は九圖を要し後者十二圖にして食生座右の珍とするに困難の事情あり英にては Cassel の Miniature Cyclopedia 及び Law の Pocket Encyclopedia の二種あり價廉なれど眞れポケット用に止まり極めて簡單にして殆んど實用に適せず其他はビートンなりチエンバアありブラツキイなり皆十數圖以上を要し甚た不便を感せしが今年に至り英獨共に學生用として最も適當なる者を出版せしは實に喜ぶべきことといふべし英にては The Nuttall Encyclopedia といひ英學書生は何人も熟知せるナツタル辭書と団体裁にして僅に一圓二十錢を投すれば購ひ得べく材料も可なり豊富にして日常に几下に具ふるに堪ふべし獨にては Kirschner Universal Konversations Lexi-

John と題し從來より行はれたる同氏の袖珍辭典を改良したる者ありナツタルよりも稍や大形にて紙類も多く材料もナツタルより富めるゝ如し代價はナツタルと大差なく一圓五十錢なり獨逸の差支あき人はキユルシネルの方を撰ぶへし

作 期 的 年 號

作期的とは epoch-making の直譯にしてたゞ一時の現象に止まらずして後世まで影響を及せる出來事を作期的事蹟といふ世界歴史中より此所謂作期的事蹟を選み出たすに當り人々多少其選擇を異にするは勿論あれど今米國のウード氏の選へる者を挙げむ

阿典ペリクリスの全盛(希臘文明の黄金時代)

紀元前四四五

波斯帝國の滅亡(希臘文明の東漸)

三三〇

歷山大王の崩御(希臘文明世界の瓦解)

三二三

希臘の滅亡カルセージ陷落(羅馬は世界統一)

一四六

アクチウム海戰(羅馬帝政成る)

三一

耶蘇誕生(西洋紀元)

紀元 一

匈奴の侵入人民大移轉(中世紀始まる)

紀元後三九五

西羅馬滅亡(古來文明消滅蠻人横行)

四七六

クロービス即位(獨逸帝國の曙光)

五〇九

マホメットの逃遁ヘジラ(回々教國紀元)

六二二

查理曼皇帝即位(西羅馬復興)

八〇〇

ベルダン條約(獨佛外三國は濫觴)

八四三

十字軍(耶蘇回々兩教天下を爭ふ)

一〇九六—一二七〇

クレシイの戰(封建制滅亡の始)

一三四六

コンスタンチノープル陷落(近世史始まる)

一四五三

米國發見(文明世界西半球に擴張す)

一四九二

コーペニクスの地動說(基督教會の動搖)

一五〇〇

法王レオ十世(近代美術の養成)

一五一三

宗教改革

一五一七

ベーコン Novum Organon を公にす(論理法の革新)

一六二〇

デカート Discourse on Method を公にす(哲學一變)

一六三七

ウエストフハリア條約

一六四八

路易十四世全盛時代ニメーゲン條約

一六七八

ニュートンの引力論科學界の革新

一六八二

ワット蒸氣々鐘發明

一七六九

合衆國獨立

一七七六

ブルームール十日のクーデター(奈翁興る)

一七九九

ウオターール戰維納會議

英國に於て鐵道布設せらる

佛國に於て電信始めて架設せらる

リービーングストーンの阿弗利加内地探險

ダルウィン進化論を公にす

スエズ運河の開通

獨逸帝國の設立

柏林大會議(歐洲現狀成る)

フリジア王ミダスの話

廣益俗說辨に曰く應神天皇は龍神の御するに侍りし故龍は尾まゝくぬふれをかくしたまはん
とて御裝束に裾といふものを作りてこれをひきて彼の尾をうくさせ給ふある時出御の折から内侍
はまた裾の内にあるを知らて障子にたてこめたりければ天皇尾籠れりと勅ありしより尾籠といふ
こと始まれり

此僻説たることはいふまでもなく尾籠とは嗚呼者なごと同し蓋しれたに尾籠の字をあてゝ音讀し
たるあり

これと頗る類似せる傳説希臘に傳はれり其説にいふ小亞細亞フリジア洲の王にミダスといふもの
あり此國の創立者エルデオスの子なりあるとき神は命により神々の催はし給へる音樂競技會に於

て審判官の重任を承はりしか如何にしけむアポロー神とバンとの技を較するやミダスはバンを以
て優等者と判定せしかばアポロー神の憤甚しくミダスの耳音樂は妙を辨する能はずとて驢馬の耳
を以て之に換へ給へりさればミダスは其耳を人に見られむことを耻づること甚たしくフリジア形
の帽といふものを考へ出て日夜此帽を蒙りて耳邊を蔽ひ隠しける一日王の侍者王の髪を理する
の際偶然之を發見し已の口より此秘密の世に漏れむことを懼れ安せず日夜悩悶して命も危く見え
しるは種々思を凝らし後地に大なる穴をほり之に向ひてミダス王は驢馬の耳を持ち給へりとい
ひ終るや直に土を蔽ひ以て長に此大秘密を葬り去り始めて心を安せりざるに其穴の上に數多の草
生へ出て風に振られて相觸るゝ毎にミダス王驢馬の耳といふ聲を發したりけれバ終に普く人の知
るところとなりきとそ

又此王に就きて他の奇話あり嘗てバックス神の師シレンス(Silenus)がフリジア地に遊べるに當り
王は心を盡して厚く待遇せしるばバックス神は大に王の厚意を嘉みし其酬として王の願ふ所は何
事にてモ許さむことを約し給へりミダスの歡喜極まり無く熟慮の後願はくは臣の手の觸るゝ物皆
化して黄金とあることを許し給へと申しければバックス神は直に之を許し給へりざるに其後ミダ
スの手の觸るゝ者立所に黄金に化し衣を着けむとすれば黄金とかり食を取りむとすれば未だ口邊
に達せざるに早くも黄金に化しければミダスは黄金の山の内に座りて饑餓の憂に頻し曩日の喜は
變して今日れ憂となりぬされバ先の願を悔みバックス神に其苦痛を訴へ「不幸なる恩惠」の解除を
哀願し辛ふして死を免れ得たりきとぞ此古事に因り西洋にては我俗語に難有迷惑などいふことをミ

ダスの寶(Midas' Gift)といふあり

笑

閑田耕筆に曰く藤原時平公疾あり一時朝廷にして此疾發りいかにともすべからず其日の政事は菅公にゆたねて退きたまふとあんな不和にて權を爭はるゝ敵手にあひて如此はさこそ止こと得ざるあるべし五雜俎に陸子龍有笑疾古今一人のみといへるを同しかなたにてもめつらしきあるべしなゝし世に笑中風哭中風といへるものありてこれ實にをらしきにあらず悲しきにあらざる内より催してせんかたあきあり藤公も子龍も此甚しきものか金匱要略禁忌部に食楓樹菌笑不止とあり是を治するに人糞汁或は土漿或は大豆の濃煮汁を飲ましむ或人の話にもゑなく悶絶するものあり即金匱は法のごと大豆煮汁をあたへておさまれりとのち尋ねれば菌を食せしとのよりこそ是正しく楓樹菌あるべし

西洋に於ける笑に關する傳説を求むるに僅に二三を得たり Chalcas といへる豫言者は己の死期を豫言し置けるに其時來るも死せず豫言の外れたるを見失笑禁する能はず其極悶絶して死せりとしひ Marguette といふ巨人はある日猿猴か靴を穿ちて濟まゝ居るを見可笑しさを忍ぶ能はずして笑ひ死に死せりといひ又 Philomenes といへる男は食事の準備全く成りて食に就くむとせるとき其養ひ置ける驢馬う食卓上の菓實を竊み去りて之を噛み居るを見大笑して死せりといひ希臘著名の畫工 Neuxis はある時戯に醜き老婆を畫さしに其顔の妙なる熟視するに隨ひ愈よ妙ありといは是亦た失笑に堪へずして死せりこそ是等の傳説と稍や趣を異にし哲學者デモクリトスは失笑哲學者

(The Laughing Philosopher) として名あり是れ氏は常に俗人々塵世の苦樂の奴隸とあり憂悶するを視て其愚を笑ひいためなりといふ氏は終に浮世の係累を避けんがため自ら兩眼を剗出し世を絶ち専心學を勉めたりと傳ふ氏は原子論の創見者として仰る

罽 醜 孟

百井塘雨か記に云織田信長公越前の淺井父子朝倉義景等を討亡し其生首を孟としていふ此三人われに大に苦勞をさせし今は思ふまゝなり悦びの孟ありて柴田勝家をはしめ一座に是にて酒を賜ふ明智光秀は下戸なりしや辭して吞ざりしを強ひて一孟を吞しめたるに酩酊して迷惑せしこと見へき戰國に趙襄子智伯か首を飲器にせしこと又元の吳元甫う罽醜盛酒飲清風と作りしかと和漢同し類ひあり又浪華の士永田某は諸藝に通一酒は大上戸なり一か秘藏の巨孟あり罽醜を金薄にて塗りたるにて八合入りしかり酒長すれば必ずこれをもて強ひ吞せたるにはいかある上戸も困りしと奇ん……伴蒿溪之を評して曰く人として淨不淨のわうふぬことはあらず又もとより惻隱の情あきことはあらざるをあらはしくまた惻むべきことをして快と覺ゆるは其身の奢侈にくらみて人心を失ひたるあり唐もやまとも戰闘れ世は人畜の差別いくばくならずるにして今の世にしてうゝる所爲を喜ふは何ことぞや云々

敵人の罽醜を酒杯に作ることは古代日耳曼の風習ありき此罽醜杯につきて最も有名なるはロンバンド人れ王アルボインに關する傳説にして曰くアルボインアバース人と兵と合せてジエビデー人を討ち其王 Cunemond 戰死すアルボイン乃ち其顱骨を取りて酒杯を作り之を珍藏す此戰に於てク

ニモンドの女 Rosamond を生擒せしがアルボイン其美を喜び赦して已か妃とせり後アルボイン以太利を討ちバビア城を攻む城兵堅く守るゝと二年遂に城を開きて降るアルボイン時にペロナ城に在りバビアの已る手に入りしを聞て大に喜び盛に饗筵を張り以て戦捷を賀すアルボイン醉に乗じクネモンドの顚杯を取り出り之を酌て其妃ロサモンドに屬し其酬を求むロサモンド父の顚杯を用うるに忍ひず固辭すれども肯のす已むことを得ず其言に従へりされども是より深くアルボインを恨み誓て父の爲めに仇を報せんと欲す終に王の兵器を掌る官に Helmichis といふ者ありロサモンド之に其志を告げ事成らば身を以て之に許さんことを約し援て黨與とす彼は更に一兵士を語らひ竊にアルボインの寢所に入り之を臥床の上に弑しロサモンドと共に其實貨を懷にし走りてラベシナ府なる東帝國領の牧伯フラビュス、ロンギヌス (Flavius Longinus) の許に至り其救援を求むフラビュス善く之を遇し竊にロサモンドに語りて曰く若し能くヘルミキスの手を脱し來らば吾汝を以て吾妻と汝のために力を盡さんとロサモンド大に喜び機を窺ひヘルミキスを除くむとす一日ヘルミキス浴して歸るロサモンド之に毒杯を與ふヘルミキス半飲みて之を怪み直に劍を抜てロサモンドに迫り強ひて其殘杯を飲ましむロサモンド通るゝに途なく遂に之を飲みヘルミキスと枕を並へ毒を以て死せりとぞ

勝方と負方と

良齋閑話に曰く織田信長公の桶ヶ狭間にて今川義元と大に戦ひし前夜諸將と會し酒宴を開き自ら扇を開き人間一生五十年生すれば滅ありと歌ひ舞はれたり太閤記には此戦は前より勝利あるは明

白に知れたるゆへ信長公は恐るゝこと無きように書きたれども左様のことに非るべし百里を行く者は九十里を半とす況んや今川は五萬の大軍にて殊に義元は名高き猛將なり信長公の兵は僅に四千に過ぎざる寡兵あり信長公智勇ありて勝敗れ大體は寡といへども必勝といふことは計り難あるべし戰國騷亂の世に出て國小兵寡しといへども降人となり人の下に屈せんより潔く大義のために死し名は百代を照すべしと思ふ心より人間一生五十年生すれば滅ありと歌はれしは一字一涙楚王塚下の歌と同じく哀あり云々此良齋の觀察法は能く新井白石の史類を讀むには勝方負方といふ事を看破せされは實事を思ひ取り難しといへるに合へり所謂勝ては官軍負ければ賊軍的の史論は古今東西ともに最も陥り易き弊とす彼の七年戦役に於て普王フリードリヒ大王三萬四千の兵を以てカールフォンロートリンゲン及びダウンの率ゆる八萬の奥兵をロイテンに敗るや其前日フリードリヒは部下の將士に對し訓示するところあり而て多くの史家は此訓示に對し太閤記々者れ如き評を爲せども余は斷て良齋先生と同一の斷案を下さむとする者なりフリードリヒの訓示の大要に曰く

Lassen Sie es sich also gesagt sein, ich werde gegen alle Regeln der Kunst die beinahe dreimal stärkere Armee des Prinzen Karl angreifen, wo ich sie finde. Es ist hier nicht die Frage von der Anzahl der Feinde, noch von der Wichtigkeit ihres gewählten Postens; alles dieses, hoffe ich, wird die Herzhaftigkeit meiner Truppen und die richtige Befolgung meiner Anordnungen zu überwinden suchen. Ich muss diesen Schritt machen, oder es ist alles verloren, wir müssen den Feind schlagen oder uns alle vor seinen

Batterien begraben lassen. So denke ich, so werde ich handeln. Wenn Sie Preussen sind, so werden Sie gewiss sich dieses Vorzugs nicht unwürdig machen. Ist aber der eine oder andere unter ihnen, der sich fürchtet, alle Gefahren mit mir zu teilen, der kann noch heute seinen Abschied erhalten, ohne von mir den geringsten Vorwurf zu erteilen.

のう山の煙

山

咲

遠寺の梵鐘夕をつげて秋風漸々、高嶺に迷ふ白雲、散りて縷となり、煙のごとく時雨つゝ、さらさら窓を隔つる芭蕉にねどづれ、荒れたる舎のひまもりて、衣の袖のひぢまさりゆくに、青燈光り暗くして、書に向へる心もいつし空になりて、考ふともなく思ひ出てゐるゝは、のう山の煙と消えに友の事なり。うげろふの夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬ、いづれもはかなけれど、人れ命のあはれはあきや、げに朝日さゝぬまの露ありけり、白馬銀鞍、意氣揚々たりし、當年洛陽の竹馬の友、今はいつくにうある、見あぐれば蒼天高うして孤雁いたづかに叫び、見わたせば九泉遠くして、流水空しく咽ぶ、あはれ諸共に月にちきり、花にむつび、諸共に螢をあつめ、雪をつみたる我友が、思へば腸もさけむばうりにうある、先き立つも後るゝも、同どうき世の夢なりとはきけど、末の松山するかけて、松の緑りの變じと契りし友に後れたるばかり悲しきことはあざりけり、なしか我友ありし我友のあつ。しきよ、うの友は年は我れより二歳の長に、我れのか細く、瘦せ立ちたるに反し、骨ふとく、肉こえて筋肉逞まき姿ありき、また我が心

弱く粗笨なると異り、かれは周到なる強き心ばへをもちりき、只談論を好み文の卷を愛づる癖は、我れと同じかりき、思へばいと忍るゝ、朝な夕な一つの机に共に書を讀み、同じ硯に墨すり合ひて、ともに學び、ともにかたりて、ある時は議論をたゝし、泡を飛ばし、聲を勵まして、はてはいさのひとあり彼れけふ限り君を見ずと云へば、我も物言はずと腹だてるも屢ありき、されど明くる晨には互に、悔いわびなどして學びの舎に、共に通ふを常とせり、春は堇花ひき、土筆ぬきに蝴蝶の影をおひめぐり、秋は木の實ひろひ、草花あつめに家路もわすれて野山を分けゆくかど、親々の心を痛めしも二度三度にはあらざりき、されどやうゝ年長するに及びては、共に誠め共に勵みひたすら學びの道をいそしみて我れを兄として敬へば彼れ我を弟として愛したり、されど將來の身を立る道は二人望をことにしうれはいたく海軍を好みてネルリン將軍の事業は常にその理想とするところありき、我は體も弱く家のかゝつらひもあれば文の路を修めむと思ひぬ、されど君のため、國のため盡さむとする赤心は一かりけり、去ぬる年かの友は兵學校れ試験をうけぬ、かしてにつどへる人いと多しと聞きしものと卓絶する彼の學才は容易くよき結果を得き、この時我れ彼れの前途春潮の漲るごとなるを喜びしに、彼れ浩然として天を仰ぎつゝ、さるにても君と別るゝことの悲しさよと言ふに我もえもいはずあはれと思ひき、その後は心あき世の風雲に隔てられ只夏れ休みに逢ひて長き日を語り暮らすを、こよなき楽しみとせしが今年も千秋の思ひを包みて家に歸れば、彼既に坐にあり容姿さきより、ひときは嚴そかに見えしが、あんとあき物思はしげなるに、いのにしてかど先づ問ふに彼れ云ふやう、こたが軍の道を學び終へ

て將校の列に入り愛宕といふ軍船にのり、唐國に向ふなり、出船の日もま近ければ、いと繁げけれども只御身とひと目逢ひて行かむと思ひ、切に艦長に請ひてあへりぬ、あすは又横須賀にうへりゆくなりと、いふに、我胸ふさがりしも、さる可きこと、いふ時にあふずと思ひ、心強きこと云ひて、彼れの成功の一段落を祝しぬ、この夜心ばかりの酒着と、のへて夜ふくるまで語りひぬ、我れ曰く彼れ苟も國家の干城と、うぞへられ、異國に向ふ、まことに武士の面を起すべき秋なり、我が命は既に大君のため、國のために捧げたり、心のこすことなし、只君の知れること我に一人の老母あり、君願くは心してよと、我れ聲を勵まして曰くさることは、まへて心に懸けそと、友莞爾として、君のあるあり、後顧の患まなく、あしといひてロングサインの清曲を歌ひしり、その聲は猶耳に遺れるものを、あゝされど此の時誰かは知らむ、ふれず此世に別れあらんとは、その後、事に觸れ折につけて思ひ出さぬ時もなきに、唐國あたり、風雲いよく荒れすさむと聞き、安き心もなく、日毎に新聞も先づその條のけろれに、ある日の事、ふと白河にて某少尉討死せりとあるを見て、胸とろろき、夢心地しつゝ、されど同苗の人多しと思ひうへして、讀みもてゆくに、まがひもなき、友の身の上なりけり、あゝ此の事彼れの老母に告げむか、その悲しみやいかたむ、告げずとも、遂に知れなむ、あゝ此時の心地、思ひ出つるも腸斷ゆるばかりなり、あゝ我友は旭日の御旗の下に大和心の花と散りたり、雄々しきかなを、しきのあ、まことにこれ櫻花に匂ふ日本魂、うれ又欣然として瞑せしならむ、されどひとりのみれる我れは、さながら浮雲の空に浮べる思ひのみぞせらるゝ、思へばいど胸いたし、過ぎに―とき共に寫し、此

の姿、形見にとてうつさるゝものを、その雄々しき花は顔はありしときに變ふねど、その唇はまた麗はしき聲に動あらず、これよりはよきこと、あじきこと、誰れにか告げむ、共にめでにし文の巻は今猶こゝにあれども、どもによみにし君は在さず日頃契りおさし事も水の流に浮ぶみかわと消えたり、されど我友は大和島根のみ國の爲め芳しき大和心の花と散りぬ、我ひとり碌々として驚駭つひに千里にたへず、何時御國のために盡し得むと思へば流るゝ汗の涙にきほふぞすべあきや、

踏 雲 日 記

山 口 雪 秋

富士山は新版圖の新高山を除いては日本第一の高山であると云ふ事は學校へ行かない小供でも知て居る而も話を聞いたり見たりする事は多いがさて一番登うと思ひ立つのは大勢の連でもなければあか／＼面倒だそこで本年は年來に宿望の富士登山を企てた時と既に登山は期節が終りし一句の後而も安臥してさほど農作物に心配のあき人でも氣遣ふ二百十日の前日即ち八月卅一日である然し天候は自分の考では大丈夫と思つた例の御殿場へ着いたのが午後第九時半で此停車場の半丁ばかり横手に須走村に通ずる鐵道馬車の停車場がある直にそこへ行くと恰度發車の時刻であつた須走村まで凡そ二里強で其の一人の乗車賃が只の廿四錢これかゝは瘦馬に鞭と科して裾野より追々と登るのである馬車は十二人乗合できつしりつするとあ／＼暑いが然し窓のらのぞくと四方八方遠山近山が連つて其の一方にはいざ来るから出て來いと云ふ身のまへで富士山が笑ふて居る

どうりすると須走行きの長い輜重縦列に出くはすと馬車が遮られて進めぬ事も、凡二時間半程にて須走村に着いたこゝは殆ど箱根の湖水と高さを同うするこの話時に午後二時半(十一時三十分)に馬車に乗つたから、安宿のズラリと兩側に列んで居る兎に角甲州屋と云ふのが登山に便を與へるとの事で此の宿に一体する事にして其間に此屋の老主人の氣輕お周旋にまゐりして乗馬と剛力とを頼んぶ、乗馬と云ふのは此の村より馬返しと云ふ所(凡二里強)まで行くのに砂路であるから歩行するより馬にて行く方がよいと云ふのら頼んだだけだ剛力は登山案内者兼荷物運び人でも云ふべきか登山には是非とも一人は入用なる人物なり以上の用意の外當時石室閉鎖の後で六合目(宿より外にない)(例年舊六月一日より七月廿六日まで)の山中の食物として辨當を携へて行かねばならぬ丁度午後三時半に凡ての用意を整ふた、先づ須走村の淺間神社に詣で、宿より二三丁正面門額、彰仁親王殿下の御筆なる國威震耀の四文字を恭しく拜したさて門内は通例の社内に異なる事もなし此の社の横手から直に例の馬に跨りポコポコと乗り出した前面には今や登り出す富士が美しう薄紫の色にほこり顔で裾野を見おろして居る様に思はれてはや二三寸も穗に出でたすゝさが秋風になひいて居る、

ちうちうちとふとの裾野を分け行けは勇めるさまに秋風をふく

此の面白い景色に添て六日の月が晴れ渡つた空に影うすく淋しうに馬上に人を慰めて居る馬子は馬の一丁も後から来る四時十五分に馬返しに着いて馬を下りると茶店から茶を注いで二十ぺん程もお務を済した駄菓子をとへられてあつた馬子が馬をひいて歸つた此の馬に乗る間を歩くのは

愚であるなとなればだ僅に四十五錢で生きた下駄を借る様なもので一寸趣味もある一厘も酒手おど口ばしらい處がしほらしい、程なく例の剛力も到着したうらいよ、登り始めた剛力は随分八九貫目の物品を持つ事が出来る自分には人に注意せられて食物は食パン梅干玉子衣物は僅にフランクネルのシャツ一枚と且つ宿の主人の注意で綿入を用意した草鞋が先づ一人分六七足凡ての物悉く剛力の背に托して自分等は全くハンカチ一枚も持たない程で登つた十八丁程で假休(かりやす)と云ふ所がある此より數丁一の宮雲切神社(又雲霧)に達した時に五時半次に須走村より百三丁御室淺間六時晝食とて茶店が一家ある出發の時宿の主人が此日は六合目までは六ヶ敷いから此所にて宿れと云はれたがな、登山の氣が急であるの宿る様な氣が起ちぬ十分程休み白銅一枚投げて上ればすぐ一軒の家がある此の家にて所謂金剛杖を賣てゐる八角の白木の棒で東口改と焼印かたしてあるのが一本九錢ふれが將來大恩人であるの須走村より百十六丁太郎坊に着いた頃には暮色蒼然と云ふ鹽梅で一合目は石室うつふれて知れぬ内に過ぎ午後七時半二合目の石室に達した人氣がよいと云ふたら甚しい剛力と自分等二人と僅に三人が大富士山の旅客である、剛力が晝食にて借りた提灯を点ける片月がいよゝゝ淋しうにゐる路は焼砂で兩側に灌木が繁つて路巾が三尺内外で凸凹甚だしい提灯の影で自分の脚を見つめて登つて行く段々植物が矮少にあつてまばらに見ゆる三合目で一息すれバ日もいつしか隠れて四方が眞暗で別に話もしないのらシンとて耳にも目にも觸れぬ『サー行う』と亦も勇を鼓して登り出す焼石の上をより石炭の焼かすの様な小石れ上を踏んだり金剛杖を力に無言で登つて行く四合も過ぎ五合目に着きて見

れば戸隙に火影がもれて居るから剛力は『おぢさん開けてくれ』と叫んだすると石室の内から『應』と云ふて戸を開けたのが五十二三のお爺やレうれーやと内へ飛び込んでそのまゝコリそころんて一いさした時は此の石室で宿りたい様氣がして剛力が六合目にはうつくしいと進めてくれた言を云ひ消してやるうと思ふたがイヤ／＼こゝ一番耐へねば明日が辛／＼し人間萬事此の呼吸が第一と悟つて見れば今一合登なければならぬと金剛杖を一振り試み剛力を却て促して五合目のふやぢの澁茶に舌つゝみして『左様から御邪魔』の一言を残して登り初めたまゝ／＼つらい提灯の蠟そくの壽命も僅に六分ばかりとあり道は一步一步嶮峻とある六合目は夜中故一寸起きないおぢ剛力が云へば益々心細くなる然し室がなければ野營とさめ込むまでの事だと持參の玉子で喉を濕して漸く九時四十分に六目合に達した心の中で萬歳と云ふつもりであつたが口へは出なうつた剛力が叫んだら直ぐ戸を開けたのが四十前後のおやぢでかみさんと娘の子が居つた三尺四方ばかりの地火爐があつた天井は丸太で低いゝ頭をうつた板の上に蓆が布いてある八疊程の間が三つ長く續いて四方には奉納の手拭様で『大願成就』と『登岳萬度』と染めた布が吊るして柱に例の日本古來の惡習たる樂書が爲してある中には横文字もある布さんの上に安臥した時は實に眞の無我底に入るとでも云ふてよい自分の有無も解らない暫く休みて後食に就き實は夕飯を喰はずに此の嶮阪を登つたので空腹は少々感じた持參の辨當を開きパン牛肉のかんづめを食つた、食つたがフランオルと綿入を着て横になつた、何千尺の高い處やはり下界の夢を見た、

九月一日、頻に『御來迎』、『御來迎』と叫ぶるゝ起上つて石室を出ると紅旭が雲海れ中より浮び出

て居るアレが箱根の湖コレが甲斐れ三日月湖(山中湖)と十三州が眼下にすぐ見える今日は二百十日は大厄日だが日本晴れで今年二十余回登山した剛力でさへこんな日は一日しゝのなかつたと頻に賞賛して居るが別段天が禮も云はさいから黙つてしまつた、眺望が實に面白い、

雲海渺茫紅日輝

先排翠靄照巖扉

乾坤獨秀無人境

但有中天白鶴飛

すると例のおやぢがブリキは少々顔洗鉢に三寸ばかり水を入れて來り之をおもひにてお使あされと云ふコップに一パイ口すゝぎ水をくれるのが余程待遇のよいつもりと思ふて居るらしい、彼は牛乳で顔を洗ふフランス國の美人のそれかゝねと印度人に税を收めそうな黒いつゝをもつたいらしく洗ふて食事をすませて勘定は下山と午前六時頃に六合目を出て七合を見たゝゝかゝは七合入合及び頂上の石室も實に近く見えて随分大股なれば飛んで登れそうだがさて六合と七合の間は東口中第一の難所と剛力もいふ位であつたまらないうツツの燒岩の四十五度も傾ひて居る山を十數丁一本の植物もなく只富士虎杖とか云ふ草少ゝあるばかり只草鞋の破れたものが道の菜となつて居る、四十分間程にて七合目に着いたヤレ／＼と思ふと剛力曰く七合と八合の間は外の二分程あるとオヤ／＼とあきれて物う云へさいゝさして死んでも登つてやる覺悟と意氣込んで登るゝある程長い／＼登れども／＼漸く七時四十分頃に八合の石室に登り着いた、此石室より北西に當りて二三百間の所に二十間程の谷間に所謂萬年雪と云ふ雪うり白く殘て居る一口喰ひたひ様氣もするが不自由なもの羽がさいうらあきらめて玉子三つばに英氣を養ふて進んだ

汗がダラ／＼と出てフランネルがいやにあつたのち一寸それを口實に剛力を足止めさせ之をぬ

きてまた一体すると少々冷氣を感じるのら心地よいのくする程に八時十分に九合目に達しうれれ
り所謂胸つき八丁とう嶮嶮なりと聞けどさほぞ恐ろしくはあいモハヤ嶮嶮には少々なれ居るか
八丁や九丁なんのその十五合目までもあれかしと云はぬばうりの傲氣で實は内心九合が頂上で
あれのしと思ふたの眞はであつた、此の難所も一時間程にすぎ去り九時半頃頂上伊豆嶽の久須志
神社の前に達した、石室の前に二三列のである前にブトンと腰を置いた時は何も見えなかつたが
後をふり向くと例の氣象臺の連中が二人と僕が一人そして自分は其の飲料水の桶の蓋に腰をうけ
て居つたのには一番驚いた地上にベタリ直ると『お茶をバイ』と其の従僕先生が注いで出したの
は甘露々々、昨夜は何度でしと問ふたら最寒が華氏三十九度である而も本日は二十日にも係
らず全國快晴の報を得たと聞いし時は多少自分等の天氣豫報の却て確實ありし事をはこることもあ
しに嘯いた、

『サーコレカラ内院を一周するのが三十六丁』と剛力に促されて所謂舊噴火口の周圍の燒石山をめ
ぐるのである最初石室より右手の第二成就岳安の河原として燒石が三ツ四ツ積である第三が駒ヶ岳
で其の下に梯子が二つ岩の間に懸けてあるこれ登れば官幣大社淺間本社奥宮の石室で即ち木花
開屋姫を祭り奉るとかや次に三島岳に傍ふて三峽の橋を渡りて前面に岩れ如く聳ゆるのが野中氏
の嘗て烈寒を犯して觀象に従事せし劍ヶ峯である之も一つの燒石山に過ぎない眼底一望駿州甲州
信州其他北陸の諸山を遠望すべく白雲点々疊山の間に轉つて實に奇絶である、
日蔭の岩の下には氷柱が一尺ばかりも幾條となくさがつて居る此の劍ヶ峯より内部に向ひ雷岩白

山、岳釋迦岳を横手に見て天拜所に到る、此の間人の行き得る所に雪があるくら其の傍に近づきて
一口試みたが天水自々美味あり其の解氷水で顔を洗つたが六合目のブリキに入物の水を思ひ出し
て實に有がたかりし金明水と云ふが潤れておいう神德水と云ふ方を代用して金明水と稱へて居
る一杯の價實に千金だ二杯飲んだら腸カタルと遠慮して藥師岳に歸つて來たのう殆ど正午又測候
所の前で休だ所員が何う富士山の主人公然たる處がな／＼おもしろい、これか下り初めるの
だがつまり富士山の頂上は城の焼け落ちた後へ見舞に來たのだと思へば大した相違はない
下りか砂走で巾う三尺ばかりにして燒砂が殆ど脛を没するほどで存外早く下れるが然し一瀉千里
は勢で下れば苦しい、

ふもとより見ればうるはし登りてはた、燒石れふトの神山

下りに草鞋のすり切れて踵のなくなるのには驚く金剛杖なる恩人をたよりに六合目迄三足で午後
一時前に六合目石室に着いたお粥に玉子を入れてもつてすゝたさて勘定と云ふと一夜一人
の石室の宿が食事として金三十四錢一回の食事が何んでも十六錢五厘玉子一個五錢別段高くな
いが安くもない但し剛力殿の宿錢は要せぬ存外れやぢけ周施が骨が折れた様に見受けたら半圓
心附けて遣つたが其れは多いの少いか知れぬ午後一時より徐々と而も五歩に一休十歩に一息と
云ふ風に阿房宮然と下つた午後四時に晝食迄下つた、兼ねて甲州屋に頼んで置いた馬を此の晝食
より十八丁ほど下の假休までひいて迎ひに來る様にと剛力に申付けて剛力を先きに歸した、須走
村より九十丁ある假休に着いたのが五時こゝへ迎へに來た馬に跨り阪を下りヤレ／＼うれしや歩

行しなくともモ一よいと思ふた時には思はず知らず馬のたて髪を撫でてやつた十八丁にて馬返しに着きこゝより二里余裾野のそゝ原を馬にてポコ／＼片月を省り今見るとゾットする高い富士笑ふてあがめ七時に須走村に着き甲州屋にて下り湯に入り食事をなして安臥した時には極樂の思ひがいた、

九月二日夜半蚤君の總攻撃で閉口朝七時の馬車にて九時御殿場に出で九時半の西行列車に乗つた時にふト山を窓から見ると白雲の一バイにう／＼居つた自分れ下る時には少々麓に雲を踏で下つたばかりで踏雲とは云へない様大厄日に意外れ快晴であつた、

富士登山秘訣とも云ふべきは徐々と歩いて四顧せず只脚下のみを見つめ五勺毎に二三分づゝ休み猥に飲食せざるを最上乘とし下山は踵に厚き草鞋(麻製なうば一層妙あらん?)を用意して是も徐々下るを宜しとす勿論空氣薄きを以て成るべくは鼻のみにて呼吸する方よりいゝ様に思はれる是は後來登山をせむとする方々の爲一言御注意して置くのである、(終)

瓦 鳴

敲 門 瓦 子

●憂へざるものは之れを解とべらうと憤らざるものは之を會すべらうと、憂憤は是れ浮屠氏の所謂機縁なり。もしそれ箇の好漢ありて三百六十骨節八萬四千の毫竅を以て、通身に此大憂憤を起して、此二字に參究一日夜提撕して間斷するとかく、熱憂盡く胸中の鬱結を鎔融し去り、憤煩全く腦裡の懊惱を燃燒し了らば始めて驀然として打發し、濶然として洞豁し、生死岸頭に於て能縱

能奪能殺能活大自在の柄を握り得ん。一たび此柄を握らば以て歷代の祖師を叩頭せしめ驕佛魔禪の死命を制すると、掌を翻すよりも易すらんとす。豈にまた大々慶快ならずとせんや。

●瓦子、嬌音滑らかに低聲喃々とすると能はず、數々瓦釜の殃を招き破鐘の厄にかゝる。喟然として歎すらく、もし情激し神注するとかくば即ち止まんも、一たび情激し神注せる時、もの言はんか、聲帶銅板に如く張り、四千五百〇〇の氣息急遽の如く發するを奈何せん。

●提封百萬石を誇れる金城の地もまた甚だ逼促なるかな疎狂の一措大瓦子猶聲を潜め息を收めざるべからざるや。一日不平に禁へず、去りて山澤に嘯き聊か以て平生の掩抑を暢べんと欲し東のうた聯兵場を過ぐ、ふと前面を望めば遶遶たる群山、大なるもれば覆篋の聚まれるが如く、小なるものは蟻垤の列れるが如し、瓦子、呆然として自失去、地に投し仰いで大唐の遼廓にして闕なく遊雲の融泄たるを見て僅かに懷を遣るのみ。少頃にして螽斯あり、瓦子れ胸に上り、蜻蛉あり、瓦子れ帽庇に憩ふ、願れば身は是れ苜蓿寸餘れ白粧の中に没れてあはれ一尺挺の捨てられしが如し。瓦子、赧然として蹶起しまた東を指して疾驅せり。

●瓦子一日畫帖を繙く。人あり脊を拊て曰く、子にして之れを嗜むると、瓦子驚き巻を蔽ふて遶ると一步。越えて一日歌集を手にす。人あり、側より窺き見て曰く、子にして之を悦ぶると、瓦子其意外に愕き巻を落して退ると十歩。その翌日數莖の莖を衣囊に挿む。人あり、怪みて曰く、吾子にして猶之れを愛するやと、瓦子、呆れて遁るゝと實に一百歩。

●京攝優柔の風と關東剛果の風との相會ふ所、北國情弱の俗を致せるは、猶彼の北東、南東の二

貿易風が相合ふ所、赤道無風なる氣界の沈滞をなせる如きか。

●魚肉の民とは魚肉の滋味に饜くの民をいふにあらずるなり。虐主の酷烈、民其生を聊せざる、粗上の魚の如きに譬ふるなり、北辰校の學生とは所謂北辰の其所に居て衆星をして之に環嚮せしむる底の意氣ある英俊をさして呼ぶにあらずるなり。帽の前章に星に象りて四稜形の黄銅をつけたる悄然たる青書生等といふありけり。

●詩に曰く、我を知るものは我心憂ありといふ、我を知ざるものは我何なり求む、といふ瓦子の憂ふる所まことに他なし。今や大王天下の兵を鎖して金人を作り、蜀山を童して阿房を營み、大王の威四海の内に重しと雖も、民は膏血を臨み見て慄然として之れを避くると塞外戍卒の間々偶語すること見れば、或は恐る焚き棄てし竹帛の、煙につぐの火あらんが、噫嚅たる禹の九州誰れか萬年の後までも斯民の爲めに圖る者ぞ。求むる所もまた全くなきにしもあらず、爵にあらず、祿にあらず、又黄金の印にもあらず、たゞ膂力千斤を擡ぐる壯夫の鐵腕のみ。

●瓦子、平かならざるとあれば襟を開きて風に臨む、紅をわたり緑を撫で、徐に來る軟うき風面を吹き腋をすむれば、不平渙然として釋け、塔然として忘る。

●瓦子、憤るとあれば走りて屋外に出づ。初めは地を蹴石を飛ばして突き進むと猪の如きも、漸く蹈むと軽く歩くと緩くありゆきて、終に飄乎として蝶の如く舞はんと欲するに至りて踟躕として歸る。

●瓦子悶るとあれば、庭に下り太き棍棒をとりて頑石を打つと一百。悶汗となりて蒸散するに

至りて止む

●世は花れ薫よりも銅の臭を愛し、竹の中虚しきよりも魚腸樽の盈てるを悦び、水仙の蕭瑟たるよりも蒜の球の肥大なるを賞するやふになりぬ。

●自ら省みて其及ばざるを思へば、忸怩として硯を碎かんと欲し。翻りて鼠肝虫臂の徒の跋扈するを見れば、奮然として筆を握りて悶癢を覺ゆ。

●洪自誠曰く、山林は樂を談するものは未だ必ずしも山林の趣を得ず、名利の談を厭ふものは未だ必ずしも名利の情を忘れずと。然りされども瓦子は猶少くとも煙霞泉石は談、以て獵点の促々たるに代へ、征利の齟齬を避けて林壑の詩趣を品せんと欲するなり。

●昨非庵日纂に曰く、人の詐りを覺るも言に形はされば無限の味ありと、無限の味ありと稱する所、無限の味あり、會得てゐるに至れば、得失贈興は是非紛起するの中一雙冷眼を放ち得て以て譎詐歛陷の世に處して雍容愉快一生受用不盡ならん。

●明の夏原吉曰く、某幼き時犯すものあれば怒らずんばあらず、初めは色に忍び終りは心に忍ぶ、久しければ自ら熟し、殊に人と較せずと。之れを世の便佞陰柔の輩は、色に秘し心に潜め、久しくして、啣み唯其力及ばざる、己れに不利あるを計量して、逡巡して、敢て人と較せざるものに比すれば、其心術の汚潔其差、實に天淵も雷あらずるを見る。また急就れものは遠養にあらず、久々純熟の功を積み、後始めて内外打成一片、渾然として支梧する所あきの蔗境に達すべきを知るあり。

●潤歩せんりち、大衢廣くして且つ直し。仰いて行らんかな、天高くして雲奇なり。吟詠せんりな、樂洩々たるものあり。高談せんかあ寂しき所なく憚る所なし。

●敢て速かに藝を破り箴を毀ち、俊鷗をして秋風に羽撃たしめよ。白隱は云はずや、藕線糸中快鷹を弄すと。然り、實に藕線之を熱げば可なり。

●益々繁縟となりゆく政府の保護干涉の下に脱服するは文明人第一の資格ありとか。されば颯々たる古代林の籟より、擾々たる哀求や、紛争の聲は文明人の鼓膜には「樂音」あるべし。

●世には固より所謂沈黙の能辯もあふん、不言の雄論もあふん、無聲の感興を惹くと有聲に勝るあふん、然れども世にはまた沈黙の詐りあり不言の欺きあり無聲の隱忍有聲に超ゆるとあるを記せざるべからず。

●瓦子は足下等に詩人の稱を呈せんか。足下等黙り虫すく見れば沈黙とあて推し、尻の重さものと目しては必ず自重として服す、爲めに蟾蜍も輪蛞も豪傑の班に入り、石地藏も孕牛もべやサも英雄の列に加はらんとす。足下等の鑑識、否醇化力想化力また偉ならずや。

●瓦子、固より七難を併せ賜らんとを神に禱りて己の器量の試煉に供せんと欲せし山中幸盛の勇かゝと雖も、チエツカード、ライフは其最も希ふ所あり。彼の省略と、歛手と、陰柔とを以て渡世の三窟とあすが如き異儒の輩は眞に狡免の屬、とちに談るに足らざるなり。

●瓦子、人、馬を呼んで鹿となすも訝はず、鐘を呼んで甕とあすも頷かん、是れ人れ意を迎ふるにも、洩ふにもあふざるなり、聲を喰ふして辯難するに足る程の差異を認めざればなり、否認む

べきものにあらざればなり。

●瓦子、鬱するにあれば眼を瞑りて其由る所を尋ぬ。もし些末零碎の因なるとを知らるときは自ら其局量褊狭あるを慚ぢ且つ憤り、起つて渾身の力を奮ひて踴躍一番す、胸裡一團の結塊乃ち一百餘八れ小顆となり。各二十餘七顆四体に分かれて四散す。是に於てまた静坐し、机に凭りて深く呼吸すると三たびなれば、慚憤や、顆粒や、瓦斯となりて飛び去り頓に清爽を覺ゆ。

●瓦子の友に優遊に過ぎて六月の考試に第せざりし者あり。瓦子之れを慰めんを欲して一日彼を某驛の客舎に訪ひ、未だ一語と發せず彼從容、瓦子に謂て曰く、我志徒に大にして才至つて疎かり、しるも自ら勵むとをせず、此蹉跌をなせり。然れども衷心私に未だ自ら棄てざる所あり、吾子請ふ安ぜよ。瓦子、其達に服して黙いて彼れを注視すると少頃、話頭一轉してより快談盡くることを知りざりき。

●瓦子、其人の面貌を見て猶憎惡の念を懷くと能はず、言語を交へては親昵の情の油然たることを禁めると能はざると多し、故に其の前に頌して後に毀るの獍者を嫌ふと甚しと雖も、また自らその嚮きに罵りし人を今稱すると少きと能はず。

●瓦子、曾て信水の渡頭に舟を待つや、舟師の惰にして漕ぐとの遲きを怒り、磧の石を踏みて唇齒を破らんとし、渚の葭を摧ぎてはステッキを折らんとす、呟きて曰く、何者の迂漢か、渡船待つは、「俳諧の心」なりといふのと。然れども既にして舟瓦子に乗せて一棹するや、流の浩蕩たる風の嫋々たる、舟の飄乎たる、彼の詞人の套言も思はれて、舷を叩きて歌ひ、また對岸の近きを

恨むれみ。

●瓦子、念頭濃のゐるの時、筒中を索して嘲罵の稿を見れば裂き捨つるもの十に八九、情緒靜のゐるの時、篋底の故紙を檢して憤怨の文あれば概ね一炬に付す。偶々、當の時に免れしものと雖もまた異日覆瓿の料とあることなきを保せず。殊に知れず「瓦鳴」もし本誌に投せざりしあらばその運命また如何あるべきかな。

●人、もし瓦子の妄語を詰らば、拳を堅んか、頭を搔うゝんの。抑また舌を吐きて遁れんろ。あゝのして。

自殺

北櫻 高見之通

過る月北清の役に、拔群れ功を顯はしたる某曹長、近頃自殺せりと聞き、同情の念に堪へず、遂に一篇の文を草す、

第一 凱旋

銀河萬里天に連り、闇夜まばゆき星影、秋あれや、金風淅瀝征衣を拂うて、轉た懷郷の念に堪へず、玉の緒の、今宵も只古郷の夢にむすばれて、寝られぬまゝに、伏井曹長は、ろとベッドを抜け出で、そゝるデッキの上を歩きぬ、

明日は我戀しき山水明媚の故國の港につくとやら、夢ありき、千軍萬馬に身を置きて、夜一夜つゆまどろみもせず、篠つく雨の刀鞘にしたゝりて、流るゝ如く、寒さ亦骨に徹せしうと、物ども

せず、只報國の念、炎えに炎え、いさぎよく戦場の露と覺悟せしが、名將の謀鬼神も窺ふ能はず、千里敵を追ふて雷霆疾風もたいからず、勢猛く弩を張るが如く、瞬く隙に凱旋喇叭我は再び命をつなぎて……而のも無上の光榮を身に帶びて祖先に對しても恥ぢうらうらぬ……否な、我れ伏井曹長は惜しゝらぬ一命をつなぎて、あすは故山の天地に接す、今上皇帝の御運うけまくもかしこし、我瑞穂國の前途めでたうらぬは、

さるにても、郷里の妻は如何ならん、村一番の愛ふしき口元、久々に、我が村はづれの土橋を渡るとき、清きくぼれ泉の内に迎へらるゝここか、一、二、三、四。指を折れは五日間、我は船の上に眠りたりぬ、明日は故國と知りあがり、世に一刻萬里を走る翅もが、

伏井の九魂は天外を走りて、空蟬のもぬけの殻の如くあり、更け行くまゝに海路物凄く、怒れる波は船端にくだけて、紛々亂れ、玄海の餘沫は、さあが天にをどりて船は一上二下、やがて一回轉してまっしぐら東向すれば、燈臺の光ほの見えつ、岸に近きは水色うはる海の面にしられぬ、時計の針は午前三時を指しき、

靜のに、靜ろに、船は港につきぬ、汽笛は朝靄を破つて、一きは哥えたり、あちこちの和船の燈火明滅として、尙船頭は寝りの内にあり、海べをめぐり、西に轉つて、走れる山々は、黒くして、只頂にまばらに生ひたる林の根元のかすりに認めらるゝれみ、東天や、紅を帯びて朝鳥の微けき聲をもらゝつゝ、南北に走りちがひぬ、

某大隊は既に上陸し終はれり、口々に凱旋々々、愉快々々、の聲は思はずほとばしりぬ、言ふも愚か伏井曹長も此の隊の内にゐるありけり

第二 古里の月

月影は、そよぐ稻葉の露に宿りて、空碧玲瓏、鏡の如く、誰が家にか弄ぶ角笛は、秋の中の風を送りて、あちこちと咽ぶ虫の聲々、人をして徒らに秋情に堪えざらしむ、

實は一汽車遅れし爲め、遂にうくは夜の深けて、我が屋なが、心あきて、そこ門を叩きしなりされども戀しければおそ、十里一と時に飛び來れるなり、其れに賞で、萬事赦せよ、……坊は其の儘に寝させよ、明日ゆるくと顔見せん、何に、是れは太郎兵工廠の我が爲めに態々給はせし芋こな、嗚呼亦此の酒の美味いよと！

伏井曹長は、一旦隊に着き、一月餘りの后ち、歸休をゆるされて、飽かぬ我家の庭を照らす月を眺めつゝ、杯を舉げて陶然と酔ひたり、

曹長得々氣揚りて、徐ろに我が戦功を、誰れ憚りぬ妻に物語り出ぬ、亡國の末路は悲しい哉。奸臣の跋扈甚しく、忠臣跡をひそめて、國家はさかづ闇夜の如く、世上騷然、人心恟々たるのとき、折しも天の一方に果然戰端破烈して、戰雲飛び、戰艦動けり、時を違へず我が貔貅幾萬舳艫相銜んで、某の港に上陸し、連戰連勝見る見る數壘を蹂躪して、逃ぐるを追ひつゝ、某日敵の金城鐵壁たる某城攻撃とありぬ、

爰は我が大功を立てし所なれど滿杯一口に傾け盡して、眼光自ら殺氣を帯びつゝ、語り出す様、

味方の軍勢六萬四千。推寄せたりや、ひたひたと。某の城下に肉薄して。十重二十重に取りまきぬ、一時に起る銃砲の響き、互ひにかはす鯨波の聲、烟焰天に漲りて、物凄としとも物凄とし、秘術と盡す軍略は、右に顯はれ左に隠れ、萬騎空を駆けて電のごとく、歩一歩せざる劔の林、我軍たけりはやれども、敵の砲壘のたくして、屍の山をきづくのみ、いつ果つべくも見えざりき、折しも夕日傾けば、其の夜は對陣とありにけり、されば老將いぞ胸をいため給ひ、敵は烏合の衆なれども、只軍門の固きを以て、かくは頑固に手向ふなり、いで殲藥の力を借り、軍門微塵に打ち碎き、只一薙ぎに切り伏せんと、其の大役は誰れ彼れど、撰びて末に伏井こそ、實に此の任を遂はすめと、老將わざわざ使きて、近くよびよせのたまはく、抑も此れ度の合戦は、天下安危の分るゝ處、若し一旦に破るれば、只我軍の恥のみか、我帝國の恥辱にて、上天照す大神より、下歷代の靈廟に、申上べき言葉なし、殊に此度は今古比類なき、全世界の軍勢が、雌雄を顯はす戦さにて、我が日の本の四の海に、功名顯はす折りなれば、斯く自らが手を下げて、ひたすら汝に願ふあり、只潔よく死んでくれと、計策くわしく説きしめし、涙ながらに頼まれるれば、伏井たいた言葉なく、愚痴蒙昧の我にしも、斯く大役を仰せ付け賜はること、冥加にあまりて答へん様なし、命は何う惜しからん。使命を全うせさふんことを、恐れ患ふる計りなりと、涙ながらに御受けして、只大命の恐ろしく、沐浴齋戒征衣を換へ、まだ東雲の霧深きに、殲藥片手にしうと握り、忍び忍びて近寄れば、全軍續きて静に従ふ、されども、敵とて豫ねて期したれば、直ちに其を曹長の、影と認めて砲壘より、雨あふれと打ち出す、矢丸の襖すまなく、面をむくべき様

なければ、満身膽ある曹長は、只平地を進むごと、少しも憶する色もなく、一步に進み一步に伏し城門近く、しづしと、矢丸をさけて近よりぬ、城下は暗し曹長は、しづに壘に身を寄せて門下の土に埋めつゝ、口火をふつと付け終はり、四五間計りとびのきて、東の方に身をひれ伏し、合掌祈願神々の、力を加へ給はれど、念ぜー甲斐やーバーして、天地を崩す噴薬の、今まで巍然と聳えたる、城門微塵に碎けたり、其れよ進めと號令に、全軍潮の寄するごと、亂れ入りしが爰も亦、他の城門のあるありて、全軍しづしためふを、曹長ふつと身を起し、猛然として馳せ進み、猿の木傳ふ其れあらで、壘に飛びれり逃げ惑ふ、敵兵左右に切りちりし、門を開けば弱兵等、只散々に逃げ失せて、我軍凱歌を奏しけり、

嬉然と微笑む我が妻の、喜ぶ顔に曹長は、ひたすら興進みて、夜の深くるを知らず、まゝと飲め、飲め、竹の葉の酒、のめさ感つきず、くめども變はらぬ、最愛れ、妻のゑくばの泉の波の、愛の渚に打ちよすれば、愉快や舞ふよ狸々の舞、聞く仙人は霓裳衣羽れ曲を奏するとかや、我は軍歌を歌はん、汝れは、盆踊りにても、踊れよと、落花狼籍、玉山倒れて興なほ盡さず、只全村は月のはあらく、遠く狂犬の指々と聲すこし、

第三 戰勝祝宴會

よどみに浮ぶうたうたは、且つ消え且つ結びて、やがては皆乾せぬ、實に、ありー都は淺茅が原かや、さあきだに、榮枯盛衰は夢ある哉、三百年の太平は乾坤一變して、四民同權の今日、槍立て、出でし城跡の、軍帽勇ましき兵士の入る衛所とありぬ、何藩の城跡にある某聯隊は、過ぐる

月の遠征に、並びあき勳功を顯はしたれば、今日は招魂祭を兼ねて戰勝祝宴會を開るゝこととなりぬ、練兵場には競馬の盛に催はされ、招魂社には神聖なる式の舉行され、猿芝居、輕業師、落語、ううれ節、物賣の懸け聲、いさましく、村々町々の人出多くて、往來織るが如く、夜に入ると衛所の内には大祝宴の開られぬ、

飲め、食ひ、騒げ、踊れ、はねよ、歌へよ、吟ぜよ、酒は泉の如く、肉は林の如く、密柑の山、柿の丘、毛氈の御化、背囊の達摩、一等卒の今日は怖氣なく士官の劔を振廻はしての大劔舞、中にも滑稽なるつけ髯に軍帽を前後ろに被むりて軍服に高足駄の如き、徹頭徹尾、軍人の宴會は活潑にして無邪氣なり、折しも胴上げは大饗應を受けて、大人數に擔ぎ上げられ、士官は群居る側に下ろされしは、北清役に特功ありー聯隊中にも拔群の勳功を顯はせし伏井曹長あり、萬歳々と共に下ろさるれば、聯隊長是を見て、大杯を持ち行き、曹長の手をしうと握り、貴様の忠義は一國の大名譽となりぬ、あの時の事思ひ出しても、何となく胸塞がる、様か氣がするぞよ、飲め！と自ら三分一計り乾して、手づから曹長に飲ましめ、半ばを引きとりて、勇士の流れ！と聯隊長后飲み盡しめ、曹長榮華身に餘りて、泥酔の眼細く開き、涙にうるむまづげしづつかしつゝ、合掌して謝しぬ、是を見て我も我も、各士官の杯を與ふれば、只無茶苦茶に酔つふれて、其儘其處に前後不覺に倒れけり、

腥風一陳、身を切る寒さに、ふと曹長目を覺ませば、此は如何に、今まで宴會席にありし我は四

方茫茫たる野原に倒れ居りぬ、驚き飛び起きて、あたりを眺むれば、我れは練兵場の中央にありしあり、我れながら合点行かず、ともあれ、常の如く、衛所れ方に歸り行くんとして、進めども、進めども、道分のらず、よく熟々考ふるに、此處は衛所にて、あらざりけり、只茫茫たる野原の、寂寥として萬籟死し、空は一天曇りて薄月のや、道を辨じ得るのみ、曹長は思へらく、然らば我れ既に、冥途とやらに彷徨るる、さるにても今が今迄騒ぎまはりし宴會の、皆ありありと記憶し居るに、而かも身は軍服に帶劍の其儘なるに、不思議と云ふも愚なり、とあたりを靜のに見渡せば、遙かに一点の光り見えたりき、兎もあれ彼處まで行きて然る上にせんと、足を急がせしに、其の光も大きくありて、不思議や只の燈火と思ひに、此方に來るが如く見えぬ、益々不審に打たれて進むに、こは如何に、其の光り忽ち青色に變つて、炎々と燐之つゝ疾風の如く此方に走せ來り、今しも曹長に突きあたるとせり、曹長一時は驚きしが、さては怪物と、心得て軍刀引き抜き、眞ッ二ツに切れは、其火微塵に散亂して、忽ち大火と變つ、野原の雜草に炎え移りて、四方より襲ひかゝり、而も炎ゆる燐火先より、不思議や!!幾多の幽靈顯はれ出でたり、形も恰も枯木の如く、指端皆是れ枯しばの如く、顔面憔悴せるが上に、而くも蒼然として菜色を帶び、口耳まで切れて、爛々たる深紅の火を吹きつゝ、爛々たる眼を以てはつたと睨み、恨を回さんとして、幾百無數の怪物、四方をむつと取巻きぬ、言も愚くや、亡國の死靈、曹長奮然として劍を振ひ、縱横無盡に當れども、次第々々に弱り行きて、遂にばたりと倒るゝを、引きつゝみて、虚空遙かに、さらへ行われしと、思ひしは是れ南柯の夢にして、身は靜かに衛所のベッドの

上にあり、されども、上下の憂々と鳴りて、身体顫き、恐懼の念堪へやらざりしが、折しも起床の喇叭鳴り渡りて、各兵卒の夫れ夫れ起き出づる聲さわがしく、朝日れてらくと窓に入りしに驚きて我も床を出でぬ、

第四 枯 尾 花

日は此處にのみ、清く照る高野の奥は、浮き世の外なれや、讀經の聲曉に徹すれば、菩提の道の遠きを知り、晚鐘無塵の谷々に響けば、實にやまゝ寂滅爲樂の淨土を觀ずらん、常は閉ぢて、只朝々に向ひの山の影のみ訪るゝ、某の法師の柴門を叩く人のありけり、只造り罪の深きに身の措く處を知らず、迷ひ迷うて高野の奥に我が恐ろしき宵々の夢を忘れんよしとがあと、伏井曹長はひたすらに、法師に由來をつげて、安心の道を求めぬ、法師は縷々として倦まず、佛道の宏大あるを説き示し、是の世一切の罪業は何のものかは、幾度か六道の輪廻にさまよひて、前生犯せる罪こそ亦く恐ろしけれ、夫を思へば、尙こそ慚愧せざるを、されども無邊無對の佛智は、汝を救はんとして待たるれば、今より深く佛門に歸依して、生死の境を脱して、安んずるを遂げられよと、ひたすらに教へ説きつくせど、法師の德至らざるにあらねども、迷ひは深く曹長の、只茫茫と五里霧中にある如く、寢てもさめても彼の亡靈にあやまれ、狂氣を帯りて軍籍を除かれ、妻子を捨て、家を出て、天涯の一狂客、野に伏し或は山に寢て、狂ひ狂ひ、迷ひ迷ひ、只夜々に亡靈と戦ひ、只刻々に憔悴して、昔日の体軀は見る影もなく、我ながら亡靈よりも衰へて、遙々高野の聖を尋ねしのだ、悟りは愚の、迷ひは一層に深くあり、手負の猪の狂

ふぞとく、其處をも出で、高野山中深く分け入りぬ、
肌さむみ、雪ともまがふ霜白く、秋たけて、萬樹の黄葉皆ちり失せぬ、誰れか憫む可憐勇者のな
れ果て、音信るゝものは夜半の嵐か、松吹く風か、否よ、亡靈乃來り苦しむるのみ、あらば車
を止めても見まほしき楓樹の花も、恐ろしや炎ゆる燭と見違へつ、白糸かけし龍津瀨も、亡者の
袖ともまがふらん、其れよ鯨波の聲と耳を澄ませば遙か谷間の流れの音あり、夫れ砲臺と近よれ
ば、青苔滑めうに、月光あびし巖石の影ありき、只奥深く分け入りぬ、
湧き出づる清水を尋ねて、兩手に掬んで渴としのび、名もしれぬ草を噛んで、はづかに余命をつ
かぎ、昏々として眠るかと思へば、驀然として駈けめぐり、或ひは潜然として滯泣し、時には呵
々と咲笑つ、野原に戦ぐ枯尾花の野分に弄ばれて、倒れつ起さつ、末遂に、土塊と化するにさ
も似たらんかし

第五 帝 郷

電ふりぬ、鎮守の森は四時色のへぬ、樅の梢の少し動きて、滴相傳へぬ、山鳩の一聲いとも淋し
げに、某れの茅舎に米搗く音のこつあつと響きぬ、
古郷は戀しや、我が狂人となりて、爰に幾年をゐさぬらん、唯何となく、妻こひしくなりて、來
て見れば、戀し戀しの妻は、我が爲めに病を起こし、既に遠く、遠き、夕日の照らす、西れ淨土
の人ぞぞ、

我が子とは聞けば、昨年さる人の引き連れて北海道とやら言ふ人も通はぬ、所に移住せりと、望

の綱の絶え果てし心地せしが、若しやと思ふて、妻の墓所を尋ね行き、誰が親切に建てたりけん、
率塔婆の文字の風打雨淋の内にも、あきうのに讀まれぬ、伏井はひと抱き占めて、熱き涙と共
に長き恨を吐き且つ詫びぬ、裂くる計りに亂るゝ思を推し静め、耳を傾けて返事を待ちぬ、あら
ず、幽明萬里遙かなり、落つる夕日のあかあうと、地に飛び行く尸の一群にこそよせて、胸に記
文遠く彼の世の人に迄托しぬ、

今は早萬事休せり、我は抑も、昨日まで亡靈に苦められて、逃げ惑ひしも、夜々れ呻の、可愛
の妻に聞るゝを悲えみしのみ、されば彼れ亡靈さへ退かば、何ぞ憚らん、偕老同穴と思ひしも
のを、いでや今よりは、我より亡靈をさいなまんと、立ち上れば、亡靈高らかに笑ふて逃げ行く
を、追ひ追ふて、とある海邊に出づれば、忽ち白雲舞下りひうりと飛びのり彼の帝郷にさりぬ、
我も亦行方はいづる白雲の根に取りすがりて、吹くや天つ風、御空遙かにこそ登りけれ、

唯下界には遠くビストルの音響きて、あけにそみたる死屍の、岸打つ波際に横はりしが、折しも
潮の満ちくれば、泡立つ波に、ゆられ、ゆられ、浮きぬ、沈みぬ、流れ行きて、潮風に吹きさら
さるゝ、常盤の松れ翠の色は滴る計りに、今も尙青し。(完)

文 苑

In the pine woods at the foot of Ichinotani, there is a tombstone, grown green and dark with age. Beneath this, Taira-no Atsumori is sleeping eternally. I can not help making an offering of tears to his sad fate.

Among the Taira family he was a man of talent and possessed a quick sensibility to the beauties of nature. In every battle he had accompanied his father, Shurino Taya Tsunemori, but when Hiyo-dorigoe was taken and his family escaped in a boat, he chanced to be belated. On all sides, there could be heard loud warcries from the enemy but the insignia of Taira could be seen nowhere. Then he thought that enemy had won the victory and he made up his mind, getting to the Imperial boat, at least to die before His Majesty; so he jumped into the sea riding on his horse and proceeded vigorously about one chō. when he seemed to have just approached the boat, some one began crying out loudly. At first, owing to the sound of the waves, it could not be understood what he was calling out, when he listened he heard "Come back! come back! gallat chief". He turned shord round and saw a horseman on the beach who was beckoning to him with a fan, and shouting out. "You seem to be a good commander, I think. To turn back before the enemy is a disgrace, is it not? Come back, come back and fight here bravely. I am kumagai-jiro Naokane, the bravest in our country". He kept on crying this out. At this time both sides were watching this spectacle having stopped

fighting.

Then Atsumori spurred his horse to the shore. He was wearing a robe of red brocade and over it light green armour. A helmet with a white star for its crest was on his head, and when these glinted in the retting run or were reflected upon the waves, it was a splendid and graceful sight. Kumagai, who wished to perform an act of great merit by overcoming a commander of high rank, seeing him approach, was delighted. Atsumori was now coming at full speed, whipping his horse with his bond, and no sooner had he reached the place where his horse could only just stand than he drew his sword and shouted. "I have kept you waiting long. Now you, braggart, shall feel the weight of my sword". Instantly Kumagai with readiness closed with him, throwing up the spray, and extending his hands with shouts loud as thunder and moving them as quick as lightning. At the same time Atsumori rushed on him with a wild warcry. Then Kumagai made his horse spring aside upon its haunches and laying hold of the top of his opponent's helmet drew it back violently. When the moment seemed to decide their fate, they both lost their stirrups and fell down together between the horses. They twice or thrice rolled over, sometimes getting up and sometimes falling down, and for a little while they displayed great quality in courage and skill, but in strength they were not equal. Atsumori was under age and not strong enough to resist him. On the other hand, as Kumagai was an eminent warrior, he at length threw him down and pressed him so hard with his knees that he could not move an inch. Then he drew his

sword, and when he raised the visor to slash his neck, he found to his great surprise that his opponent was a youth, in the flower of age, his face white and his teeth dyed black. It was with calm resignation and a smile upon his face that he was closing his eyes as. Kunagai sheathed his sword again and said, "who and what are you? Please tell me your name". "You are too timid to be a braggart. Please cut off my head soon". Well, you know what you speak but I must know your name", and after several entreaties came the answer. "I am Mukandayu Atsumori, the youngest son of Shuri-no-Tayu Tsunemori, and sixteen years old. Cut off my head quickly". This answer caused great emotion to Kunagai so that he wept bitterly. "I would I could save you but you see great force opposing you. You had better die now by my hand rather than be killed by a common soldier. I will transmit your last will to any one whom you wish. Please tell me all". But the answer was repeated as before and Kunagai could not help weeping. At last Kunagai gave up arguing, and shedding tears cut off the head of Atsumori.

Before full beauty was attained one blast chilled him and all hopes of becoming like a radiant rainbow came to nothing.

湖心の月

は　　る　　う

三原の峠を越して、今宵は鳴子の驛に宿り給ふもの、山越しの道は、本道より三四里が程近しと

聞けど、常には人も通はぬ所かれは、道も悪しかるべし、踏迷はぬやう心給へど、今朝中新田立出る折、宿の媼の優しくも心つけ呉れしを心に笑ひて、險しとて何程の事かあらん、十里ばかりは山路は只一息に踏越えて、尾花が末に日も沈まぬ内宿につらんものをと、まだ足馴れの草鞋に朝露ふみ碎きて勇しくも立出でたりが、道にや迷ひし、今は日も暮れはてし、月さへ高く昇りしので、山路れなほも盡さざるを審しけれ、先の程麓の里にて尋ねし折は、峠の路も四里には餘らずとこそ聞きしをあとと思へば、今宵一夜は鳴子の温泉に宿りて、明日は此陸前の國境を越え、まだ見ぬ知らぬ羽前の秋を訪はんと勇みし勢も何所にか失せて、森も林も只薄黒き夜の色に包まれし麓の方淋しく眺めて、我は只一人、岩根ふしき峠の下に立ちぬ。見まはせば、露置き添へし道芝の、葉がくれすだく虫の音は、跡つけし様にはたさ鳴き止み、なほ踏分けぬ峯の方よりは、さぞ肌寒き風吹下して、旅の衣の袂かへすよと見る間に、瘠せ勝に咲く秋草うちかびけて、月の光に見ゆるかぎり、あよよと麓はるうに下り行きぬ。思はずも空さし仰げば、まどろに澄める望れ月、雲なき空にさびしくもりて、數も知らぬ星屑の、砂ちらしやうに、きらめくも心細し。

如何にせん、道問ふべき家もなきかゝる地に、何時まで立ちつくすも甲斐なきを、更けなば更けよ、今は只我足の續うん限りど、漸く心はげまして、隈なく照す月かげを力に、安からぬ思を胸に抱きつゝとぼくと辿り行けば、ふけ行くまゝに身に染む夜の氣は、旅の衣のうすきに迫りて、戦かるゝやうの心地もしつ。空には月かげいや清くかゝれど、あてなき旅にさまよふらん如き身

には、仰ぎ見る毎に澄み行くも反りて心細く、此道のく辿れば志を地に着きぬべきのと、問ふに答の覺束ききものはなし、身のつかれは一足毎につのり行きて、飢さへ今の迫り來ぬ、あはれいかにしてよき我身ぞと、歩む力も失せし折のふ、苦むす岩が根踏滑して、命と頼み草鞋さへふつと切れ、思はぬに又苦しみは一つを加へぬ。

やがて道は登つくして、小暗き林に入りぬ。力と頼む月うげさへももらねば、一入あやむ行手を、黒き獸おんどに遮られては、我知らず幾度の止りつ。

十一時はとくに過ぎぬらん、十二時にも近のるべし、闇立ち込めて果も知られぬ谷底の、流の音のみひとり冴えて、こそ吹く風の音も聞えずありぬ。あはれ、蟬の刈る藻に住む虫の、我のふ好みてとは云ひあたら、飢と勞と恐を抱きて、我一人かゝる人里離れし地に、此夜と過さんとは兼て思掛けざりしをなぞ思へば、都の友はいかに此夜を過すらん、故里の兄弟は樂しき團居に月をや眺むるなど、女々しき思も起りて、兩側より迫れる草をし分くる勢も消えし折のふ、道は右に折れて、木立は急に薄くなり、月影もり來る木がくれに、思ひなしにや行手はるけく、ちふくと灯のかげ見ゆる様なる心地しぬ、嬉しとばあり、飢も勞れも忘れ果て、夢心地に走行けば、林はやがてつきて、思ひきや、水漫々たる湖はあらはれたり。周回は二十町もありぬべきや、四方は山に圍まれて、漣もあき水の面は、今一彼方の峯にかゝりし月れ光うけて、只薄青きやうなるに、彼方の岸を見やれば、老松一株、水に望みて龍の如く、月にそむける枝も葉も、一色に黒う見られぬ、此方岸には砂地遠くつゝきて、渚邊近く形ばかりの草の家の、月下に一つ立つも

淋しく、先の程見し灯の影は、其小窓よりもるゝありけり。げに、よみちにさまふ人の魂の思はずも法の光見し心地もかくやあらん、我はうれしさに氣も勇みて、眞白き砂地さくくどふみて其小窓に立寄れば、内よりは續經の聲細く聞えて、渚に近き岩うげより、白き鳥れ二羽ばかり、驚きしやうにわたくと飛びぬ。

「旅にあやめるもの」と扉叩けば、燈の影もくくと動くと思えて出て來しは、六十にあまる媼あり。審しげにうち見るを、しかふと事のよし物語りて一夜さの宿乞へば、心やとけし、「鳴子まで行き給ふとか、さては道に迷ひ給しあり、此所よりとても三里には足らねど、足も痛め給へるやうあるに、險しき道と又越え給はんはつらかるべし、見給ふ如き草庵の、元より參らせん夜の具もなければ、おほ寒のらぬ今日此頃の、風引き給ふ程の事もなるべければ、いざ入り給へと心よくうけがひ呉れぬ。さうば許し給へとばうり今更に人の情のうれしく、足清めんと湖の方に行のんとすれば、老いたる人は、「心なく静けき水に波立て給ふな、水底に眠る美しき人の夢を破らん」と驚きしやうに呼止めぬ、審しの事いふものうなと思へど、そを尋ぬべき折にもあらねば、汲み呉れし水に足清めて、内に入り、すゝむるまゝに黒く怪しき飯も舌うちあふして食ひはてつ、ふと家の内見廻せば、部屋は只六疊ばかりにて、破れし壁のほとり、湖の方なる小窓の下に、御佛の名記しものかき据ゑて、其前には讀みさしたる經一卷さし置きぬ、先程のものあるべし、さゝげし香は半燃えつきて、打ちなびく煙静けき部屋の内をめぐりてはやがて消行く。家には外に人ありとも覺えず、我とさう向ひて座れる老いたる人の、雪なす髪ゆるく結びてう

ゝろにうけ、物思ふ如く言葉もなく俯向きたる、土地の様を思ふにつけ、恐しきやうの心地もしつ。

やがて、鳥にやらんきと鳴く音せしが、はた／＼と窓近く飛び下りけはひいて、燈ゆらゆらと瞬きぬ。老いたる人は驚き／＼やうに頭上げて、物の音なんぞうかがふ如く耳傾けたり。

怪しき様の何となく肌寒き心地せられて、只かゝぬ思もすれば、かゝる人里離れし地に年老いし女の一人住むもいふ／＼く、事かよし尋ねんと思ふ時、老いたる人はそを我を見しが、もの云はん様や見えけん、手を上げて靜に押へぬ。我は一人もの凄くて、只其かす様を眺めつ。

窓もる月うげ青く床にうつりて、内も外もしばしは物の音もあかりし時、先程の鳥なるべし、又羽音高く何處にう飛去り／＼様れけはひしつ、老いたる人はそを聞終りて、靜に我が方に膝すり寄せぬ。「旅人よ、御身は我があす様を怪しどよを見給ふべけれど、必ず心遣ひし給ふな」ぞ、いふ聲もいと低し。「何とて去る事を、只見参らすれば外には人も居給はぬ様あるに、御身は一人此地に住給ふにや」。「さればこそ、世にも幸あき身の、自分好みてのゝゝる山家住居、いふうり給ふも理なれど、それには深き譯れありて」と、口どもりぬ。「深き譯どや、老いの身を如何なる故あればかりる山に隠れ給ひしやらん、さまたげなくばもらしたまはじや、今宵計らずもかゝる厚き御情を蒙るも、深き縁れあればこそあるべきに」。「げに一ツ木のげれ雨宿り、一ツ流れの水汲むもふのさ縁と聞くものを、まゝて斯くも言葉かはし参らするは、宿世の一人深きにやあらんさらば、老の身のくり言のみ多かるべけれど、暫し耳貸し給へ」と、御佛の方をかへり見しが、香

燒き添へて、しめやかに語り出しぬ。

「我が身の上も／＼参らせんには、やがて又此湖の底深く沈める、憐れの物語聞かせ参らせでは御心に入り難かるべし。そも此湖は、何時の頃如何にして出て來けんそれは知らねど、ふるさ昔より、如何なる年にも變る事なく、此美しき姿のまゝに過來ぬどこそ聞き侍りしと、其名のほども、今は多く片沼と呼べど、眞の名は村雨の湖と申し侍るにて、此奇しき名の起りしは、過し昔、東に見ゆる鞍ヶ峯の麓に住みし長者の一人娘なる、美しき女の童が、早くも懷しの母に死別れて、孤兒の悲しき者となりしを、やがて又嫁きし後の母ある人いたくもさいなみしうば、其苦しさ堪へうねて、うみの母戀しと泣きつゝ此湖の水底ふかく沈み果てしより、今世までも此内に、石なんど入れて美しき人の夢驚かせば、見る間に一村雨さつと降るとて、何時の世よりか、村雨の湖と呼馴らし侍りしなり。さるに、此聞くさへ憐れの人の眠る湖は、妾にも同トやうなる悲しみを見せて」と、もの思ふらん如くしほし口を閉ぢぬ。

家の邊には虫の聲だに聞えぬに、詞のはたと止みては、一人に静けさまさりて、身は云ひ知らぬ思に充されつ。

老いたる人は又口を開きぬ。

「御耳に入れんも恥しけれど、妾が元の住居は、今宵旅人の行くんどのたまひし鳴子にて侍るなり。思へば早幾とせの昔、仲に立つ人ありて、妾は此邊近き山里に嫁き侍りき。初の程は夫との仲もいと睦まじく、花といふ女さへもち侍りしを、うたてやさはる事の出で來て、花が八つの年、涙な

がらに再び我家に歸る事とはなり侍りぬ。今更に人の契のはかきも悲しく、まして、昨日までうき抱き、頭なでに―いとしき者の上思ひては、心は闇にあふねども、子を思ふ道に迷はれて、朝の風れ身にしむにつけては、風引かずやと心をいため、夕の月の清きを見ては、母よと呼びて泣きてやあらんと忍ばれて、只片時も忘るゝ暇なく、此方の空を望みては涙にのみ日を過し侍りしが、其後人傳に、夫はやがて二度の妻をめとりしと聞きしよりは、妬しと思ふ心はつゆあかりしかど、一入女の上なづりしく、我故世の辛らさも知らぬ幼きものを、繼しき人の手にかくるうと思へば、げに夜半の夢路を辿る折は、魂は此地にさまよひしうと思はれ侍りし」と、其折の悲しさの目に見ゆる、あてもなく眺めし眼には、涙さへ見えぬ。

「それよりは如何に―給ひし」と、あまりの床しさに問ひ出れば、「さればとよ、身に餘る歎きに沈みし故にや、其後一年もなくて、妾は病の床に伏し侍りぬ。あゝ今更甲斐なき事ながら、此病に幸なき身の失せたりけんには、反て悲しき思はせざりけんを、世は思ふにまかせて、やがて有りし昔の身に立かへり侍りし時、幼き者の何憎くてや、後の母ある人いたくも花をにくしみて、日毎夜毎にせめさいなみ、果ては、食はんもれも心よくは與へず、着る衣も薄くなし、かば、見るかゝあはれに瘠せ細りて、母戀し、母懷しと泣く日もあうりしが、日毎にまざる筈の苦しさに堪へうねて、まだ十一は幼き身に、山路越え來て、はうなくも此湖の水沫と消え果てしと、胸つぶるるやうある事を聞き侍りぬ。旅人よ、妾が此折の悲しさ如何なりしと思し給ふ。此身は心も狂はんばかり歎き侍りき」と云ひさして、「許し給へ」とばかり、ばくく涙落しぬ。聞きぬし我

も、幸なき人の心の押しはかゝれて思はずも缺しぼりつ。

「疾くよりのくと知りあんには、又せん術もありけんを、人の心の鬼よりも恐しとは知らねば、只人手にかくる事のいとほ―とばかり思暮し侍りしに、あうく―に思にましたるあはれれ末を見ては、幼き者の心も思ひやられて、我故短き世につくき思かせさせけるよと、人れ止むるも聞かで、妾はやがて此岸に庵結びて一人住み暮し、世になきいとま子のため、さては同ト悲しみの淵に沈みし昔の人れために、日毎讀經にのみ送り侍るなり」と云ひさして涙押し拭ひ、「されど此水底には、同ト繼しき母の筈に泣きし美しき人も住めれば、今はうたみに睡みてや侍るらん、もしさあふんには、其美しき人は、年毎秋の望の夜には、波だに静かなれば、水は表にあらはれて一夜さを遊び暮すところ聞けば、我がいと子も共に水の表に立いでて、昔のまゝある懷しの姿を見せもやせんと、此年頃、十とせ廿とせ、そのみませめてもの願に、月のげ山にうくるゝ頃まで眺め明かせど、吹く風に波立つ事のみ多くて、甲斐なくも見し事侍らねば、ながくへて用なき命あがら、只一目見まく思ふ心に引さされて、又來る年の秋をと樂しからぬ年月を重ね侍りぬ。あはれいつの年の我が願のどとくふん、今宵はうれしくも波静かなれば、若しあづかしの姿や見えんと、いとど頼もしうこそ侍るかれ、あゝ興もなき長物語に、いかに倦果て給ひぬらん、許し給へ」と語終りて、湧きかへる涙ながら又湖の方に耳傾けぬ。月影はいよゝ、冴えてや、小窓のほとり晝の如く、御佛の前なる殘んの香の細き煙たえく―に棚引きぬ。

渚を洗ふ漣か、さつと音するよと思へば、老いたる人は涙拂ひも敢へず、狂ひしやうに立上りて、

小窓の障子押し開きぬ。げには、そはの甘き下露にもれし苔の花を、あたら嵐に咲散らされし親の心を思ひては、甲斐もなき願を頼みて、なほ幾とせれ月日を過すらんと、あはれも一入深くて、我も落つる涙の止め難きを打ち拂ひつゝ、小窓に立寄れば、砂地白き渚邊より、つゞく湖、水美しく、澄みたる面に星影落ちて、げにうつくしく憐れなる人々れ魂も、水底の永き眠より覺めて舞ひもやせん、吹き入る夜の氣いたく肌に染みて、月は淋しく一つ松の上に向ゝりぬ。

新体詩

夏の旅

大村耕山

●白山に登りて

たくふすま

越路の空の白山の

雲の梯今日よぢて

色もゆのゝき夕影に

連峰はるのに見渡せば

八重たゝなはる白雲は

ひくゝ山河をこぢこめて

眉より細き月淡く

銀山碎く海原や

島にも似たる山の影

神代ながらの白妙の

雪に塵なき羽衣や

裾を彩る夕榮は

天つみ神の靈ありて

かりに姿を止むるか

いましも渡る小夜風に

月は下界にふき落ちて

俯せば連なる秀つ峰や

み谷の奥のせゝゝぎは

天女のすさぶ鈴の音か

仙人窟の鉾松に

昔のまゝの雲ぶすま

禪座の聖僧今いづこ

山はとゝぎすあきごよみ

巖もいとゞさびけらし

彌陀ヶ原頭風清く

仰げば高く色ふかき

るりの大空雲たえて

露いとしげき天の川

三、

紫微の宮居もほぞ近し

六、

(彌陀ヶ原ハ海拔二千三百八十二メートルノ所ニアル平原)

山高くてや松明の

光はいともうす白く

清き思にたへかねて

衣を振ひたち舞へば

一曲遠し浩々吟

七、

「嗚呼アルプスの雪の上

群山ひくゝ下に見て」

風を呼びける英雄が

鐵笛空に澄みゆくを

きゝし夕もかゝりしか

八、

「王佐の才に富める身も

唯一曲に梁父吟」

龍と臥しける丈夫が
その南陽の秋の夜半
むすびし夢もかゝりしか

九、

千古に消えぬ天地の
くさき力にうたれつゝ
何とばかりにうなだるゝ
袖に小草の夢安く
静に流るゝ星一つ

十、

いたくも夜はふけにしゝ
萬籟止めぬ室の平
富の上にまどろめば
へぬる爛れ色あせて

露の玉ちる幾千歳

十一、

(室ノ平ハ海拔二千四百五十七メートル室
堂ノアル所也)

夜の帳につゝまゐるゝ
山はありとも見えわうず
星を枕に岳は今
いとも静に眠るなり
遊子今宵の感いりに

十二、

手取峽を過りて、
さしたは峰の松風に
さめ心地よき夢を追ひ
くれては耳を谷川に
洗ふ旅路の未遠く
峽雲十里山青く
水いと白き手取川
曉嵐晴るゝ白峰や
鳥道遙に雲に入る

一、

くしささのしき棧道を
歩む小牛のいとゆるく
やがて消えゆく岩影に
唯鈴の音ぞ残るある

二、

山靈れ巧み百仞の
巖の上に佇めば
眞珠もひそむ岩水に
姿をうつす松影は
蟬の羽うすき黒髪に
心をこむる粧いりも

三、

征矢にも似たる飛潭に
天ろゝり立つ斷崖十丈
翼もつよき隼れ
羽ふしもたゆむ梢より
空にうゝれるや橋一つ

文苑

ふりさけ見れば雲の峰

四、

どきはうきはの葉末より
あかねさす日の影もれて
底の眞砂も拾ふべき
淵にゆうしき撫子の
一もと浮ぶ瀬をはやみ
行衛るくるゝ水煙

五、

超々として峯遠き
白峯にうゝる一ひらの
黒雲雨を誘ふとき
ならの老木の梢より
旅の衣をつゝむある
五百重の雲れ姿をも
ねぶの花散る夕まくれ

六、

くるゝをいそぐ夕まくれ
夢なきねむりさむるとき

いつう月も軒をとひ
麓れ里に煙うすく

ともしび赤し三つ二つ

過ぎいくその山川を
はるけき空に眺むれば
ゆふべの雲と身をなして
たゞよび出づる白山の
風に秋こそたゞよへれ

むら立つ雲の奥ふかく

八、
(完)

和歌

三 諸

友なしにけれはしけの櫓の音に定まりはてぬわが旅心
吹きしきるしべりや風に雲を浮けて静まりいます黒姫の山
越の海の小舟もてあそぶ波を荒みすわれるわが身轉び落んとす
かのれしもたぐりしさにして舟床になやめる母の背たゞく兒

手向けまつる櫓手折ると藪にをれば藪柑子がくれ藪蚊れそひ來ぬ
蜘蛛のいにあはやのゝと身とひけバ早もうゝりぬ醜れ蜘蛛のい

岡藤袴 訪ふ人もなきさの岡の藤袴もうりの色に誰かそめけん 濱荻生定郎

薺花 虫の音はまた夜をのこすあけぼのを朝とさたむる薺のいあ

風前蒨萱 さらぬぐに亂れやすきと秋風にしとろもどろの野邊の蒨萱

俳句

紫 影

餅の中あら家根石とは他國に通ぜぬ謬なるべし

秋風や石で家根貰く加賀の町

名月に只いちどろし家根の石

北地秋雨多し

開きえぬ芙蓉の花やけふも降る

長き夜をはや鎖したり雨の町

家居は夏を宗とすべしといひけん法師はいづくの人にや

檐深くやうく見ゆる天の川

金澤の謠は猶徳島の義太夫の如し

湯の中に謠の聲の良寒し

芋賣の月に謠ふや芋畑

文苑

菊作る老翁のまゆの白さかな
茶の友の約束遅き夜寒かな
夕寒や片側町の木槿垣

果

遊

秋季雜咏

浮

葉

紫の葡萄つふれし袂かき
前垂の菌あけたる厨かき
松茸を教へる人や寺の椽
木犀や灯火暗き宵の雨
木犀や小橋渡りて曲り角
大釜に水堪へたり稻光
山せまり水急にして紅葉哉

朝寒や賊捕はれしまちはづれ
朝寒や洋服なれぬ小役人
南無阿彌陀連の實飛びし念佛かな
日記帳の紙乏しかり秋のくれ

こ

ち

秋季雜咏

柳

露

永き夜をねかへりを打つ二階かな
朝寒や兩國渡るふところ手
朝霧や辨當運ふ漁夫の妻
棚おれて一房もあき葡萄哉
明星や芭蕉の巻葉露にみつ
回廊にちり込む桐の一葉うな
月草に美人洗足す流れのな
初嵐簪にれこる薄烟
此頃の風秋となり病上る
犬蓼ののびて木槿に及ひ犬

夢

人

漢文

謙齋遺稿序

村上 函 峯

是爲先師謙齋中垣先生遺稿。先師歿之十有三年。令嗣謙藏蒐其遺詩。將付諸梓。屬序於余。嗚呼余詎忍序先師之詩乎哉。初余就先師受句讀。旁學詩。苦吟不已。先師曰。汝有詩才。

亦足以成名。然詩小技。蓋學大者。及游江戶。數寄拙文。乞正。先師曰。今日何時。宜讀書講明大義。以報國家。徒事文字。無爲也。會余筮仕本藩。蓋爲先師所薦。亡幾國家多虞。干戈方起。先師參與藩政。奔命東西。不暇寧處。余輩亦投筆奔走執役。明治紀元春。幕兵敗於伏水。王師東征。俄而請西邑主林忠崇。率兵三百人。籍名雪冤。來侵函嶺。我侯遣衆逆擊之。我兵爲其所誘惑。反與賊和。殺軍監中井某。王師來討。我衆欲據險拒之。時先師在江戶。聞變大驚。馳還諄侯以大義言極剴切。侯大悟。命與忠崇絕。迎王師。擊賊走之。事乃釋。蓋大久保氏之有今日。實先師之力也。當時余亦承其指畫。往復兩陣之間。屢瀕危難。僅得全節。今而思之。毛髮竦立。況讀先師詩。不覺涕淚填胸。嗚呼余輩忍序之乎哉。抑先師志存經綸。勤勞國事。其効績固宜大書特筆。非待區々詞章而傳者也。雖然觀其所著。足以窺其履歷性情之一斑。則余亦不可不忍而序之也。且余之於先師。義則師弟。恩猶父子。其出處進退。幸不辱聲名者。皆指導之力也。豈得憚不文。不以闡明其盛德宏業乎。遂略撮其行實。并述舊誼如此。若夫其詩概發乎忠厚之誠。深博典雅。可續唐音。蓋學術緒餘也。余所以不敢費辭以贊稱者。重其大者也。明治庚子八月。

寬猛相濟論

明石華陵

或問曰。天下之政。寬猛相濟則如何。明子曰。不亦善乎。夫父母之於子。慈之至也。慈之至也。故其爲之謀也精。爲之慮也遠。爲子者知其如是也。雖時有叱怒箠楚之威。而不敢怨之。以爲是所

以正吾之惡也。乃以懲以敬。雖時有鞠育惠愛之恩。而不敢慢之。以爲是所以褒吾之善也。乃以進以親。何則慈愛之實。信孚於其子也。君之於民亦然。（高本習齋云。從父母育子。入人君治民。通理是也。）其仁信孚於民。然後

寬猛之政。可得而爲也。三代之盛時。其仁固既信孚於民。是以其所以鼓舞作興。不待爵賞刑罰。而固已有懲惡進善者矣。及至後世。賞焉不必進。罰焉不必懲。蕩然天下無復赴令之民矣。世之言政者皆曰。御天下之術。寬猛而已。三代之時。其相濟之術得。故治。及至後世。其相濟之術不得。故

衰。蓋亦嘗試欲爲寬猛相濟之術。而卒無效。而民狎。而玩焉。則有之。吾以爲是知有寬猛相濟之術。而不知本末之所在也。本者所以實末。而末者待本而行焉。故其本矣。而後末可得而論也。（此段宛然蘇家策論口吻。）昔武王克商。釋百姓之囚。散財發粟。而賑恤貧弱。放馬收戈。而與民休息。使天下先知有仁愛之實。如此則其本固已立矣。（又云。文。字典實。）而天下之民。亦固信其有仁愛之實。然後立之法制禁令。明之刑賞黜陟。以定其淑慝之分。是以民畏而服焉。及後世。專用財利之臣。以病下民。至於今千

數百年。而民心日以離。風俗日以澆。然而言者欲特用寬猛之末。以御天下之民。彼刑罰日益嚴。則民心日益怨。爵賞日益繁。則民心日益慢。以此欲望民之懲惡進善亦難矣哉。吾以爲宜先務其本而後及其末。則寬猛相濟之術得矣。（又云。此段滿腔感慨。）夫民窮則不可以進善。勞則不可以懲惡。上以疑君。下以疑吏。此政本未立也。故欲民之信其上。莫如去其病。夫欲去民病。莫如省費用。費用省于上。則財利之臣無所用。財利之臣無所用。則其取于下也必有節。取于下有節。天下豈有不被其澤乎。

是仁愛之本立也。仁愛之本已立。而後民之信上也。如子之於父母。民之信上。如子之於父母。則有不待刑罰爵賞而自懲惡進善者焉。（又云。此段通用項針回環文法。殆有彈丸穿盤上之妙。○又云。願入手漸次作收束。）豈特不怨且慢而已哉。吾故謂欲

寬○猛○相○濟○。莫○如○立○本○矣○。又云。結得嚴密。○村山冥々云。章句諸評。一一發作者用意之處。余不復贅言。

高木習齋評。凱切渾厚。凡爲政之人。宜鑑于此。

又評。語多精粹。氣甚流暢。所謂以蘇家之文。達程朱之理。蓋幾乎近之。

村山冥々評。文字切實。議論亦克透。

漢詩

未定稿一束

銷夏

巖涯生

幾樹梧桐動素商。水亭閑臥一簾涼。弄風翠竹娟々淨。含露紅蓮冉冉香。

雨後俄涼勤韵席上

蕭々五更雨。忽地載涼過。鴉噪搖殘柳。露繁傾敗荷。天高秋慘淡。庭靜竹婆娑。閑坐誰相伴。清

風滿石坡。

題松蘿堂堂詞兄某之書齋也以松蘿堂爲韵

才學詩文夙露鋒。風流雅事更推宗。向君休問平生志。門植後凋偃蓋松。

斜陽影冷墜高柯。瀟灑庭園伴醉哦。自是儼然詩客宅。不須蓬草樹藤蘿。

矚望無處不成章。吟詠晨昏溢錦囊。酌酒彈弦幽興好。一痕明月照華堂。

述懷分鳥啼花落得鳥字席上

前途學海風波渺。難奈斯身才力少。朝暮呻吟只讀書。雄心千里羨飛鳥。

琵琶湖上作勤韵

夕陽涵水遠峯銜。風拂輕舟涼滿衫。何處暮鐘聲未盡。蒼茫湖上認歸帆。

觀月二絕

臨琵琶生

鴻雁哀鳴秋正闌。滿天風露薄衣寒。可憐皎々一輪月。今夜征人萬里看。

敝衣短髮老塵埃。素志未成秋幾回。世路難如今夜月。一雲纔去一雲來。

雜報

送舊教官迎新教官

金風爽颯琪樹を吹き、瀨氣瑟瑟々長沙に轉ずる時
樂みとしたる生等が身にして、いがで惜別の涙な
恩師入江、野田、谷井の三教授は、其任を更へ
師に望む所は多大にして、諸師の盡瘁せられんと
て我校を去る。聞く袖振り交はし、吳人越夫
する所は宏遠也。生等亦區々の私情を抑へて
も、同樹の蔭に憩ひし燕遊の客も、なほ一片別
諸師が鵬翼の益々伸ぶるあふむを祈るのみ
離の情ありと、況や師と仰ぎ弟と契り、懇篤な
若し夫れ多年の訓誨教示の事は永く肝に銘して
る教訓れ下に導られ、明晰ある講筵に列あるを
忘るゝ無かる可し。諸師幸に加餐自愛せられよ

生等三教授を送りて愁嘆に堪へざりしが、幸に玆に竹田、湯目の二先生を得且つ一たび本校教授の任を辭し玉ひし入江先生も、復來りて我校に教鞭を執らるゝふこゝなれり。切望す、生等が鈍愚なるの故を以て之を捨て玉はざらんことを、生等も亦勵精切儆諸先生に指導に隨はんとを誓はん。

左に新任教官の略歴を掲ぐ。

講師竹田留次郎先生 は石川縣の人、明治二十七年七月本校を卒業し、進んで工科大學に入り土木工學科を修め、同三十年七月大學を卒業し爾來土木工事の設計等に從事せられしが、今回本校に教鞭を執らるゝふこゝなれり。

講師湯目隆績先生 は明治二十年北米合衆國に渡航留學せられ、同廿一年轉じて獨逸に留學し、高等普通學及び農學を修め、同三十年歸朝し翌三十一年陸軍中央幼年學校及び東京陸軍地方幼

年學校に教鞭を執られしが今回辭して本校講師に莅任し、醫學部及び大學豫科を兼勤せらる。講師入江良之先生 曩きに本校教授たり本年七月其任を辭せ、尋て金澤地方裁判所判事となり兼ねて本校講師となられたり。

附記、講師茨木清次郎、助教田中鉄吉の兩先生は今回本校教授に榮進せられたり、生等は謹んで兩先生のために祝す。

卒業證書授與式

本校大學豫科第六回卒業證書授與式は、去る七月十一日を以て、倫理講堂に於て施行せられたり。當日午前八時三十分、第一號鐘亮々と響くや、職員生徒各々其席に列し、やがて兩陛下の御眞影を拜し、畢りて第二號鐘の音につれ、志波石川縣知事、佐々木第六旅團長を始めとして文武の諸官並びに地方の名望家等の諸賓、堂々として臨場し、各々其席に就く、席定りて、北

條校長正面の壇上に立ち、順次卒業證書を授與し了り、卒業生に對して告辭を朗讀せられたり、次て卒業生總代二上兵治君謝辭を陳べ、最後に中野教授は教務主幹として、前學年に關する報告を爲し、式全く終れり。

校長の告辭、

卒業生諸子、本日本校は諸子の爲めに此式典

を舉げ、貴賓の來臨を請ひ、以て諸子の正に本校所定の課程を修め卒はり、我卒業生に要する所の品格を具備することを證明す、實に榮譽と謂ふ可し、此榮譽を附與するの日は、即ち一れ責任を確定して之を諸子に負はしむるの時なることを記憶せざるべからず、今や國家、内社會の秩序を保持し、外世界の富強に後れざらんことを期するの秋に會するを以て、益々誠實有爲の人物の供給を待つこと切かり、諸子今より進て帝國大學に入らば、能く本日附與せられたる

資格を愛重し、常に深く國家恩養の篤きに思ひを致し、益々刻苦辟勵し、各々専門學科研修の目的を達し、以て國家の望みに副はんことを期せよ、即ち是れ諸子本日の榮譽を全うし、其責任を盡くす所以なり、而して教育の聖旨に奉對する所以の道も、亦此に外あらず、諸子旗を勉めよ、

卒業生の謝辭、

本日本校卒業證書授與の盛典を舉げたる、朝野の紳士も亦臨場あり、生等の光榮何を以て之に加へん、顧るに生等本校に入學以來玆に三年今や規定の學業を修了して此榮を得るは素より職員各位が薰陶誘掖に頼らざるばあらず、實に感佩の至に堪へず、然れども生等の前途尙は遠多難なるを以て、校長閣下は殊に懇篤剴切なる戒諭を賜ふ、生等益々拮据勉勵道を修め才を研ぎ、閣下の戒諭を服膺して以て校恩の萬一に

報せんことを期す、聊か蕪辭を陳へて以て謝す

第四高等學校大學豫科

第六回卒業生總代

明治三十三年七月十一日 二上 兵治

今回の卒業生諸君は左の如し、

第六回卒業生(但し姓名の上に×印あるは
京都大學に進入せられし諸君なり)

法科志望者(二十四人)

法律 二上 兵治	政治 谷 欽太郎
法律×田中 秀知	政治 生木政之進
法律 徳田 虎稚	法律 淺田 八十太
法律×伊藤 眞雄	政治×安田 力
法律×中村 了	政治×石田 福松
政治 清水賢一郎	法律 金山 季逸
法律×秋吉 豊次	法律 佐々木久二
法律 佐藤 共之	法律 遠藤 八千代
法律 池田 亮造	政治 森田 作十郎

法律 牛木新吉郎	政治 樽林 清一
法律 宮崎 清則	法律 小幡 豊治
法律 福岡 千市	政治×押原 參吉

文科志望者(廿一人)

史學 今井 貞臣	英文 伊藤 政市
哲學 芝田 徹心	漢文 金澤 智融
獨文 金 崎 賢	哲學 清水治三郎
獨文 小池 堅治	國文 池田 護彦
史學 岡田 惠一	漢文 石原 即聞
英文 松村 猪久次	獨文 龍山 嚴雄
國文 堀 重 里	國文 西村 清之助
國文 垣内 松三	國文 生川 守彞
英文 喜多川 實	漢文 鈴木 鉄之助
英文 岸 重次	漢文 田鶴濱 次吉
史學 羽賀 義暢	
工科志望者(廿三人)	
電氣×田中 義一	採鑛 酒井 康次郎

機械×菅田 亞夫

機械 後藤 正曉

醫科志望者(十九人)

土木 中野 深	土木×吉田 耕一
電氣 廣部 徳三郎	應 _用 化學 小島 仙太郎
土木 松澤 藤一	採鑛×村橋 素吉
電氣×丸山 謙次郎	電氣 高桑 確一
建築 田中 卯太郎	土木×神谷 秀吉
土木×秋山 信次	船用 橋本 貫
船用 本儀 正	採鑛 橋本 新太郎
造兵 佐竹 敬吉	造船 大橋 一郎
土木 田中 鷹太郎	土木 竹内 健
造船 布施 正彦	

×前田 松苗	高野 直吉
×稻葉 逸好	南 大曹
×森本 美津造	圓山 靈鎧
中村 讓	尾崎 齊
×足立 捨次郎	平瀬 亨三
竹村 榮太	高松 勇
植村 卯三郎	平倉 保市
白倉 眞木	今井 祐三郎
×辰巳 禮造	大道 庄藏
野村 幸太郎	

以上

理科志望者(二人)

化學 鈴木 庸生 植物 小篠 正悌

農科志望者(五人)

林學 橋本與三次郎	林學 中村 雅次郎
同 浦井 鐸次	同 細川 賢一
同 東郷 直	

卒業生を送る

天高氣清、嵐光方々に爽ある時、垂百の我が先
進諸卿は、幾年の雪窓螢火、羽翼漸く成りて更
に大に鴻翔を大學々庭に養はんぞす、寔に是れ
諸卿のために賀すべき一大慶事にはあらずや。

吾輩また欽羨、思はず毛穎を籍りて所思を舒べ、聊か諸卿に餞するの辭となさむと欲す、可なり乎。

顧みすれば歳華の往くや猝々たり。吾輩が北辰校の一隅に學籍を掲げて、諸卿と初見參の握手ををし、は僅かに數旬に過去の如く覺ゆるに、今や幾年は昔なりけり。是れより先き、諸卿は夙に北辰校風の發揚振張を努め、吾輩をえて大に鑑省する所ありしめたり、而して今や諸卿が多年の盡瘁企畫漸く其功を現さんとするに際し、忽ち東去西轅の客たらんとす、豈に我校のために遺憾の極ありや。然れども吾輩驚鈍を振つて諸卿の礎石に據らば、或は以て諸卿の素志に適ふことを得ん歟。

緊、今より後、諸君と共に快艇を蓮湖漾洋の水に驅り、巍乎たる白岳嶺頂に攀づるの機あからんとす。孤霞落日に迷ふ時、想一たび此に至れ

ば、奚んぞ惻々の情に堪ふべけん。さはいへ、吾輩徒らに婦女子の哀に倣ふものにあらず、諸卿幸に奮勵一番往年の意氣を以て光輝あるそが前途に就けよ。

吾輩常に謂へらく、今の世は、政治といはず、宗教といはず、文學といはず、社會のあらゆる方面は、混沌として常夜の光り無からんとすと、時は革進の時代にして、しかも人物欠乏の時代なり。固より小天才や、小偉人や、吾輩能く之を見る、彼の小才子なるものに至りては、其餘りに多きを煩はしとす、諸卿亦此點に關して吾輩と感を同らうせん。嗚呼俊秀拔逸なる諸卿、希くは其器を研ぎ、其才を養ひ、敢て國家の重きに任ぜんことを。是れ吾輩が諸卿に切望して己まざる所なり。

諸卿幸に健在かれや。謹んで送る。

學科規程の改正

去ぬる八月四日文部省令第十三號を以て、我が

大學豫科學科規程を左れ如く改正されたり。今

參考のため其全文を掲ぐ。

高等學校大學豫科學科規程

第一條 高等學校大學豫科學科ヲ分テ第一部、第二部及第三部トス

第一部ノ學科ハ法科大學及文科大學志望者ニ
第二部ノ學科ハ工科大學、理科大學、理工科
大學及農科大學志望者ニ第三部ノ學科ハ醫科
大學志望者ニ課スルモノトス

第二條 第一部ノ學科ハ倫理、語國及漢文、外國語、歴史、論理及心理、法學通論體操トス
前項ノ學科ノ外文科大學志望者ニハ經濟通論ヲ課ス

前二項ノ學科中文科大學哲學科志望者ニハ論理及心理ヲ缺キ數學、物理ヲ課ス、
外國語ハ英語、獨語及佛語ノ中ニ就キ二種ヲ

選バシム

第一項ノ學科ノ外法科大學志望者ニハ隨意科トシテ羅旬語ヲ課スルコトヲ得

第三條 第二部ノ學科ハ倫理、國語、外國語、數學、物理、化學、地質及鑛物、圖書、體操トス

前項ノ學科ノ外理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學志望者ニハ動物及植物ヲ課シ工科大學及理工科大學ノ土木工學科、機械工學科、電氣工學科、採鑛及冶金學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科、理科大學ノ星學科並ニ農科大學ノ農學科、農藝化學科、林學科志望者ニハ測量ヲ課ス

外國語ハ英語ノ外獨語又ハ佛語ヲ選バシム但シ工科大學及理工科大學ノ電氣工學科、應用化學科、製造化學科、採鑛及冶金學科並ニ農

科大學志望者ハ必ス獨語ヲ選フヘキモノトス
 第一項ノ學科ノ外理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ獸醫學科志望者ニハ隨意科トシテ羅甸語ヲ課スルコトヲ得
 第四條 第三部ノ學科ハ倫理、國語、外國語、羅甸語、數學、物理、化學、動物及植物、體操トス
 外國語ハ獨語ノ外英語又ハ佛語ヲ選バシム

第五條 各部各學科ノ每週授業時數ハ左ノ如シ

第一部

學科	年	第一年	第二年	第三年
倫理				一
國語及漢文		六	五	四
英語	(九)	(九)	(九)	(八)
獨語	(九)	(九)	(九)	(八)

佛語	歷史	論理及心理	法學通論	經濟通論	體操	計
(九)	三				三	三〇
(九)	三	二			三	三一
(八)	三		二	二	三	二九 三一

備考

表中()ハ選擇科目ノ時數ヲ表シ()ハ文科大學志望者ニノミ課スルモノヲ表ス

文科大學哲學科志望者ニハ第三年ニ於テ國語ヲ缺ク且之ニ課スヘキ數學、物理ノ授業時數左ノ如シ

學科	年	第一年	第二年	第三年
數學				二

物理	二
----	---

英語ヲ以テ入學シ法科大學ノ獨逸法又ハ佛蘭西法ヲ選修スル法律學科並ニ文科大學ノ獨逸文學科、佛蘭西文學科ニ志望スル者ニ對シテハ外國語ノ授業時數ヲ左ノ如ク變更ス

學科	年	第一年	第二年	第三年
英語		四	四	四
獨語又ハ佛語		一四	一四	一二

隨意科トシテ法科大學志望者ニ課スベキ羅甸語ノ授業時數左ノ如シ

學科	年	第一年	第二年	第三年
羅甸語				二

第二部

學科	年	第一年	第二年	第三年
----	---	-----	-----	-----

倫理	國語	英語	獨語又ハ佛語	數學	物理	化學	地質及鑛物	圖書	體操	計
	三	八	八	五				四	三	三一
		七	七	四	三	三		四	三	三一
一		四	四	六	三	五	二	二	三	三〇

第三年ニ於テ理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ農學科、農藝化學科獸醫學科志望者ニハ數學ヲ缺キ工科大學及理

工科大學ノ土木工學科、機械工學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科及理科大學ノ星學科志望者ニハ化學ノ實驗ヲ缺キ理科大學ノ各學科、理工科大學ノ數學科、物理學科、純正化學科、及農科大學志望者ニハ圖書ヲ缺キ農科大學林學科志望者ニハ英語ヲ缺ク

理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學志望者ニ課スヘキ動物及植物ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一年	第二年	第三年
動物及植物				四

工科大學及理工科大學ノ土木工學科、機械工學科、採鑛及冶金學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科、理科大學ノ星學科並ニ農科大學ノ

農學科、農藝化學科、林學科志望者ニ課スヘキ測量ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一年	第二年	第三年
測量				三

隨意學科トシテ理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ獸醫學科志望者ニ課スヘキ羅匈語ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一年	第二年	第三年
羅匈語				二

第三部

學科	學年	第一年	第二年	第三年
倫理				一
國語		三		
獨語		一三	一三	一〇

學科ノ授業ヲ受クルニ足ルヘキ豫備ノ程度ヲ以テ標準トナスヘシ

第七條 學校長ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ分科大學某科志望者ニ課スヘキ一學科若ハ數學科ヲ其學校ニ置カサルコトヲ得

附則

第八條 本令ハ明治三十三年九月一日ヨリ施行ス

獨語ヲ以テ入學シタル者ニ對シテハ外國語ノ授業時數ヲ左ノ如ク變更ス

英語又ハ佛語	羅匈語	數學	物理學	化學	動物及植物	體操	計
三		三			四	三	二九
三		二	三	三	實驗三	三	三〇
三	二		六	六		三	三一

學科	學年	第一年	第二年	第三年
獨語		九	九	八
英語又ハ佛語		七	七	五

第六條 前條ノ各學科ハ生徒卒業後分科大學各

これと同時に文部大臣は訓令第九號を以て學科規程改正の要領を表示し併せて同大臣の意見を開陳せられたり

新代議員の姓名

九月は代議員改選期なり、而して今回新に選

出せられたる代議員は左記の二十七氏なり。

始業式

代議員

醫四	米澤 啓	醫三	鈴木重吉
醫二	小林孝一	醫一甲	計見雄藏
醫一乙	小野澤莊桂		
藥三	柏木敬介	藥二	竹俣鎌太郎
藥一	福田 靜		
法三	笠原忠造	文三	駒田定郎
工三	四野宮豊治	理農三	村 幸 長
三三	下田 幸郎	法二甲	森岡京次郎
法二乙	安達 欽靖	文二	今井 正親
二二甲	森谷精一	二二乙	稻垣 米門
三二	清水 喜鏡	一一甲	安井藤市郎
一一乙	辻米次郎	一一丙	生菱塚慶量
二二甲	森 祐 吉	二二乙	中村秀太郎
二二丙	大澤次三郎	三一甲	小森文次郎
三二乙	内田 斐人		

九月十一日午前八時より講堂に於て舉行、來列するもの學校長始め教官舊生徒一同及び新入生約二百、先づ新舊生徒の紹介終て後、新入生に對し校長より特に懇篤なる諭示あり、引續き舊生に對して亦本學年より服膺すべき要項を諭示せらる、十時式終て一同退散せり、其新入生に對し諭示せられし要項は、主として學生心得に對する五項を演繹せられたるものにて、第一項に對しては學問と運動とを並行せしむべき事、第二項に對しては本校生徒は各其德操を養ふべき事、若し本校生徒にして破廉耻の所行ありバ自然本校生徒たる資格を失ひたるものと見做さるべしとせらる事、第四項に對しては、専ら外形上の德義即座起應對の禮より言語服裝等に關する注意を與へられ、而して第五項に對しては特に誤解ならしめん爲め綿々として懇諭せら

るゝ所あり、曰く目下學生間に於ける所謂校風なるものに對しては一種偏狹ある意義を含めり、例へば某校に於ては其校風として運動盛んなり、其校にては學生間に於ける對外思想盛んにして、其校風として常に外國に對する時事問題の研究せり、而して又、學校としては如何なる學校も實に斯る一風潮の學生間に流動するにあらずば校風立ち難しと思ひなせる如し、然れどもこは大有る誤解なり、抑も本校學生心得の第五項に示せる校風あるものは斯く偏狹淺薄のものにあらずして、學を修め德を磨くの間、識見あり本領あり、師長に順に友侶に信に、深く自ら信ト重く自ら持する生徒の校下に滿つる事、所謂智德体三育兼備の教育の行はるゝを意味す、區々たる末流に馳せて、其本領を失ふが如きは我校に大に耻づる所なり、云々

的生活ある一項の下に、中學卒業生の性格、理想的生活をなし得る事情と資格と、學校團體に屬する一員、等に就て諭示せらる、要を抽めば、中學卒業生は普通教育を受けたるもの、普通の人倫と心得たるものとして如何に其身を處すべきや、苟も中學を卒へしものは理想的生活をなし得べき資格あるものたり、又少くとも中學卒業生として一地方を代表し來りて本校生徒たる以上は、其出身地方の人士に對しても、又金澤に於ける周圍の人士に對しても、理想的生活をなさるべしとせらる、且夫れ諸子は己に本校に入る以上は、社會の一人としての個人にあらず、本校生徒としての一員也、各自が學校に出入するは學校以外の者が日々學校に出入するにあらずして、學校に生徒が學校外に出入するあり、されば諸子が一言一行は皆學校の名譽に係るなり、諸子幸に此等の意をよく体して、以上

諭示する所の五項の如きは實踐躬行其實をあげ、希くは純良完實なる校風をして立たしめよ云々

以上は訓諭に次で校友會なるもの、目的及び生徒は當然之に入るべき義務ある事、其學課以外に於て受くる利益は大きな事等を説明せられ、後、本學年より生徒の遵守すべきものとして、新舊一般へ諭示せられしは、

一、登校の際は必ず制服制帽を着すべき事、
一、校外若くは放課後に於ては制服又は袴着用
の事、

一、欠席欠課遅刻に關する注意、及び別項載する所の禁酒及監督に關する規定等ありとす

新進は諸子を迎ふ

花笑み鳥歌ふ春景色をよそに見、骨とけ肉たるるばうりの暑氣を物とせず、切磋苦學せられし結果は、華々敷學界の競争に凱歌をあげ、今や

諸子は粲たる北辰の帽章を臥龍山下の月光に閃かして得意の秋を金城々頭に迎ふるの士とあられぬ、正にこれ花顏明眸の若武者が其初陣に天

晴れの武功をたて、君は御威に依つて得たる拜領の緋緘を美々敷着うざりて郷里に入れると何ぞ撰ばむ、吾人は双手をあげて之を歓迎せざるを得ざるなり、諸子須らく得意あれ、揚々たれ、誇大なれ、諸子頭上の月桂冠は學界撰士を標榜するにあらずや、人誰か其得意、其揚々、其誇大に對して嘴を入るゝものあらむや、唯夫れ飛花落葉の情景は春風駘蕩百花爛熳の時にきざし、失意落魄は得意揚々の裡に存するを記憶せよ、然らずんば其得意、其揚々、其誇大は終に失意落魄の因たらんのみ、

今や秋高くして馬肥々、燈下親しむべく、簡編繙くによし、希くは諸子切齒一番、入學以前の元氣を喚起して更に大に勵精する所あれ、然れ

ども北陸の地たる天候極めて陰鬱、時に他郷負笈の士を誘うて二豎掌中に陥らしむるおしとせず、されば諸子は教場裡苦學勵精の士たること共に亦綽々餘裕を存して自重自愛の士たれ、新入學生、本年新入の級別及び人員左の如し

一、法科	四二	文科	三三
一、工科	四六	理科	一四
一、農科	一八	醫科	四六
合計	一九八		

禁酒は勵行

吾人が飲酒の害毒を認むるや久し、夫れ酒は遣悶放鬱の良材とし、情を温め心襟を開くため宴席の上欠くべからざるものとし、時に或は病痛療養の良劑として普く世に用ひらるゝものなりと雖、而も社會罪惡の過半が酒に原因し、或は之に因て身心を傷め、一身の方向を誤り、家を失ひ、此日轉た惜しむべき人生を、無爲逸樂

の間に過ぎしむるもれ多くは酒に由らざるを思へば豈戒心せざるべけんや、思ふに學生風義は額敗銷沈せる今日より甚しきはあらど、而して其根底深く此額敗銷沈原因をなせるもの果して、酒にあらざるあき乎、今日の學生が志薄く、膽小なるに係らず、樓上一醉を買うて大言壯言し、三杯の酒を傾け盡して天下は英雄眼中に在りと絶叫し、或は時に醉眠美人の膝に放吟し白馬銀鞍の句に揚州狹斜の街を夢み、終に志氣銷沈、品性あるなく、見識あるなく、滔々たる社會濁流の内に渦き去るゝもの皆酒に因て來るものにあらざるなき乎、夫れ然り、酒は苟も士氣あり、精神あるの生涯とは兩立せざる也、秩序あり、見識ある生涯をして圓滿ならしむる能はざる也、否少くとも、規律あり、秩序あるの學生生涯とは一致せざる也、我校長大に茲に見る所あり、此際他に先んじて我校生徒の

飲酒を禁ぜざる、即ち八月中生徒各父兄に告げて曰く、

『本校は九月以降、本校生徒は酒を飲むことを禁せむとす、教育の事は學校と家庭と相依りて始めて其効を奏すべきは言を待たざる所にして飲酒の如きは概ね校外業後の事に屬すれば殊に諸君の同心協力を望まざるを得ず

抑本校に來り學ぶ者は皆必ず志す所あり本校又教養其力を惜まざるに従來往々校規に觸れ學を廢する者あり一は慨歎に堪へざる所而して其原因を釋めれば竟に酒に飯する者實に十に七八あり世或は酒を以て遣悶放懷の功ありとし或は以て俗禮交際の要品とす雖人各境遇あり責務あり此の如き事は學生に要とすべき所にあらざる也夫の學生として世に立ち人に接する道、心神を爽に志氣を壯にする術は若きは乃ち別に其方あらむ

顧ふに是等の事蓋一皆諸君の熟知せざる所、畢竟學ぶ者と學はしむる者と教ふる者とは其執る所異なれとも其期する所は一なり故に教養の實を擧げむが爲に施行する所の事は即ち是れ諸君の意ありとも謂ふべく特更に喋々するの要なしと雖生員の衆多ある其中或は飲酒の慣習久しきに亘り此禁を守るに易らざる一蟻穴漸く高堤を壞り熾火終に廣原を燒きて他日後悔を余すものありむとを恐る是故に茲に特に諸君に牒して諸君の意を督勵に致されん事を切望す、』と然り、吾人は互に相戒めよく之を勵行し以て頽敗銷沈せる學風を警醒せざるべからず、

監督規 定

青年活氣の溢する所、やゝすれば放縱に流れ、粗暴に走り、終に身を誤つに至るは屢々吾人の見る所なり、此等は主として未だ社會に慣れざる青年を掩護補翼するものなく、其放縱粗暴を

未發に防止せざるまよれり、茲に於て我校は本年九月より生徒監督規 定を設け、教官の諸氏に依囑して全校生徒中より其親縁あるものを撰んで是を各員に分擔し其在學中の一身を監督せしむる事とせり、蓋しおれ往々生徒保證人が保證人たる資格を缺けるより來る弊害と、郷里遠隔の地にある生徒は不時の出來に際しての狼狽とを防ぎ、而して傍生徒校外の品行、學課出欠の督促等を取締るものあり

て魚を求むるが如し、公認下宿は乃ち此の教へに礎きて起る、而して其目的とする所は、寄宿舎狹隘の不便を補ひ併せて新入の學生をして宿舍撰定に勞あらしむるにあり、されば一方に於ては其監督、取締り等一に寄宿舎に準ずると共に、他に於ては學校より相當の補助便宜を與ふ、目下公認下宿として指定せるもの合せて九、

第一公認下宿

宮川 さと

第二公認下宿

長町二番丁七

森田 彌作

第三公認下宿

長町一番丁三〇

安川 親良

第四公認下宿

池田町三番丁二三

田鹿 すて

公認下宿

居は志を移すとは古への君子の教へなり、居る所正しうらずして志の正しきを望む猶木に縁つ

第五公認下宿

仙石町一二

新田 三作

第六公認下宿

百姓町二三

山田 一馬

二部第三年工科
三部第三年醫科

渡邊福太郎

藤田 敏彦

第七公認下宿

賢坂辻通三八

額 又 太郎

一部第二年法科

丹治 善藏

第八公認下宿

殿町二七

山下 元

一部第二年文科

安達 欽靖

第九公認下宿

大工町八三

池田茂兵衛

二部第二年工科
三部第二年醫科

村野 美雄

今井 正親

而して收容する所生徒凡そ七十、皆是れ朝に品性を涵養し、夕に書を繙く之士、和氣堂に満ち友情互れ間に溢る、徒に宿所の撰定、下宿の不待遇に不平を訴ふるの士競ふて堂下に來れ！

北辰會語學部小會記事

獨逸語會

特 待 生
窓雪螢光よく切磋の功を積まれし結果、撰に預りて本學年の特待生となられし諸氏左に如し

一部第三年文科

西川 巖

乗杉 嘉壽

十月二十日本學年第一回の獨逸語會を開く、會員の出席百三十の多きに上り、午下二時を報ずるや、ウンケル氏先づ起ちて開會の辭を述べ、且つ獨語の讀方につきて縷々注意せられたり、次て中目教授壇に上り、獨逸語を學ぶもれ專ふ目にのみ是れ依りて、談話の方面を輕んずるの

弊あるを免れず、是の如きは豈に一大誤謬にあらずやと、懇々其矯正法を摘示して會員の反省を促されたり、中目教授其壇を下るや、湯日講師則ち起ちて、洋行中の所見を語られたり、尙其他の出演者は左の諸氏ありき、

On Reading.

About Kotohira Temple.

The wolf and Crane

Washington's Address to his soldier.

The silent philosopher.

On Conduct.

How I was taught in my Ohgakko.

Truth in parenthesis.

Return home.

三三 佐久間兼信

三三 水口耕治

法二 安達 欽靖

法二 秋 月 致

法二 古田 徳夫

三三 松澤 善二

三三 竹尾 敦造

三三 松林 健策

三三 西山 實淳

三三 久徳隆篤

英 語 會

北辰會語學部中の英語會は十月十三日午後第二時より化學教場に開かる傍聴者は校長を始め語學に關する教授講師に生徒を加へ百有余名當日

最後にハヒランド氏は外國語を學ぶ心得及氏の休暇中の上海旅行を談ずる事一時間あふんとす猶支那人趙氏も來聴せり

校 友 會 記 事

明治三十三年度第四高等學校々友會費出納決算報告表

支出部

報
雜

第一目	大會費	一〇〇〇〇	減	〇八〇〇	九一三六	〇〇六四
第二目	獎勵費	一〇〇〇〇	增	〇八〇〇	一〇八〇〇	〇〇六四
第六項	ベースボール費	三三〇〇〇	〇	〇	二九四〇六	二五九四
第七項	フットボール部費	三八〇〇〇	〇	〇	三七四八〇	〇五二〇
第八項	遠足部費	二〇〇〇〇	〇	〇	〇八一八	一九二八二
第九項	漕艇部費	一五〇〇〇	〇	〇	一四九二一	〇〇八九
第十項	端艇費	一三〇〇〇	增	八〇〇〇	一三六九七四	一〇二六
第一目	艇庫費	七五八〇〇	〇	〇	七六二六〇	〇
第二目	擢用材費	一六五〇〇	〇	〇	二〇〇〇〇	〇一九六
第三目	雜費	二〇〇〇〇	〇	〇	二〇〇〇〇	〇
第四目	春季運動會費	一八〇〇〇	〇	〇	七四九〇	〇八三〇
第十一項	春季運動會費	一〇〇〇〇	〇	〇	一〇〇〇〇	〇
第一目	會場費	二二五〇〇	增	三八四二	二六三四二	〇
第二目	競漕費	一〇〇〇〇	減	四九四一	五〇五九	〇
第三目	接待費	四〇〇〇	〇	〇	四〇〇〇	〇
第四目	賞品費	四七〇〇	減	〇二四〇	四六七六〇	〇
第五目	衛生費	二〇〇〇	減	〇八二五	一六七五	〇
第六目	雜費	一四五〇〇	增	二一六四	一六六六四	〇
第十二項	秋季運動會費	二〇〇〇〇	〇	〇	一六六七三	三三二六七

第一目	會場費	五五〇〇〇	減	八五三〇	四二一六四	五三〇六
第二目	競技費	三五〇〇〇	增	一二九五四	四七九五四	〇
第三目	接待費	一七〇〇〇	減	一六〇〇	一四八一七	〇五八三
第四目	賞品費	五〇〇〇〇	增	〇三六〇	五〇三六〇	〇
第五目	衛生費	八〇〇〇	減	〇三六〇	七二二五	〇四一五
第六目	雜費	三五〇〇〇	減	二八二四	五二一三	二六九三三
第十三項	會務費	二〇〇〇〇	〇	〇	一〇七六〇	九二四〇
第一目	器品費	八〇〇〇	增	二七六〇	一〇七六〇	〇
第二目	通信運搬費	八〇〇〇	〇	〇	〇	八〇〇〇
第三目	雜費	四〇〇〇	減	二七六〇	五二七三〇	一二四〇
第二欸	校友會臨時費	四一〇〇〇	增	一一七一〇	五二七三〇	〇九八〇
第一目	十全會費	一〇〇〇	〇	〇	〇九二〇	〇〇八〇
第一目	講話部及雜誌部費	一〇〇〇	〇	〇	〇九二〇	〇〇八〇
第一目	朗テニス部費	一七〇〇〇	〇	〇	一六一一〇	〇九〇〇
第一目	グラウンド増設費	一三五〇〇	〇	〇	一二六〇〇	〇九〇〇
第二目	ネット新調費	三五〇〇〇	〇	〇	三三〇〇〇	〇
第三項	ベースボール部費	一三〇〇〇	〇	〇	一二三〇〇	〇
第一目	器具新調費	一三〇〇〇	〇	〇	一二三〇〇	〇
第四項	東宮御慶事紀念植樹費	〇	〇	〇	一二七一〇	〇

第一目	會場費	五五〇〇〇	減	八五三〇	四二一六四	五三〇六
第二目	競技費	三五〇〇〇	增	一二九五四	四七九五四	〇
第三目	接待費	一七〇〇〇	減	一六〇〇	一四八一七	〇五八三
第四目	賞品費	五〇〇〇〇	增	〇三六〇	五〇三六〇	〇
第五目	衛生費	八〇〇〇	減	〇三六〇	七二二五	〇四一五
第六目	雜費	三五〇〇〇	減	二八二四	五二一三	二六九三三
第十三項	會務費	二〇〇〇〇	〇	〇	一〇七六〇	九二四〇
第一目	器品費	八〇〇〇	增	二七六〇	一〇七六〇	〇
第二目	通信運搬費	八〇〇〇	〇	〇	〇	八〇〇〇
第三目	雜費	四〇〇〇	減	二七六〇	五二七三〇	一二四〇
第二欸	校友會臨時費	四一〇〇〇	增	一一七一〇	五二七三〇	〇九八〇
第一目	十全會費	一〇〇〇	〇	〇	〇九二〇	〇〇八〇
第一目	講話部及雜誌部費	一〇〇〇	〇	〇	〇九二〇	〇〇八〇
第一目	朗テニス部費	一七〇〇〇	〇	〇	一六一一〇	〇九〇〇
第一目	グラウンド増設費	一三五〇〇	〇	〇	一二六〇〇	〇九〇〇
第二目	ネット新調費	三五〇〇〇	〇	〇	三三〇〇〇	〇
第三項	ベースボール部費	一三〇〇〇	〇	〇	一二三〇〇	〇
第一目	器具新調費	一三〇〇〇	〇	〇	一二三〇〇	〇
第四項	東宮御慶事紀念植樹費	〇	〇	〇	一二七一〇	〇

第一目	東宮御慶事紀念植樹費	〇	三〇二八五	減	二一七〇〇	〇	一〇八四一三六	減	一三三八六四
第三款	豫備費	〇	一九七〇	〇	二一七〇〇	〇	三三八七〇〇	增	三八七〇〇
第四款	用途指定費	〇	〇	〇	〇	〇	八〇〇〇	增	八〇〇〇
第一項	春季運動會費	〇	〇	〇	〇	〇	四六四〇	增	四六四〇
第一目	競漕費	〇	〇	〇	〇	〇	四六四〇	增	四六四〇
第二項	秋季運動會費	〇	〇	〇	〇	〇	四六四〇	增	四六四〇
第一目	會場費	〇	〇	〇	〇	〇	四六四〇	增	四六四〇
第二目	賞品費	〇	〇	〇	〇	〇	四六四〇	增	四六四〇
支出合計		二一八〇〇	〇	〇	一〇八四一三六	減	一三三八六四		

會費豫算協議會に付て

家族的團體てふ美名の下に校内の諸會を一匡したる我校友會はさしたる魔風に犯かざるゝとモあくて此に滿一ヶ年をバ經過したり、余輩は尙幼稚なる本會が一年間の功果に對して喃喃の言はなさいるべし、唯よくどこまでも家族的親和を加へて益本會の目的の達せられんとを切望せんに外あふさるなり、今此に去る十八日の協議會において議決せられたる三十三年度の會費豫算表を揭示するに當り豫め一言斷りねうんとするは他なし、もと會員はどこまでも會員にして委員はどこまでも委員たるべからざるもの、其委員が協議會に議せし所は必しも會員凡ての不平を買はさる萬全の決にあふざること即是也、抑此事たるや何れの協議會何れの豫算會に於ても多少免かれがたき通弊にして今更事新しく申

までもあき事たりながら特に諸子に刮目して見んと欲するテーブルなれば又特に付言しれく所

あり、唯夫顰眉せんも、罵詈せんも、扼腕せんも、將又うかづき玉はんも、そは見ん人の心のまゝあるよ。

三十三年度校友會費豫算表

收入之部

第一款 校友會費

一五〇九〇〇〇

第一項 特別會員寄附

二七六〇〇〇

第二目 本部職員寄附

一六六、五〇〇

第二目 醫學部職員寄附

一〇九五〇〇

第二項 通常會員會費

一二二八〇〇〇

第一目 醫學部生會費

四三〇、五〇〇

第二目 藥學部生會費

三六、〇〇〇

第三目 大學豫科生會費

七五、一五〇〇

第三項 雜收入

一五、〇〇〇

第一目 預金利子

一五、〇〇〇

支出之部

第一款 校友會經常費

一三五九二四〇

第一項 十全會費

三五、一六〇〇

第一目 講話部費

三〇、六〇〇

第二目 雜誌部費

三三、〇〇〇

第二項 北辰會費

三六、一九四〇

第一目 講話部費

三、〇〇〇

第二目 演說討論部費

四、〇〇〇

第三目 語學部費

一一、五〇〇

第四目 雜誌部費

三、四二四〇

第三項 弓術部費

二〇、〇〇〇

第四項 劍道部費

二〇、〇〇〇

第五項 柔道部費

三〇、〇〇〇

第六項 ベースボール部費

三七、〇〇〇

第七項 ロンテニス部費

四、五〇〇〇

第八項 フットボール部費

一八、〇〇〇

第九項 遠足部費	三〇〇〇〇	第十項 秋季運動會費	二〇〇〇〇〇
第十項 漕艇部費	二五七〇〇	第一目 會場費	八二〇〇〇
第一目 端艇費	七四二〇〇	第一節 設場費	七〇〇〇〇
第二目 艇庫費	二〇五〇〇	第二節 接待費	二二〇〇〇
第三目 櫓用材費	二〇〇〇〇	第二目 競技費	八八〇〇〇
第四目 雜費	一一〇〇〇	第一節 競技用品	二六〇〇〇
第十項 春季運動會費	一〇〇〇〇〇	第二節 審判用品	二〇〇〇〇
第一目 會場費	二六五〇〇	第三節 番組用品	一〇〇〇〇
第一節 設場費	二二五〇〇	第四節 賞品	五〇〇〇〇
第二節 接待費	四〇〇〇	第三目 衛生費	八〇〇〇
第二目 競漕費	五七〇〇〇	第四目 雜費	二二〇〇〇
第一節 競漕用品	六〇〇〇	第十項 會務費	一〇〇〇〇
第二節 審判用品	一〇〇〇	第一目 器用品費	七〇〇〇
第三節 番組用品	三〇〇〇	第二目 通信運搬費	二二〇〇
第四節 賞品	四七〇〇〇	第三目 雜費	一〇〇〇
第三目 衛生費	二〇〇〇	第二項 校友會臨時費	一八五〇〇
第四目 雜費	一四五〇〇	第一項 十全會費	三二五〇〇

第一目 講話部雜誌部臨時費	三二五〇〇
第二項 ロンテニス部費	一〇〇〇〇
第一目 グラウンド修繕費	一〇〇〇〇
第三項 ベースボール部費	五〇〇〇
第一目 器具新調費	五〇〇〇
第三款 豫備費	七八〇〇〇
第四款 端艇新造基金	五三二六〇
支出合計	一五〇九〇〇〇

桐陰會雜誌	高等師範附屬中學
保惠會雜誌	愛媛縣松山中學
丁酉講演集	大日本圖書株式會社
私立石川縣教育會雜誌	浦井 鎧一郎
京華校友會雜誌	京 華 中 學
東京學士會院雜誌	東京學士會院
尙志會雜誌	第二高等學校
無盡燈	無 盡 燈 社
國士	造 士 會
龍南會雜誌	第五高等學校
帝國文學	帝國文學社

寄贈雜誌 七月以降本誌へ切までに寄贈を忝
ふせし雜誌左に如し、

工業化學雜誌社
外務省通商局
本縣第一中學
日本ユニテリアン弘道會
大垣中學
福島第一中學

工業化學雜誌
校友會雜誌
六合雜誌
鹿城文庫
同窓會報告書

以上



附 錄

入寮宣誓式れ記

夏の日の苦しき暑さ、漸くさりと西風一たび吹きくれば、喧しき蝉の聲も、いつく絶えて、満目蕭條なる秋は、うつく光もて、吾人が眠を呼び起ぬ。

かゝる時に際し、わが時習寮にては、十月六日を卜して、新入寮生の宣誓式を行はれたり、之を機とし、盛大なる茶話會を開かむとて、委員諸氏は、以前より幹旋甚た力めたりき、それ校には校規あり、寮にはまた、寮規あり、われ等己に寮中の人となる、寮の規則を守るは當然のことのみ、宣誓式はなほ之を確乎たらしめむとして、行はるゝものあり、わが寮ありてより、うゝる嚴正なる式あるは、實に今年を以て嚆矢

となすといふ、あゝ十月六日は、わが時習寮の、一の紀念日とありしなり。

六日午後四時、點鐘の響きと共に寮生は相携へて、式場と定められし、倫理講堂にいたりぬ、寮生の席定るや、學校長を始めとし、舎監及其他の教授は、場に入りて、定めし席に即かれぬ、やがて北條校長は、徐ろに立ちて、壇に上り、いと懇篤なる訓示を一同に賜ひぬ、いつで今井舎監親切ある諭辭、佐野寮務主任は、新入寮生の府縣別及出身校別の報告あり、終るや寮生の一席より、河野隆氏起ちて謹嚴なる語調もて、寮生總代として、宣誓の文を讀まれぬ、其文はつぎの如くなりき。

生等自今首トシテ本寮ノ箴規ニ則リ夙夜匪懈

其ニ導キ俱ニ礪キ以テ生徒心得ノ趣旨ニ副ハ
ソコトヲ期ス爰ニ入寮ノ初メニ方リ誠惶ヲ以
テ誓フ

時習寮新入生總代

明治三十三年十月六日 河野 隆

此間同寮生一同は、起立して之を聴き、いと嚴肅に此式を了へ、諸先生れ場を去られたる後、吾人もまた、順次席を退きぬ、式に列せし寮生は、とべて六十四名、病氣其他の事故により、欠席せしもの十名なりき。

時は移りぬ、日は將に西に沒せむとし、秋風樹に鳴り、晚鴉巢に歸る時、一同は茶話會の會場と定めし、無聲堂に入りぬ、校長舎監及二三の教授も列席せられたり。

茶話會は、各自談笑の間に、其親密を計むたのに、あすものにして、宣誓式とは、其趣を異にするもれあり、宣誓式には、一同は極めて

嚴肅を守れり、されど茶話會に臨みては、誰ゝ其胸襟を披きて快談せざらむや、ことに秋冷爽快の氣を身にうけて、壯快なる會に臨める寮生は、其胸中はたして、如何なる感あるか。

一同の着座するや、佐野先生は、立ちて寮内の事に關し、諄々として、一同に注意を與へられぬ、つぎて中野教授は、自己平生の經歷を談し、寄宿生活が最も、愉快なりしことを、説かれぬ、寮生はみち、喝采を以て之を迎へ、拍手を以て之を送りぬ、一同はこれより、食堂に入りて、

夕食を喫して後、再び此堂に集りぬ、時に校長は、昔時れ加賀藩士由比勘兵衛れ逸事を引き、古來わが神洲が武士道を尊びしことを説かれぬ、つきて、舊寮生たりし醫學科の土田久太郎君の酒につきての長演述あり、杉森教授は世界人種の盛衰を説きて、世界の大勢に及ぼし、更に我國を、西部中部東北部に三分して之に比し、其

説くところ、痛快にして、聞くものをして倦むことを、知らしめざりき。

演説終りて、茶菓は分與せられたり、一同は集りて之を喫し、互に快談するとき、忽ち見る一個の劍士、吟聲勇ましく劍を抜きて舞ふ、つぎ

れは特に書いて、前記の諸氏に、謝せざるを得ざるなり。
うくて後、更に、福引れ余興あり、各題みな珍奇にして、人の頤を解き、拍手大笑の中に之を終へぬ。

て二三の有志、各々其特技を演じ、天地も割れむばかりなる大喝采は、堂内にみちぬ、時は進み余興は益々盛になりぬ、今村池田諸氏の演舞、伊藤氏の落語等は、一同に興を添へしこと、幾何ぞや。

是より先き、菓子分與と同時に一片の白紙は、各自の前に與へられたり、こは寮生中より、十豪傑を撰びて、投票せむために用ふるものあり、十豪傑とは何ぞ、即ち

氣取家、大食家、厄介家、空論家、朝寝家、

聞く此會を開くに先ち、委員諸氏は、擊劍柔道の仕合を爲さむとせしに、佐野寮務は、余興

慷慨家、勉強家、宗教家、社會家、交際家、

として武技を演じざるを止めしを以て、當日は余興も少く、茶話會も寂寞を以て、終へあむことを憂へありと、しるに今や、諸氏の技により、ある盛況を見るにいたりぬ、委員諸氏いな寮生一同の、喜悅何物のこれにしかむや、わ

これなり、福引の終ると共にこの投票の結果は發表せられぬ、最高點を得しものは、委員の呼ぶに従ひ、出で、賞品を受くるありき、あゝかゝる名譽(?)を荷ひし人は誰ぞ、一同がいかに大喝采を以て之を迎へり、われはこゝに、之を記するを要せざるなり。

かゝる喝采の間に、余興も漸く盡きければ、委員は一同に向ひ、閉會のよゝを告げぬ、うくて師弟の隔てもなく、十分の歡をつくし、職員及七十の寮生は、例により萬歳を三唱して、堂外にいてぬ。天は高く澄み渡れり、眺むれば一片の弦月は、たかく樹上にあり、笑むに似たる其影は、いさや吾人が此歡を盡くせるを見て、ひそくに羨むものにあふざるの。

あゝ十月六日よ、吾人は永くわが寮の記念日として、吾人が記憶に止めむうな。

われ委員の委嘱をうけ此稿を草さしかれとも不敏の才よく其實況を寫す能はず寮生諸君乞ふ諒せよ

十月十日

渡邊謙識す

越中地方行軍記事

兼六公園花神は條忽として遠く去り、古城崖頭

徒に蒼翠に曇る、半夜杜鵑血に啼きて征夫亦袂を濡す送るむか春、迎へむう夏、噫寒颼怒吼北窓を襲ひ粉々たる飛雪面を拂つて至る寒天も不捲無聲堂裡に鍛へたりし健兒か鐵腕は鳴て蓮湖の競漕に發しぬ由來落々たる雄心は是れのみにして抑止せられ唯々青帝の駕を迎ふるものあらむや本校大に此に鑑る所あり連年此好期を利用して行軍演習を舉行するを以て例とせず、蓋し滿校七百の健兒か腕を撫して其揭示を豫期する此に久し、果然四月廿日に至りて一大揭示は掲けられたり、曰く來る廿七日をトし二泊行軍を越中地方に行ふと、

期に先づると三日即廿四日に至りて隊伍を部署し、總員約五百人を以て一大隊を編制せざる、

今其大隊本部并に各中隊の幹部役員を擧ぐれば

左れ如し

行軍演習役員

統 監 部

統 監

北條時敬

村田金太郎

松田菊治

統 監 部 員

中 侯 匡

會計部員

石川龍三

甲 部

乙 部

甲 部

乙 部

今井省三

谷井鋼三郎

野田 貞

金子治郎

櫻井小平太

赤尾直松

吉村政行

楠 正可

浦井鏗一郎

衛生部員

大瀬謹一郎

鐵道輸送掛

茨木清次郎

甲 部

乙 部

統 監 部 書 記

堤 從 清

上田計二

中野立次

甲 部

乙 部

甲 部

乙 部

武笠 三

田部隆次

視察員

三竹欽五郎

大隊本部

磯田正謙

藤井乙男

泰 秀穗

大隊長

不破登一郎

蒲原重實

由長賢次郎

設 營 部 員

河島重平

中隊本部

甲 部

乙 部

中 目 覺

西田幾多郎

中 目 覺

中隊本部

甲 部

第四中隊長

福見常太郎

河野 勇

小林茂樹

第二中隊長

茂木佐次郎

安宅治六

鈴木仙太郎

乙 部

第一中隊長

日下庄太郎

第二中隊

第三中隊長

宮川爲三

第一小隊長

芝田徹心

生徒幹部左ノ如シ

大隊 附

二上兵治

第二小隊長

長島清松

大隊 副 官

乘杉嘉壽

特務曹長

柏原省私

同 旗 手

給 養 掛

森部孝郎

淺田八十太

大隊書記

分 隊 長

田鶴濱次吉

甲 部

乙 部

同

同

渡邊良法

高田範圍

榎戶利吉

本儀 正

甲 部

乙 部

同

同

小西俊三

越野義三郎

同

浦井鏘二

梶川藏重

竹下麗三郎

同

西村清之助

附 錄

同	南 大曹	同	黒田 琢磨
同	中村 讓治	同	西山 實淳
同	細川 賢一	乙 部	

第四中隊

第一中隊

第一小隊長	佐々木 久二	第一小隊長	酒井 佐太郎
第二小隊長	中野 深	第二小隊長	富野 佳照
第三小隊長	竹村 榮太	第三小隊長	土田 久三郎
特務曹長	鈴木 庸生	特務曹長	田中 秀夫
曹 長	稻垣 米門	曹 長	杉山 弘齊
給 養 掛	山口 敬信	給 養 掛	山崎 芳太郎
分 隊 長	森岡 京次郎	分 隊 長	眞柄 佐一郎
同	大橋 貞勝	同	小島 佐藏
同	轉法輪 戒淨	同	駒井 定哉
同	河原 繁	同	近卿 重孝
同	淺井 博	同	清水 秀夫
同	伊澤 一 亮	同	富田 穂磨
同	松澤 善二	同	丸山 六郎

同	松田 研吉	同	鳥海 他郎
同	七五三 龜吉	同	河合 文吉
同	小幡 學雄	同	下田 幸郎
同	眞澤 貞一	同	藤田 敏彦
同	赤土 佐一	同	

第三中隊

第一小隊長	増田 耕三	同	隊伍の編制終るや嚙吟たる吠聲に伴ひ校庭練兵
第二小隊長	水谷 重忠	同	場に於て大隊教練を行ふ、芳草青々健兒が蹈む
第三小隊長	池上 四郎	同	まゝに清く、辰章校旗は颯颯として微風に颯り
特務曹長	篠原 巖	同	整々軍旗振ふ、時恰も清浦法相の臨場に際し頗
曹 長	島 峰 徹	同	る健兒か意氣昂然たるに感ぜらる、
給 養 掛	笠原 忠造	同	四月廿七日、夜來頻に至りし驟雨も名残なう晴
分 隊 長	林 慶太郎	同	れ渡り微風習々神氣爽快いはん方あり、午前五
同	福富 才治	同	時結束して校庭に蟻集せし健兒は武裝己にあり
同	奥山 猛彦	同	て令の下るを俟つ、午前七時磯田大隊長一同を
同	中村 金男	同	整列せしめ武裝の檢閲あり、終て北條校長進て
同	阿部 維巖	同	曰く今回越中地方に二日聞れ行軍を試みむとす
附 録		同	るに當り豫め諸子に一言するあむとすと前提
		同	し且、諸子は行軍演習に關し生平訓練せし所を

實地經驗するもの、これは、兵式上の規律は必ず之を厳行すべきは勿論、高學生としての本分を忘却せざらんことを要す、特に宿營地は、尋中の所在地あるの故に諸子深く虞る所ありて、長く校風を翹望せしむると彼呂伯の甘棠におけるや如くあらしめよ、と説くと懇篤明晰なり次きて大隊長行軍一般方略を示さる

一、北陸道を南進する一支隊は高岡に到り左側掩護の爲め歩兵一大隊を福光方位に出す

一、南軍支隊は之れに當らん爲め金澤を發するの際歩兵一大隊を福光を経て高岡方位に派遣し尙ほ支隊は北陸街道上を高岡に向ひ行進す

と尙ほ各中隊長を集めて訓示せる所あり終りて午前七時三十分叭聲一吹天に響き隊伍整々校門を出て、甲部は右に乙部は左に道を分ちぬ、蓋し一般方略に従へるや明なり

堂々歩武を進めたりし甲部隊は八時停車場に着し休憩すること一時間にして乗車を命せらるる而かも一舉一動規あり、律あり、仰き觀る所の群衆をして自失せしめぬ

演笛一聲、車轉して東北すれば尾山城頭己に地平線は消えて三百の青杉は晩春の樂園に入る善哉、緑山水田、菜花雲雀、田夫駄馬、悉皆何れの津々たる詩趣を具せさるものあらん、右に謳歌し左に微笑し、津幡もいつの経過して愈進めは俱利伽羅の峠へ仰て望むべく、列車旋行漸く頂上に近ければ身は終に隧道に入りぬ、時恰も工事中にして隧道中數十の電燈を点して修繕大に努む、從て列車の進行遅延して數分にわたりぬ、隧を出つれば己に是れ越中にして道漸く傾斜して車一轉電光の如く先づ石動に下車すれば午前十時なりき、天此に快晴となり微風より、襟を拭うて去る、町を去る小一里にして休憩

し緑草をしいて中食す正に十一時ありけり更に進行をつけて十二時四十五分にして福岡驛に着し休息此に時あり、

遽然嚴命下りて隊伍整列すれば己に彈藥は分配せられ午後一時廿分方に警戒行軍をなして出發せんとするや磯田大隊長より演習の目的及命令等を與へる其大要を記せば左の如し

前衛命令

一、敵は富山方位より我に向つて行進中なり支隊は之れを攻撃せん

一、當大隊は前衛に任せらる依て第二中隊を前兵に任し殘餘は本隊とす

一、予は前衛本隊の先頭にあり

尙ほ敵を發見するの後は演習の都合上自分分は之れが指揮を離るゝ旨を示さる

是より先き假設的北軍一中隊(旗)は柴田氏に引率せられ遠く陣地を立野高岡間にしるん爲に出

發し、今や南軍は諸準備此にありて午后三時愈高岡に向つて行々警戒して進む、斥候は絶えず出され敵を偵察せしむ二時廿分笹川村に於て斥候始て衝突し爆然敵より砲發せらる蓋し此村は立野村の東南約百平米突にあり其地勢たるや蔚蒼たる森林團々として水田の間に点し加ふるに鐵道線路と高一米突斗ある畦畔は縱横に走れるありて實に天然の障礙をなす、此を以て敵は之を利用して隻影を止めず唯強力なる砲發處々に起り直に我前衛の側面を侵さんとするものゝ如し、我斥候は或は菜花に竄匿し或は松林を潜行しつゝ銳意敵狀を偵察して以て狀を具申せしかは第四中隊第二小隊をいち早く笹川村神社の方向に散開せしめ以て敵を砲撃せしめしに其持すへからざるを覺り稍退きて中保村による、時に土民報して曰く敵頗る多し若夫れ此捷徑をたどり彼の堤によりて窺ひ玉は、其實をいふ事易々

たるのみと斥候乃ち欣然として躍起し辛うして小徑を通り鐵道線路に近づけは果せるのみ敵軍一中隊斗りを認めたり、無事に苦みたる我本軍の此報に接するや驟然奮起して正に命の下らんとぞ俟つ、此時福見中隊長事の急なるを察して直に一小隊を立野村に南方に派し二小队を同一く村の東端に散開せしめ一躍して之を蹙殺せんとす、善哉我銳利なる戰闘力は急にして敵を退らしめたり今や敵は利を失ひ遠く退却するに及び我尖兵は再隊伍を整へ本街道を東進するに先に辛くも逃げおふせたる敵の殘卒再聚合して上北近村の堤に據る而りも道路言傳ふる如くんば大軍到りて之に加はれりと、蓋し上北近、福田一帶の地勢たるや一面高地にして越伏凹凸額上の皺の如く前面河を擁し後方又鬱蒼たる森林雲峯の如くに並列し其間穗屋伏屋の遠近に見ゆる菜花こと／＼しくさき満ちたるやと風光とあふ、福見中隊長勵聲劔をうざして軍を督す應戰

く頗る形勝れ地たり、然れども願て本隊の位置を窺へは實に不運なる哉四望濶開の田圃にして全く地物の利に欠如たるに加へて敵營より遙に低地なれば隻眼以て我本陣を俯下し得へく其行動は昭々歴々たり嗚呼此地に據りて此敵あり、此敵ありて此不運に陷る神策の妙計と絶世の勇氣に鞭せらるにあらずんば何ぞ夫れ功と萬一にをさむるをぬんや而るも快哉我軍の諸將萬計胸になりて勝算已に帷幕の内に決し喜色滿面に溢る、其令を下すや實に法あり、律あり、一系亂れず、一兵一卒に至まで沈重勇猛にして命令よく實行せられざるを以て一計一畫常に能く的中せるはありしうと今や猖獗を極めたる敵は此要害により卒然我前衛に向て有勢ある抵抗を試み死傷其數あり我前兵中隊は北陸街道を南北に展開し一は福田、上北近に向ひ、一は六家に向ふ、福見中隊長勵聲劔をうざして軍を督す應戰

是れ努む而かも刻一刻硝烟猛然として敵壘より起り般々たる砲聲山河に轟く此時に及んで本隊は漸く軍を進め來りて左右に伍間増加をあしめ此に於て稍疲勞せし先鋒も奮勵一番生氣百倍すしかれとも敵は死守して毫も退かず頑固ある抵抗を試たり偶我軍の左翼は敵の右翼に肉薄すると火急なりしかは其の守る能はざるを自覺し六家の橋を渡りて和田村に退く、右手己に欠けたり左手獨よく事に堪へんや頓に敵は銳氣を挫き軍を卷きて引上げ橋を毀棄して遠く逃亡す三時四十分ありき

にして地勢頗るよろし、宜あるかな敵是に陣せしと傳へるや、福見中隊長尖兵一小隊を以て辛うして橋を通過せしめ斥候をして頗る敵を搜索せしむ而も終に在らず禽鳥啗々徒に樹上に聲あり

然るに是より先に派したる我斥候は遠く高岡れ西端より狀報を齎す間に敵の一小隊意外に街道の右側約二百米突の堤上より顯はれて狙撃を試む、此に於て尖兵何れは躊躇すへき肅卒に電光の如く散開して應戰、一舉して之を紛囂せんとするに敵は早くも遁逃して其体影だにのこさず

元來此橋は我進軍の要路にあたり之の破壊によりて受けたる我軍の損害は實に驚くべきものありて存す士卒長驅して彼に尾せんとしてあらず

空しく怨を飲下するのみ各中隊此に隊伍を整正して其修繕を待つ凡そ三十分を要しめ、

凡て和田村は福田、六家の諸村よりは遙に高爽ならず兵氣大に沮喪し貌貌漸く疲勞の色あり然

に今や此快報を得られ尖兵は敵と衝突し硝煙
遠く杉松の間に棚引き流丸より一種の呻を
帯ひて頭上をうすめてさる方に四時廿分將率共
に腕を鳴り鬱勃たる英氣將に星辰を吞ずる
概あり、歩一步敵地に進入したりし福見中隊長
は前衛を街道の右に散開して北軍は本陣を正面
より衝かんとす蓋し北軍の中堅は市の西端四望
濶開せる高地にして地物の利用すへきものとて
は一も之れあるとなく唯約二百米突にして一小
河の前方に北流するのみ從て其橋を徹して肉迫
する我南軍を防止し殊死して此を守らんとする
もの、如くしかり、南軍の地勢は之に反して頗
る形勝の地たる前二回に於て北軍が占有せし夫
れにも増して數等の地利を有したり、若し夫れ
前兵中隊舉て散開し奮迅狂馳し殷々たる砲聲山
河を鳴動せしめ硝煙天に漲る間變現出沒以て一
大活劇を演じたりしを見れば蓋し思ひ半に過ぐ

るものあらんあり、
此時に當りて街道を左に敵の一中隊を横ざまに
進撃し來る茂木中隊長の二小隊大約百米突平方
の水田を挟みて幾重にも立重りたる杉林を利用
して神變鬼出中天より舞降り畢生の火力を示し
て突進す敵は倉惶隊を合して激烈なる一撃射撃
を試む偶南軍の背後黃旗驪鳳たるを見るや續て
豚鬱たる硝煙、忽にして爆然たる響を伴ひ榴彈
破散して甚く敵の散兵を傷み而かも敵は剛悍
頑として却らず、刻一刻機已に熟し南軍或は延
伸或は伍間に悉く開散して今や敵を三方より攻
撃粉砕せんとす黃埃濛々號嘯乾坤を振動し腥風
砂石を飛ばす、死屍丘陵と築き鮮血膝に及ぶの
情あり、茂木中隊長勵聲憤躍敵の右翼をつく事
愈急にして愈鋭く終に持し兼ねたる敵は一中隊
橋を徹して退却するを見て追躡鏖殺せんとす
るや躍進突撃は令は全軍を振はす將士此に踊躍

し此に狂馳し鯨波百雷の如く天地爲めに搖動し
敵壘將に拔けんとして嚟明たる叭聲一吹長く休
戦を報しぬ、兩軍劍芒を鞘に緑草をしまて一
番長空に嘯けは夕陽雲を帶して二上山林下風と
こしへに清し、

四時四十分高岡市に入り百姓町に休憩すること
半時此間に磯田大隊長諸幹部を集めて講評を試
みられ終りて更に各中隊長より夫々復演せしむ
六時各隊營舎に就く、

廿八日、曉來稍曇る乃ち外套を着て七時廿分出
發して戸出に向ひたりしに果して細雨瀟々とし
て至る、羊腸なる道の左右、菜花千里に連り滿
目黃輝々たり九時廿分戸出驛に着するに雨漸く
晴れて片雲高く頭上に搖曳す、町に入るに先ち
東端の郊外に於て方陣を作り、大隊長、此より
敵前の動作に移るべきことを命ぜられ且つ自分
は今より審判官の位置に立つ旨を示さる、

此に於て福見中隊長は代りて大隊(實員二中隊)
を指揮し演習の部署、命令を示され且つ本日の
演習も昨日示されたる一般方略に基くものにし
て當大隊は即ち北軍より派遣せられたるものと
すと、終りて町に入り休憩す

十時十分第四中隊は前哨中隊とあり石丸村の東
端に到り敵に對して警戒隊形をとる第二中隊は
戸出町南端に於て前哨本隊の位置を占む蓋し昨
夜此地に駐留せしものと想定せしによる、前哨
中隊及び小哨よりは絶へず斥候を出さる一斥候
來りて狀を具して曰く油田村の西方約四百米突
にして敵の一隊二分して至るを見ると正午に至
り敵の斥候は遠く菜花に伏し麥薊に潜みて至り
我軍を窺ふ頗る機敏なり十二時廿分敵の尖兵油
田村に入る之に先ち我前哨は三郎丸の西端に形
勝の地を撰みて以て歩哨線を張りたりしが先に
派したる斥候は相衝突して終に砲發す此時已に

北軍は前哨を徹し油田村に進む敵愈迫り愈嵩肅にして誠に其侵しがたきものあり然れども勇悍なる北軍は亦以て之に遜ぐす衆皆誓て揚言すく丸は以て額に受けよ必ず背に受けざれと以て其氣概を見るべく聚散離合一に嚴命之れ従ひ一進も急にせず一退亦私を挾まず堂々敵に向て進む、然るに敵南軍は既に業に油田村の大半を占領し天然の地利を應用して頻に奇正を旋らす其驀然油田小學校の北方に當りて一整射撃するに及びては北軍は右翼大に損害を加へるゝものあり、蓋し兩軍此に開戦し英氣勃勃腕熱し眦裂く而かも南軍の進撃一に猛然、首尾亂れず北軍の右翼、無念、爲に背進を命せられ細田村に扼止す、此時に中りて本隊は茂木中隊長によりて引率せられ整々勇を鼓して至る革車轟々砂塵高く飛むて天日此に曇る、

て南軍に迫らんぞす、硝烟地を蔽ひ殷聲天に轟く敵は已に南方の台地と堤防とを占め北方又要害なる障礙を奪ひ益猪進して北軍の右翼に突入し來る北軍再び退く、而かも終に窮鼠は怒を以て打立ちたる福見氏は勵聲劍戟を振つて軍を合せ頻に一齊射撃を命ぜしめ次ぎて奮迅狂馳し再び油田村の東端に迫らんとするや北軍の本隊は已に到達し悉皆散して第四中隊の左翼に伍間増加を命ぜしぬ蓋し南軍は要害なる障礙を擁し北軍の右翼を攻撃する間に北軍の左翼は猛烈なる火力を以て敵は右翼と散々に打破りしをすらす追尾踏躡せんとせしものゝ如し、然るに敵は急に軍を合せて必死の防禦をなし應戰砲發時を移すかゝる間に萬計已に熟したりけむ忽爾として顯はれ至る敵の全軍銃尖揃へて我を狙撃す、噫猛虎既に蝟を出てぬ蛟龍いづで遶巡せんや、堤を一蹶して油田村に入りたる我散兵は渾

身の勇を傾斜して奮戰激闘更に小堤を占領し敵に迫る實に百五十米突内にあり紫電野を劈き叫聲山岳を搖し天柱此に碎け地軸亦折れんとす、接戦すると十數分壯觀絶快此に極まれる哉偶敵の驍將目下氏大喝一聲奔然悍馬の如く冲天に舞つて先頭に蹶起それは敵の全軍狂獅の勢を奮うて突貫を試み、轉慘憺硝烟濛々、肉飛び骨碎け関聲天に震ひ劔鎗相摩す、急ち鐵笛長く振へて休戦を命下る、此に於て劔鎗先づ鞘に安し腥風肌膚を撫つれば將士滿面媮婉溢る時怡も一時廿分あり兩軍此に隊伍を正し彼と西より我は東より相會整列互に捧銃を以て敬禮し吼聲一吹嚟朗として轉征夫を慰籍するものゝ如く心緒始めて悠如たり、

次きて大隊長諸幹部を集めて嚴密なる講評ありたり左に其要を記さん

一予は初めより北軍にありしを以て兩軍の相

近接するに至るまでは南軍の處置動靜に就ては至當なる講評を命ず能はざりし雖も北軍に就ては終始其動作を實見せり、而して昨夜來駐軍せしものとの想定に依り北軍が前哨の位置に就き動作より予は其指揮を離れ審判の位置に立てり

一北軍前哨本隊と前哨中隊との距離并に前哨中隊より前方の各哨の距離間隔共に遠に過きたるやの觀あり本日の演習の如きは敵は近距離にあるを以て大警戒最も嚴密なるを要す殊に昨夜來駐留せしものとすれば愈其不當との考を増大せしむ

一兩軍共に分隊長以上各幹部は共に其職分を完うせんと留意せしものゝ如きは大に賞するに足ることならん

一敵を發見してより南軍の尖兵は稍躊躇せし風あり何とあれば敵は衆多散開して目前

に迫るゐるにも係らず之れに對し何等の處置をも爲さざるものゝ如し或は尖兵長に報告せしう尖兵長は前兵長に報告せしう總て機を誤らす報告せしものとするは各部指揮者れ處置甚た緩慢なり彼の場合に於て然も僅少なる尖兵の直後十幾米突を隔てゐるに前兵中隊の密集れ儘停止しあるといふ如きは尖兵の敵に應戰せさるゝと共に或は伏兵の戰法とも云ふべき此場合に於ては報告の有無如何に拘らず全然同意を表する能はず

一兩軍共に敵の兵數、地形れ利害に鑑み進むべくして進み退くべくして退き敢て無謀の舉お出てざりしは更に一段の進歩といふへし

一其他演習一般の處置動作に就ては大体に於て同意を表す

終りて中隊長各部隊に向つて復演注意する所あ

りて此に休息すると凡一時半にして更に出發して出町に入り又休憩すると三十分宿營地福野に着すれは五時三十分ありき

廿九日、快晴いはん方なし午前七時、擇甲結束して魏狄停車場に趣く、炊烟搖曳林間を掠め神氣爽にして肺腸更に清し、已にして瀛車一聲列車轉して西すれはあはれ福野も一夜の夢と消え失せて車早くも福光に達しぬ衆此に下りて整々勇を鼓して二俣峠に向ふ日愈高くして愈熾るか如く熱汗滴々戎衣を絞るに及ぶ加之山高く聳えて頗る峻嶮を極め崎嶇羊腸たる山峽憇ふに蔭かく汲むに水あし然れども鐵脚毫もひるまず一氣馳驅して絶頂まで追上り始めて休息し汗々ぬくへは廣濶なる越中の谷は近く双眸の間にありて山海の風景實に畫けるか如し此間或者は谷に氷を嚙り或者は異香をとめて奇花を摘み或者は綠蔭風清き處自然れ美妙に謳歌す此に於て大隊

編制を解かれ中隊各個行軍に移る休憩する事大凡三十分にして再進行を始む

今や衆漸く疲勞し背囊頻に重量を加ふ偶路傍二三丁毎に觀音の石像を立て彫するに番號を以てせりしを物忘れにもとて數へもてゆけは足先つ二俣村に入ふんとして三十三番を數へぬ日恰も亭午にあり乃ち本泉寺に入りて休息し飲團を嚙り饑をしのぐ

由來此寺は北陸の名刹にして本願寺の蓮如上人が舊跡あれば遠國近國の門葉の參詣の足を絶たざる處、衆此境内に散して肩腰を休め或は上人の墳墓に詣し或は庭園の清致を尋ね約一時間にして出發す

醫王高く聳て殘雪徒に衆眈を注かめ嘯鳴蛙聲偶行客の耳を傾けしむ道程はより平坦にして歩行頗る容易く足輕くして地を踏むとしも覺えず山峽れ樹木に詩興を催し田夫う俗謠に心緒を

暢ぶれば身は己に潺湲たる淺野河畔にあり喇叭嚙朗として響長く歩武肅々校門に入れば正に午後四時なりき中隊此に編制を解りれ行軍全く此に結了を告ぐ（夢人）

之れと同時に校門を左折せる所の乙部は方向を天神町にとり鈴見橋を渡り舊道福光往來を進軍す、行歩己に山路を辿れば朝暾山を離るゝと數尺、巒峰連山の綠濃さその中に一際立ちて醫王の山嵐徐に紅顔れ少壯う顔なでゆくもいと快く、幽豁に老鶯れ名殘としげに囀つるも哀れにモ亦面白く、歩武進むで今や午前十一時河北郡醫王山村字二俣に晝食を喫するに至る、正午十二時同地を發し二俣、大俣、小俣を越えゆけば般若野の古戰場は眼下にあり更に眼を東、北に轉すれば中越の廣濶なる平野は左方日本海岸より右方東山道の境界に至るまで双眸の中に横はり山川草木手に取りて談ずべし若夫吾人の鐵

脚今卅時間にして彼の山、彼の水、彼の野、彼れ草を踏あらさんずるを豫想して一氣宙を飛びて福光に達せしを見れば誰か快哉と絶叫せざるものぞ——午後四時此處を宿營地として舍る、

廿八日、夜半より細雨瀟々として至り朝來はれやう薄墨色の雨雲は寸分もあけず大空を蔽うて世は大霧の海にたゞよへる時鏘として響ける喇叭は數百の貔貅を一整に起たし、午前七時愈同地を出發せしに雨いよしきりつれと何の物かはと進みゆくある若き武夫か軍歌の聲のいと勇ましく整々歩いて午前八時半福野町に着す之より戰鬪行軍に移る此時日下中隊長大隊命令を傳へて曰く

一 北軍の一部本朝高岡を發し福光に向て進行すとの報を得たり、大隊は之を迎撃せん

一 第三中隊を前衛に任す第一第二第四中隊を

本隊とす、(第二第四中隊は仮設) 一 前衛は午前九時當地を發し本道路を高岡に向て行進すへ

一 余は本隊の先頭にあり

うくて福野町を發足して即ち戰鬪行軍に移り警戒頗る嚴にして午前十一時出町に着し晝食す、十一時十五分此町端を出て、五六町初めて我の前衛は敵の一部を發見せり乃ち前衛の一部を展開して之を撃進す本隊は町端道路の右側に停止し敵の動靜を窺ふ、正午十二時前衛及本隊は共に前進せしに十年明村を去る北方約四五百米突の地に當り敵の斥候とも見るべきものを發見す、第一中隊第一小隊は道の左側に散開して敵の一部と衝突し砲發し茲に初めて戰端は開われたり、若夫接衝應防の狀況に至りては實に甲部より報道するが如くにして更に此に贅せざるべし、唯夫特筆大書して忘れ難きは休戰の叫聲と

共に兩軍の將士滿面微笑を堪へて畦疇の間暫し卷甲を寬めて頻りに勇士の功績を稱賛せし一事即ち是れ、

二時三十分油田村を發し凱歌揚々高岡に向ふ綠蔭芳草の間一道を辿りて戸出町に小憩して午后五時四十分夕陽西に暮くの頃高岡市に着し各宿舍に就く

廿九日 快晴いはん方少し午前六時高岡を發し立野村に至りて午前九時乃ち北軍の前衛命令下る

北軍前衛命令

一 當大隊は前衛に任せらる

一 第一中隊前衛前兵

一 第二第三第四中隊前衛本隊(第二第四中隊仮設)

一 尖兵の正面は本道の左右側約三百米突を搜索すへし

一 予は前衛本隊の先頭にあり

午前八時立野村を發し九時十五分敵の一部と我尖兵は衝突し砲聲四隣を震はす此の時我軍の前兵の一小隊は本道の右側田家の塙垣を擁して砲撃を試み尙ほ一ヶ小隊を伍間に増加して頻に應援せしむ然に敵は道路の右側に當り前方の森林に伏して變現出沒巧に我に當る我更に一ヶ小隊をして左側人家の林樹を利して之を攻撃せしむ此時北軍前衛中隊は第一第二小隊の右側に散開せるものを集め第二第三第一の各小隊及前衛本隊は一定の距離を隔て、本道を前進するに敵漸く退却するを見て機逸すへからずとあし之を追尾すると約三百米突にして荒又川れ橋梁は敵の破壊する處となり渡ると能はず此に於て前衛中隊の大部を右側に展開し其の一部として道の左側に河を隔て、相對せしむ敵は約三百我は前衛本隊をして左右前兵中隊を助けしめ軍を挙げ

て極力砲撃す此間に橋梁は架せられしを以て左右二側の兵を合し第一中隊第三小隊をして左側掩護射撃をなさしめ此に一躍突撃せんと期するに善哉く機已に熟し我火力は非常に敵を損傷せしめ勇猛なる敵軍も稍遅色あらしむるに至り叭聲短く耳朶を打て來れば硝烟四方に漲り天日爲に曇る今や鯨波地を捲いて遠く去れば壯夫劒をかざして敵壘に立つ噫壯哉快なるうな九時五十分休戦の令下る、
夫れより福岡を去る數町にして晝飯を用ひ午後一時石動町に着す休息すると三時に及び、時や之れ漁笛一聲後に残りて我軍は歸途に着くの時、

噫二泊行軍夢の跡を辿りつれば行春れ影と共に淡く頭を回らして大空に嘯けは足已に校庭老松の蔭をふむ正に午後五時なりけり



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せむ
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せざる姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

商法施行
前設立
同縣同市高岡町三十四番地

石川縣金澤市早通町五十六番地
同縣同市火水町二番丁二十九番地

活版合資會社

第四高等學校校友會

